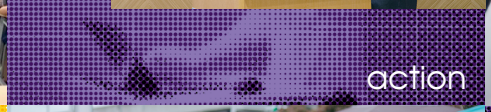
筑波大学
University of Tsukuba

2018.June

T-ACT

2017年度 活動報告書

つくばアクションプロジェクト



TSUKUBA ACTION PROJECT REPORT

目　次 *-T-ACT 活動報告書 -*

はしがき

アクション / プラン

サイエンス・コミュニケーショントレーニング 5（16036P） …… 1
ソーシャルビジネス講演会～なぜ彼らは社会貢献を仕事にしたのか～（16039A）…… 3
みんなで幸せになろう筑波支部～ピアサポート制度を立ち上げよう！～（16042A）…… 5
つくばテーブルゲーム交流協会（16045A）…… 7
ゆあらいふ～大学生・社会人と考えるジブンの大学受験とその先～（16046A）…… 9
多様化が進む日本を考えてみよう―映画「HAFU」上映会―（16047A）…… 11
Tsukuba × Sweets project（16048A）…… 13
学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について知ろう～（16050A）…… 15
ミニオープンキャンパス（16051A）…… 17
藝術専門学群のエリアに足湯を作ろう！（16052A）…… 20
かゆいところに無機化学（17001A）…… 23
Omochi Language Club Spring 2017（17002A）…… 25
盆 LIVE2017（17003A）…… 27
Teens Cafe Vol.2（17004A）…… 30
おもしろ@研究会 ver.2（17006A） …… 32
あなたの小説が読みたい！
――第十回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集――（17007A）…… 34
【芸専通信 '17】芸専 1 年の作品お見せします！（17008A）…… 36
つながろう！楽しもう！福島ジュニアフェスティバル 2017（17009A） …… 38
学生プロジェクト Nature Human Linkage（17010A） …… 40
みかんジュース飲み比べ（17011A）…… 42
手作りグッズを作る会（17013A）…… 44
食について学ぼう（17014A）…… 46
つくば MVP ～ Attracting! ～（17015A）…… 47
キャンプで語る（17017A）…… 49
学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について伝えよう～（17018A）…… 51
English Camp（17019A） …… 53
語り場プロジェクト～分野／学類を越えた繋がりの場～（17020A）…… 55
ピアサポートでつながろう！～みんなで助けあえるキャンパスを目指して～（17021A）… 58
進め！博士号（17022A）…… 60
T-1グランプリ 2017～つくばでお笑いグランプリを～（17024A）…… 62
はじめてのにほんしゅ（17025A）…… 65
つくば MVP ～ Acting! ～（17026A） …… 69

香風寮学習ボランティア　vol.3（17027A）…… 71
Tsukuba × Sweets project（vol2）（17028A）…… 72
学生プレゼンバトル 2017（17029A）…… 74
ゆめ花火プロジェクト 2017（17031A）…… 76
【芸専通信 '17】vol.2（17032A）…… 78
巨大盤上遊戯企画第 1 弾「人間ガイスター」（17036A）…… 80

ボランティア

平成 29 年度茨城県警察大学生サポーター（16057V）…… 82
外国人児童・生徒の学習サポート（17001V）…… 83
一緒にサッカーしよう！（17003V）…… 84
第 11 回つくば路 100 ㎞徒歩の旅 2017（17004V）…… 85
ボードゲームのひろば（17005V）…… 89
トワイライト音楽祭　2017　～よろずの灯り～（17007V）…… 91
塾に行きたくても行けない子どもたちのための無料塾（17010V）…… 93
第 3 回　つくば小中学生将棋大会（17013V）…… 95
つくばサイエンスツアー小学生対象工作実験教室（17014V）…… 96
放課後、子供と一緒に過ごしてくれるボランティア募集（17017V）…… 97
サマーアートキャンプ 2017（17019V）…… 98
第 8 回子どものための救命教室（17023V）…… 99
第 10 回子どものための救命教室（17030V）…… 100
土浦市立神立小学校　養護教諭の活動補助（17033V）…… 101

2017年度　実施状況報告　～10年の歩みを振り返って …… 102

編集後記

※報告書内にある学生の学年は活動終了時のものです。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」（T-ACT）の『活動報告書（2018 年 6 月発行）』をお届けします。本プロジェクトは、2017 年度に 10 周年を迎えることができました。2008 年度（平成 20 年度）に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に採択されて以来、学生の自主性と社会性の育成を図ることを目標に活動を続けてきました。2011 年度末の学生支援 GP の終了後は、筑波大学における人間力育成支援事業の一環として継承され、また 2013 年度にはボランティアの枠が加わり、さらに 2014 年度には T-ACT 推進室が発足するなど、徐々に体制を整えながら継続してきました。プロジェクトの企画・継続・発展にご指導・ご尽力いただいた学内外の皆様、活動を大いに盛り上げてくれた学生および卒業生の皆さん、コンサルタントやアドバイザーを始めとするスタッフの皆様に改めてお礼を申し上げたいと思います。

T-ACT において大学公認の活動として承認されたアクション企画は、10 年間で 620 件ほどにのぼります。また、T-ACT ボランティアとして実施された企画は、5 年間で 187 件ほどです。本報告書には、主に昨年度に実施された企画のうち、活動報告書が提出された企画 52 件が掲載されています。

2017 年度も文字通り多種多様な活動が実施されました。最近の傾向として、学群の 1 年生が積極的に企画を出してくれることがあります。筑波大学の独自プロジェクトとしての T-ACT が学内における認知度を増し、入学と同時に興味をもってくれる学生が増えたものと解釈しています。因みに、本冊子における学群 1 年生がプランナーを務めた企画（ただし、企画時）を挙げてみますと、「Tsukuba × Sweets project」「藝術専門学群のエリアに足湯を作ろう！」「【芸専通信 '17】芸専 1 年の作品お見せします！」「つくば MVP ～ Attracting! ～」「学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について知ろう～」「手作りグッズを作る会」などがあります。いずれも、人まねではないユニークな発想にもとづく企画でした。一方で、大学院生による企画にも印象に残るものがあります。「多様化が進む日本を考えてみよう―映画「HAFU」上映会―」「学生プロジェクト Nature Human Linkage」「学生プレゼンバトル 2017」などですが、学群生にはない角度からの問題設定を見ることができます。下半期の活動報告会で最優秀賞に輝いたのも、やはり大学院生による「T-1 グランプリ 2017 ～つくばでお笑いグランプリを～」でした。この「T-1 グランプリ」は、プランナーが学群生のときから 4 年がかりで大事に育ててきた企画だけあって、企画としての規模や厚みが半端ではありません。最優秀賞もむべなるかなという思いをもちました。また、「あなたの小説が読みたい！―第十回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集―」は、「第十回」が示すように、T-ACT の発足以来、毎年プランナーを変えながらも活動を継続させてきた企画です。特別功労賞にも値すると考えています。

昨年の 12 月に「社会につながる T-ACT ―10 年の歩みとこれから―」というテーマのもと記念シンポジウムを開催しました。そこでは、活動にかかわった現役学生と卒業生、支援体制の確立に尽力した教職員が会し、10 年間の成果と制度の意義について確認しました。T-ACT の次の 10 年に向けて、皆様のこれまで以上のご支援とご助力をお願いいたします。

2018 年 6 月

T-ACT 推進室長

加賀信広

サイエンス・コミュニケーショントレーニング５（16036P）

T-ACT プランナー　荏原　充宏（大学院数理物質科学研究科）

活動内容

一般の人々が、科学技術をめぐる問題に主体的に関与していける社会を確立することは、現代における喫緊の課題であり、とりわけ次世代を担う学生がサイエンス・コミュニケーションの意義を理解し、実践的なスキルを身につけることは重要である。2014年、2015年、2016年春学期に引き続いて、国立研究開発法人物質・材料研究機構 国際ナノアーキテクトニクス研究拠点（MANA）は、本学との連携の上で、学生のサイエンス・コミュニケーション能力の向上の機会を提供している。よってこれを利用する形で、サイエンス・コミュニケーショントレーニングの一環として、関連のアウトリーチ、サイエンス・コミュニケーション、広報活動全般に参画する。具体的には、イベントの運営やホームページ、SNS、刊行物、ビデオ等の各種媒体を通じた情報発信等を行う。なお、これまで参画した学生から、一般市民や研究者との交流をつうじて、コミュニケーションスキルを深化させることができ、就職活動や国際協力活動等で高い評価を得られた旨報告されていることから、学生が自身と社会とのつながりについてより広い見地から考察を深め、社会へより積極的なはたらきかけをしていけるように、念頭に置いて活動する。

活動計画

下記行事等へ参画する：

11月12日（土）・11月13日（日）　つくば科学フェスティバル2016（主催：つくば市・つくば市教育委員会）への出展：事前準備として、キャラクター「スマポレンジャー」のコスチューム等制作やブース運営計画立案を担当する。イベント時は、ブース設営・実験デモや研究内容説明などの来場者対応・ブース後片付けを行う。

11月23日（水・祝）茨城空港にて開催される科学イベント（正式名称未定、主催：茨城県）への出展：事前準備として、イベント参画の計画立案を担当する。イベント時は、設営・実験デモや研究内容説明などの来場者対応・後片付けを行う。

その他、広報誌 CONVERGENCE（原則年３回発行）の取材（国内外の著名・若手研究者へのインタビュー・記事執筆）や、広報関連資料のイラスト・デザイン制作、セミナー企画・運営等について、随時に担当する。

活動期間

平成28年10月１日～29年３月31日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：新山瑛理（数理物質科学科博士課程２年）、中川泰宏（数理物質科学科博士課程３年）、栗本理央（数理物質科学科博士課程３年）、臼田初穂（数理物質科学科博士課程１年）

備考

・学生の皆さんは、物質・材料研究機構の研修生として登録されます（既に、ジュニア研究員として登録されている方は除く）。研修生登録にあたっては、所属する学群長もしくは学類長に許可をいただいた上で、所定の書類を物質・材料研究機構に提出する必要があります。
・国立研究開発法人物質・材料研究機構は国の研究機関であり、本企画に係る一切は営利目的の活動に該当しません。イベント参画や広報誌等による一般国民とのコミュニケーションは国からの要請に基づいて行われており、すべての情報は無料で提供されています。
・学生の皆さんは、活動にあたって「付帯賠償責任保険」に入る必要があり、その費用（年間340円）を自身で負担する必要があります。

活動報告

活動成果

11月12日～13日のつくば科学フェスティバルおよび１月17日の笠間南小学校の授業に参加し、子供たちや一般市民の方々へ、病気の診断・治療のための医療材料へ応用できるスマートポリマーの紹介を行いました。科学フェスティバルにおいては、設置したブースにおいて、スマートポリマーがどんな物質であるのか、どのような応用方法を研究しているのか理解してもらうために、簡単な実験やプラバンづくりを通して説明を行いました。子供たちに親しみやすいよう数人の学生はレンジャーに扮し、子供にも大人にも喜んでもらえました。小学校の

授業での活動は、材料の説明と学生扮するレンジャーによる劇を合わせることで、子供たちの興味を引きつつ研究紹介を行いました。学生たちはどうすれば飽きずに聞けて理解しやすいか、また説明の順序や言葉遣いに注意して活動を行うことで、サイエンス・コミュニケーションの重要性を実感するとともに、日ごろの自分の研究を紹介する場においても、聞いている人が理解しやすいか注意して話すようになりました。

今後の課題

参加者のほとんどがレンジャーとして動き、ブースの対応や裏方の人手が不足しがちでした。裏方も含め、想定以上の人集めの必要性を感じました。

経験者からのメッセージ

活動そのものはもちろん、それを通じた人間関係の構築が大変魅力的です。

運営者側から見たパーティシパントの変化

担当の仕事以外にも臨機応変に他の仕事を手伝ったり、説明中に相手が分からない様子であれば違う言葉で言い直すなど、状況を見て自分ができることを行うようになりました。相手に説明するためには自分が内容を理解していないとできないため、自身の研究の理解を深めることの重要性を認識しておりました。また、日常の中でも、自分が相手に説明する立場に立った時、自分の説明をどうすればわかりやすく伝えられるか考えるようになりました。

ソーシャルビジネス講演会～なぜ彼らは社会貢献を仕事にしたのか～（16039A）

T-ACT プランナー　井本　直花（人間学群教育学類3年）

活動目的

現在アメリカやイギリス・発展途上国などでは社会的課題の増加や多様化に伴い、元来社会的課題の解決を担ってきた行政だけではなく、事業活動そのものが社会的課題の解決につながるソーシャルビジネスが発展し広がりを見せている。しかし、日本国内においてソーシャルビジネスは徐々に着目されつつはあるが、人材面や資金面において課題を抱えている。大学生の立場からソーシャルビジネスを考えると、「社会に貢献したい」という気持ちが強くても、社会的企業や NPO は収入が安定しておらず就職先の選択肢として考えにくいという現状が考えられそこは筑波大生においても現状がみられる。そこで、ソーシャルビジネスや社会的企業について、その事業性の高さや働く人々のキャリアモデルの多様性など正しい情報を伝えることで学生の意識を改革し、より広選択肢から進路選択を行えるきっかけが必要であると考える。

目的：

イベントを通じてまずは筑波大生に「社会貢献ってかっこいい！」と思ってもらうこと

そのうえで、ソーシャルビジネスや NPO を含またより広い進路の選択を行うきっかけをつくり、筑波大生の社会貢献の輪を広めていくこと。

一大イベントである11月の講演会の成功

ソーシャルビジネスに興味のある筑波大生が集まれるコミュニティの形成

活動計画

10-11月　twitter・facebook での講演会の広報
11-3月　twitter・facebook での広報
11月27日　講演会
12月　講演会の振り返り
1-3月　座談会をやるかどうか検討中

講演会
場　所：3A204、3A207、3A209
登壇者：一般社団法人 RCF　プロジェクトマネージャー　若田謙一様
認定 NPO 法人 Teach For Japan　代表理事　松田悠介様
株式会社 LITALICO　取締役　中俣博之様
株式会社ボーダレス・ジャパン　代表取締役副社長　鈴木雅剛様
コンテンツ：第１部　登壇者による講演
第２部　パネルディスカッション
対象者：筑波大学外学内の方問わず
・facebook イベントページ
https://www.facebook.com/events/553293971546177/
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeTxXm45BNtLox4u09VagM9DDS6ioYR3oAdYeJ0jx2BNitbNQ/viewform
※ facebook イベントページで「参加予定」をクリック＋上記 URL の申し込みフォームでの参加登録にて予約完了となります。
座談会…学内にて月に一度、貧困・地方創生・途上国支援・子育て・保育などの分野において、採算の見込みが低いとされる社会的課題を事業化したソーシャルビジネスの先行事例や、そのような社会的取り組みを支援する制度・仕組みを紹介する。
また、知識を得るだけではなく、参加者自身が学びを深められようなワークを行う。

活動期間

平成28年10月１日～29年３月31日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：西森千咲（申請時：心理学類）
P：久保田優（申請時：就職課）

活動報告

活動成果

10-11月　　twitter・facebook での講演会の広報
11-3月　　twitter・facebook での広報
11月27日　　講演会
コンテンツ：第 1 部　登壇者による講演
　　第 2 部　パネルディスカッション
対象者：筑波大学外学内の方問わず
場　所：5C216
登壇者：一般社団法人 RCF　プロジェクトマネージャー　若田謙一様
　　認定 NPO 法人 Teach For Japan　代表理事　松田悠介様
　　株式会社 LITALICO　取締役　中俣博之様
　　株式会社ボーダレス・ジャパン　代表取締役副社長　鈴木雅剛様
12月　　講演会の振り返り上映会

今後の課題

講演会での人手不足があったので当日スタッフを募集すればよかった
雨天時などの対応など参加者への誘導などの想定不足

経験者からのメッセージ

いろいろなアドバイスやサポートのおかげでやりきることができました！ぜひやりたいことに挑戦してみてください！

運営者側から見たパーティシパントの変化

ソーシャルビジネスがどういうものなのかを知ってもらうことができた

みんなで幸せになろう筑波支部～ピアサポート制度を立ち上げよう！～（16042A）

T-ACT プランナー　佐藤　ひかり（心理学類4年）

活動目的

ピアサポートとは、学生同士の相互援助活動のことです。

「悩みはあるけどたいしたことないし…」「困ってはいるけど、学生相談室にいくほどじゃないなぁ…」と、学生生活で悩みを抱えていても、相談機関を利用しにくいと感じている学生は少なくないのではないでしょうか。そういった方に、もっと気軽な同じ学生に相談できる場を提供するピアサポート活動は、他の多くの大学では制度として確立し、実施されています。

これまで本学では、学類による新入生歓迎・サポートなど自発的な支えあいの活動は行われていますが、ピアサポート制度という、確立した制度や通年的に行われている学生支援活動はありませんでした。そこで、本学の特徴を生かしながら実情に即したピアサポート制度の構築を目指して活動を行っていきます。

具体的には、本学の特徴や実情に即したピアサポーター制度はどういうものかをみんなで考えていきたいと思います。そして、可能なところから実際の活動を行い、制度設計や活動プランを考えていきます。

仲間同士で支えあい、みんなで幸せになりましょう！

活動計画

基本的な活動としては、12月から約半年をかけてピアサポート制度の立ち上げについて話し合いを行います（制度設計）。そして、可能なところから実際の活動を行っていきます。

具体的には、以下のような点の検討と、関係する活動を行います。

1．定期的なミーティング（１～２週間に１回程度の会合）
2．情報収集（先行導入している代表的な大学からの情報収集。可能なら視察の実施）
3．ピアサポートの活動形態の検討と活動場所の整備（関係部署と打ち合わせを行い、現状で可能な活動場所や活動内容、活動範囲を決定し可能なところから順次実施）
4．本学での講演会の開催の検討（時間的に可能な場合には講演会を実施）
5．ピアサポーター養成講座の施行（ピアサポートを行うピアサポーター養成プログラムを実際にいくつか実施）

活動期間

平成28年12月１日～29年５月31日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：石橋碧（心理学類４年）、北川慶樹（心理学類４年）、五味奈々子（心理学類４年）、玉田透子（心理学類４年）、本多茉莉（心理学類４年）、比嘉真理（人間総合科学研究科修士課程２年）、菅原大地（人間総合科学研究科博士課程３年）

P：杉江征・田中崇恵・田附あえか・坂本憲治（人間系・保健管理センター）

備考

必要な経費については、パートナーと相談して工面する。

活動報告

活動成果

ピアサポート制度や他大学の現状について学ぶことを中心に活動を行いました。具体的には以下３点を行いました。

・定期的なミーティング
・ぴあのわ（全国のピアサポートチームによる活動報告会＆勉強会）への参加
・ピアサポート勉強会の企画・実施

これにより、ピアサポート制度やピアサポート組織の運営についての理解を深めることができました。

今後の課題

ピアサポート制度についての理解は深まりましたが、本学の実情にあったピアサポート活動の検討や実施にまで至れませんでした。

本学ではどのようなニーズがあり、どのようなピアサポートが可能なのか。また、ピアサポート活動を行うにあたり、どのようなピアサポーター養成制度が必要なのか。実際にピアサポート制度を立ち上げていくにあたり必要な点を今後、検討していこうと思います。

経験者からのメッセージ

丁寧に相談に乗ってくれるパートナーがいらっしゃると活動がスムーズに行えると思います。

運営者側から見たパーティシパントの変化

参加者は数名増えましたが、4 年生や院生が多いのが課題です。

T-ACT に関する感想

資金援助をしていただけると嬉しいです。

つくばテーブルゲーム交流協会（16045A）

T-ACT プランナー　高野　大（比較文化学類4年）

活動目的

10年後にゲームを通して人と人が出会える街を生み出すことを目標に活動します。テーブルゲームにはさまざまな種類のものがありますが、その最大の長所は遊びながら対面的なコミュニケーションをとることができる点にあります。見知らぬ人とも楽しむことができ、万が一言葉が通じなかったとしても交流することのできる可能性があります。論理的思考力、集中力、空間把握能力、記憶力や、指を使った細かい動きを必要とするため、知育や老化防止にもつながります。つくば市は様々な地域から人の集まる街です。多様な地域の文化を継続的に発信することで、様々なバックグラウンドをもった人々が交流する場を生み出し、つくばならではの街づくりをしていきます。

息の長い活動にしていきたいと考えていますが、初年度は第一歩として３つの交流イベントを軸に、学生、留学生、地域住民が老若男女問わず気軽に交流できる場づくりに取り組んでいきます。

活動計画

１）夜のゲーム会　場所：Tsukuba Place Lab、時間17：00〜21：00

毎月20日前後。３月は20日月曜日、４月も20日木曜日。

様々な地域・ジャンル・時代のゲームの魅力を発信するとともに、多様なバックグラウンドを持った方々に交流の場をつくりだすことを目指します。

２）つくば駅前ゲーム会　場所：Bivi つくば２階　筑波大学サテライトオフィス

毎月10日前後。子供からお年寄りまで楽しめるゲームを紹介します。世代を超えた交流の場にします。子供が楽しめるルールの簡単なものから、大人が全力で打ち込めるゲームまで、様々に扱います。

３）親子のゲーム会などのテーブルゲームを使ったイベント

２月には「つくばゲームまつり―将棋の古今東西―」と題して、将棋・チェス・シャンチーとその仲間達の紹介をしました。留学生によるレクチャーもあり、文化の波及も感じることのできるイベントになりました。４月には「親子のゲーム会」と題して、親子で楽しめるゲームの紹介を地域の絵本屋さんで行います。絵本屋さんに因んだ、絵柄のきれいなゲームを中心に扱います。

活動期間

平成28年12月20日〜29年６月20日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：福田哲郎（比較文化学類３年）、野崎凌太（比較文化学類３年）、印部仁博（人文学類４年）、坂井樹生（心理学類４年）、新冨健太（工学システム学類３年）、亀沢和史（工学システム学類３年）、藤井康丸（物理学類４年）、吉川健人（生物学類３年）

P：小屋一平（グローバル・コモンズ機構）

活動報告

活動成果

１．開催したイベントと参加者数

1/12	朝のゲーム会 #1	２人
1/13	夜のゲーム会 #1	４人
1/19	朝のゲーム会 #2	４人
1/26	朝のゲーム会 #3	２人
1/27	夜のゲーム会 #2	４人
2/2	朝のゲーム会 #4	１人
2/9	朝のゲーム会 #5	１人
2/16	朝のゲーム会 #6	１人
2/20	夜のゲーム会 #3	６人
2/23	朝のゲーム会 #7	１人
2/26	つくばゲームまつり	31人

ふるさとつくばゆいまつりへの出展　22人
3/20　夜のゲーム会 #4　4 人
4/10　つくば駅前ゲーム会 #1　20人
4/20　夜のゲーム会 #5　7 人
4/30　親子のゲーム会　9 人
5/9　つくば駅前ゲーム会 #2　11人
5/19　夜のゲーム会 #6　6 人
5/27　つくば駅前ゲーム会 #3　39人
6/8　つくば駅前ゲーム会 #4　29人

２．広報活動

・しろこま通信…毎月発行 vol.1-4、配置場所―学内学生掲示板、筑波大学サテライトオフィス、市立中央図書館、TsukubaPlaceLab、えほんやなずな、市民活動センター、研究学園駅前公園など設置場所を開拓していった。
・イベントごとのチラシ…つくばゲームまつりのみ単発でチラシを製作し、しろこま通信設置場所の他に地区交流センターなどに持ち込んだ。
・Blog「しろこまブログ」…イベントの案内や活動報告などを積極的に行った。
・SNS…FaceBook と Twitter を使いイベント情報等を告知した。

３．総括

参加者は社会人、子供たち、学生が混ざって楽しんでおり、世代を越えた交流活動を達成できた。10年後につくばをゲームの街にするという目標に関してはそのスタートとして十分な成果がでた。文化とその継承を担う子育て世代へのアプローチにある程度成功し、またつくばにある既存のボードゲーム・アナログゲームグループとつながりを持つことができた。将棋部とイベントを協力して開催できた他、その他の団体との将来的な連携の可能性も見え始めている。参加者は次第に増えており、活動は確実に交流の輪を広げていっている。

今後の課題

・初期の人集めの難しさ
・人が増えてきたときのスタッフ不足
・当日参加のイベントのため参加者数の予測が難しい点
・運営側の意識・目標の共有
・長時間にわたるゲームイベントを開くことができる会場を見つけるのが難しい点

経験者からのメッセージ

失敗は笑い話にすればいい。
参加者が一人しかいなくても、続ければきっといいことある。
不安があるならまずは別のプロジェクトに参加してみるといいかもしれない。
とりあえず始めてみると世界が広がっていく。

運営者側から見たパーティシパントの変化

初めは知人が中心だったが、徐々に見知らぬ人もやってくるようになった。
リピーターの中には、率先してテーブルづくりやインストをやってくれる人が現れはじめた。

T-ACT に関する感想

特に学生側の参加者は、パーティシパントもオーガナイザーも T-ACT 経由の広報によるところが大きかった。

ゆあらいふ～大学生・社会人と考えるジブンの大学受験とその先～（16046A）

T-ACT プランナー　早川　大輝（社会・国際学群国際総合学類4年）

活動目的

３年間の先に大学進学を考える高校生の皆さん、こんなこと思ったことはありませんか？？
「大学受験を考えているけど、どーやって志望大学を選ぼうか？？」
「周りが勉強しだして焦ってきたけど、そーいえばなんで大学受験？？」
「大学ってぼんやりイメージはあるけど、実際どーいう場所なの？？」
「大学の先ってどんな世界があるの？？」
「先輩たちはなんで大学に行ったの？」
「今はとりあえず大学だー！と思っている」
「先生に、ここ目指せって言われるけどホントにそこでいいのかな？」
「せっかく大学に行くなら充実した生活を送りたい！」
　僕（筑波大学４年早川）は高校生のころ正直こんなこと考えていなかった。
　99.9％が大学に行くから、そういう風潮だったから、自分もとりあえず、受験勉強をした。受かった。
　だけど、なんで大学に行くのか自分でよく分かってなかったから、入ってしばらくしてから悩んだ。
「なんで大学きてるんだっけ？」
　悩むのはいいんだけど、悩むだけで時間が過ぎて、そして、大学生という貴重な身分、時間も行動もほぼ自由な身分なのに、時間を無駄にした。
　これから、もしかしたら大学に行く皆さんには同じような思いをしてほしくない。せっかく大学に行くなら、自分にとってより充実した時間を過ごしてほしい。
　大学はいい場所だと思います。けれど、皆さん次第で絶対によりよい場所にできる。
　僕はそう思います。
　そんな気持ちから、今回、高校生向けの座談会の企画をしました。
　一緒に座談会をするのは、大学生と社会人。
「上のような思いなら大学生だけでいいんじゃないの？」
　そう思う人かもしれない。
　でも、せっかくなら、大学のその先の社会で活躍している社会人も交えていろんな角度から物を見たほうが面白い！
　僕たち大学生との会話だけではわからない発見があるかも！
　そう思って、社会人の方々もお呼びします。
　このイベントは、残念ながら大学受験のノウハウを伝えるイベントではありません。けれど、高校生の皆さんにとってノウハウを学ぶのと同じくらい(いや、それ以上？！)価値のある時間になることをお約束します！＾＾

活動計画

〇日時
３月11日18～20時（17：45開場）
〇場所
つくば駅前「BiVi つくば」２階筑波大学サテライトオフィス
〇当日の内容（２時間を予定）
１．社会人も含めた参加者全員で自己紹介たいむ！（10分）
２．大学生・社会人とお菓子を囲んでのトークたいむ！（20×3=60分）
３．明日のちいさな行動宣言たいむ！（25分）
４．アンケート記入たいむ！（10分）
５．もっと話そう！フリーたいむ！（10分）

活動期間

平成29年１月５日～29年３月31日

対象者

学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：伊藤宏志（社会工学類３年）
P：上田孝典（人間系）

備考

〇こんな社会人が来ます！
・自分の強い意志で生き方を選択してきた方。
・どん底を経験したけど、今は楽しく働いている方。
〇お申込み
・チラシ右下の QR コード
・下記の「参加希望」よりメール
　でよろしくお願いします。
　メールには以下を記載してください。
・お名前（かな）
・所属（高校・学年）
・保護者様の同意があるか

活動報告

活動成果

社会人と高校生との少人数座談会を開催した。参加者は社会人 3 名、高校生 6 名、大学生 5 名。当日は自分の人生をイキイキと歩んでいる社会人 3 名をお呼びし、その生き方や選択の軸にフォーカスした話を高校生としてもらった。高校生に真に主体的に自分のことを考えて行動していくことの大切さを感じてほしくて開催したが、こちらの狙い通りの感情をこの会で持ってくれたことがアンケートから読み取れて嬉しかった。

今後の課題

高校生に対する集客の働きかけの質と量がまだまだだったため、もともとの集客目標が20名だったのに対し、6 名しか集められなかった。

経験者からのメッセージ

準備期間、少し動きが滞っているときに、わざわざ「どういう状況ですか？気軽に相談に来てくださいね！」と連絡をしてくれた。このように、僕らの「やってみたい」を応援するために本当に丁寧にかかわってくれるのが T-ACT です。小さくていいから、とにかく何かしらの種を持って行ってみてください！！

運営者側から見たパーティシパントの変化

高校生を参加者とすると変化したと思います。それがわかるアンケート詳細を知りたい方は T-ACT までご連絡を！

T-ACT に関する感想

気長に見守っていただきありがとうございます。

多様化が進む日本を考えてみよう―映画「HAFU」上映会―（16047A）

T-ACT プランナー　洪　静華（人文社会科学研究科修士課程2年）

活動目的

きっかけ、目的

つくば市は7000人以上の外国籍住民を抱え、その数は増加を続けている。それに伴い、つくば・日本で生まれ育った外国のルーツを持つ児童や人々も増加している。日本で外国のルーツを持つ子どもたちのアイデンティティは揺れ動き、不安定であるといわれている。そうした状況で、地域社会とのつながりがないように感じることも加わり、社会的向上心がなくなってしまうケースも見られる。

そこでこうした映画「HAFU」を見ることによって、多様化している日本の現状や、同じような人々の心情を知ることができる。「知る」ことだけでも、彼・彼女たちの孤独感や劣等感を軽くすることにつながり、そうした経験を自尊心・自己肯定感づくりの土台とすることができるのではないだろうか。

目標

・定住外国籍児童に対して映画を通じて、日本に同じようなことを感じている人がいることを知ってもらい、視野を広げてもらう。
・つくば市および筑波大学の方が見ることで、在日外国人が増加しつつある現状を直視し、外国にルーツを持つ人々に対しての理解を深めてもらう。

活動計画

概要

筑波大学の教室を利用し、映画上映会を開催する。その後参加者による意見交換の場を設ける。上映する映画は、2013年に公開された『HAFU/ ハーフ』である。本企画は、2017年２月18日に実施する予定である。主な参加者としては①筑波大学関係者（学生、教職員）、②つくば市内の小中高生、③つくば市内にあるブラジル人学校生徒、④つくば・インターナショナル・スクールの生徒、⑤つくば市内の興味のある方、とする。参加人数としては20-60人（超過しても80人程度）を見込んでいる。

主な協力機関として、筑波大学、つくば国際交流協会を予定している。

当日のスケジュール

13：00　開場
13：15　あいさつ
13：30　上映開始
15：00　上映終了、意見交換会へ
16：00　閉会
16：30　撤収開始

準備計画

12月28日、上映する映画の製作会社とのコンタクトをとる
１月13日までにつくば国際交流協会およびつくば市教育委員会の後援取り付け
この間に会場等検討
１月18日を目安にチラシ作成、配布開始（特に学外の小中高）
１月末までに映画上映のための手続きを完了させる、学内の広報
開催まで、教室予約、プロジェクター準備などを順次行う
→日時が２月18日で決定。会場は筑波大学スチューデントコモンズで行う。入場料は無料。

予算

HAFU1日ライセンスが30000円＋税（送料別）。

費用は筑波大学社会貢献プロジェクト「国際都市つくばの新しい国際化施策―定住外国人児童に対する「職育」プログラム」から支出。

会場利用料は無料。

活動期間

平成29年１月４日～29年３月31日

対象者
学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：高橋舞子（人間総合科学研究科修士課程２年）
P：明石純一（人文社会系）

備考
ポスター・チラシには事前登録用の QR コードと問い合わせ先のメールアドレス、入場料無料の記載をする予定です（１月19日対応予定）。

活動報告

活動成果

筑波大学の教室（スチューデントコモンズ）を利用し、映画上映会を開催した。その後、参加者による意見交換の場を設けた。上映した映画は予定通り2013年に公開された『HAFU ／ハーフ』だった。

参加人数は20-60人程度を見込んでいたが、学内外から24名の参加があった。つくば市に住むいわゆるハーフの高校生の参加もあり、当事者の視点からの意見を参加者全員で共有することができた。そのほかにも、日本人学生、留学生、つくば市で日本語ボランティアを行う市民の方々、つくば市にお住まいの方・外国籍住民の方など、様々な層の方が来場し、それぞれの立場から映画をとらえ、意見交換ができた。

今後の課題

企画から実施までの期間が短く、ばたばたしてしまった。広報も不足していた。

また協力してくれるメンバーをより集めることで、今回の課題が解消できると感じた。

経験者からのメッセージ

企画段階から、ターゲット層や広報、収支計画のところまで T-ACT コンサルタントの先生がサポートしてくださいます。初めて何かを企画してみようという人も安心して、とりあえず話をしに行ってみるといいと思います！

運営者側から見たパーティシパントの変化

映画を見る前までは、来場者同士で会話することがあまりなかったが、映画上映会後の意見交換会で、お互いの立場を踏まえた意見を共有することにより、イベント終了後も会話をしたり、一部参加者同士のネットワークができたりした部分があった。

T-ACT に関する感想

広報の期間が短かったのですが、チラシを印刷できたり、他の SNS などでも広報をしてくださり、助かりました。

Tsukuba × Sweets project（16048A）

T-ACT プランナー　藤原　優人（生物資源学類2年）

活動目的

将来、食品開発の道に進みたいと思っており学生のうちで将来に向けて何か行動を起こしたいと考えた結果、有志で食品開発プロジェクトを行いたいと思いました。そこで、学生のアイデアと企業さんの技術力を掛け合わせてコラボ商品を作り地域発展を目指したいと思っており、商品開発後つくばコレクションの認定申請を目指しています。

また、コミュニケーション能力や企画力などのスキルアップにつなげたいと考えています。

まず、最初の半年間はレシピ考案を目標に活動します。

活動計画

企画の内容

「つくば市×？？？×スイーツ」のテーマで、地元の企業のみなさんにコラボ協力を仰ぎ、地元の企業と筑波大学の学生のタッグ商品を作り、新しいつくば市のお土産を生み出す。またつくばコレクションの認定申請しイベント販売をして未来都市つくばを多くの人に知ってもらいます。

大まかなスケジュール

1、T-ACT に協力を依頼
2、実際に企業回りをするためのマナーの学習
3、製造・委託できる企業の選定協力を依頼
4、企業さん周り
5、食品開発について、予備知識を備えるための学習
6、企業との共同開発開始
7、学生によるレシピ考案

週一回のミーティングをしようと思っています。

活動期間

平成29年 1 月11日～29年 7 月11日

対象者

学生及び教職員・学外者 7

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：大嶋佑星（生物資源学類 2 年）、大熊美桜（生物資源学類 2 年）、中村夏奈子（生物資源学類 2 年）、中山大地（生物資源学類 2 年）、嶌田将貴（生物資源学類 2 年）、川村尚（生物資源学類 2 年）、遠藤朱莉（生物資源学類 2 年）、水谷翔平（生物資源学類 2 年）、高橋萌（生物資源学類 2 年）、金子知世（生物資源学類 2 年）、菊地薫（生物資源学類 2 年）、久野磨衣子（生物資源学類 2 年）、柳田美里（生物資源学類 2 年）、臼倉雄紀（生物資源学類 2 年）

P：宮崎均（生命環境系）

備考

まだ大学に入学して日が浅く、自分に足らないところも多く時間はかかってしまうと思いますが、必ず成功させつくば市の新しいお土産として世の中に出したいと思いますので宜しくお願いします。

活動報告

活動成果

2 月・3 月

・筑波大学の広報室にパッケージに校章の使用許可を得るために連絡をとる
・産学連携課に提出するための企画書作成
・グループ制の導入

4 月

・渉外・総務・広報部門の発足
・SNS アカウントの創設
・商品案の決定

・開発班の発足
5 月
・企業様の企画書の作成
・企業用の商品の企画書の作成
・Twitter での広報活動（フォロワー165人）
6 月
・市役所との打ち合わせ
・企業のピックアップ
・渉外マニュアル作成
・渉外マニュアルに関しての確認ミーティング
・Twitter メンバー紹介
・次に何をするかの話し合い
・ミーティング報告

今後の課題

企画を動かす際に、長期休暇で企画を動かすことが難しかったため進行が大幅に遅れてしまった。
企画の内部整備に、時間がかかった。
協力企業探しが難航しているため、企画を修正しながら協力していただける企業を探す。
活動を通して、SNS での情報拡散能力を高めなければならない。

経験者からのメッセージ

人を引っ張るって難しいなと思った。
だからその企画を始める前にある程度、どういう仕事が予測されて、そのためには企画の人間をどういう形で動かすかを考えておく必要があったなと今思う。
最後に一人で企画を動かすんじゃなくて、頼れる副代表を必ずつけること、これが一番大事かな。。。

運営者側から見たパーティシパントの変化

初期よりも、企画内の活気が溢れてると思う。

T-ACT に関する感想

企画の予算が出るようになれば、もっとできる幅も広がるのかなと思った。

学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について知ろう～（16050A）

T-ACT プランナー　髙橋　和生（障害科学類2年）

活動目的

現在、世界には小学校に通うことのできない子どもが5,800万人います。読み書きのできない成人は７億8,100万人もいます。こうした背景には、戦争や貧困などがあります。わたしたちは、より多くの子どもが学校に通える世界に変えていくために、自分たちにできることを考えました。それは、世界の現状を多くの人に知ってもらい、アクションを起こす仲間を増やすことだと思い、わたしたちはこのイベントを企画しました。

イベントでは小学生を対象に、世界の教育について考える授業を行います。「１人でも多くの人が世界の教育現状について知り、自分たちにできることを考え、世界にアクションを起こす」きっかけづくりを目指しています。

活動計画

２月　メンバー募集
　　顔合わせ
３月　授業内容決定
　　ビラ・ポスター作製
　　後援申請
４月　勉強会１
　　広報活動範囲決定
５月　勉強会２
６月　模擬授業１
　　広報活動
７月　模擬授業２
　　参加者募集
８月20日（日）イベント当日
８月　反省会

・勉強会：授業をより内容の深いものにするために、わたしたち自身で勉強をして知識を深めようと思っています。１、２どちらも学内で行います。
・イベント当日：８月20日（日）
　　小学生対象（親子参加可）
＊授業内容や対象の詳しい部分についてはこれから検討していきます。

活動期間

平成29年２月13日～29年８月22日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：小川真穂（障害科学類２年）、細田柊登（教育学類２年）、南雲俊樹（教育学類２年）
P：塩川宏郷（人間系）

活動報告

活動成果

８月20日に「いばらき子ども大学県南キャンパスの第３回授業」として小学校４～６年生に授業を行いました。「学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について知ろう～」というテーマのもと、世界の国の学校や学校に行けない子どもを紹介したり、みんなが学校に行けるようになるにはどうしたらいいのか考えたりしました。

授業には129人の小学生が参加してくれました。話し合いの時間には、なかなか意見を出すことが難しいこともありましたが、多くの子どもが学校に行けない子どものことを考えて、どんな支援が必要なのか、自分たちにはなにができるのを考えてくれました。「自分たちにできること」の答えを出してもらうことがゴールではなく、今回の活動を通して今後の生活の中で「学校に行けない子どものことを考えるきっかけ」をつくることを目標としています。そのため、活動の成果をすぐには見ることができませんが、129人の考えるきっかけづくりになったのではないかと思っています。

活動を終えて半年を振り返ってみると、どのようにメンバーをまとめていったらよいのか、授業をどのように

組み立てていくのか、たくさん悩むこともありましたが、みんなに支えられてここまで来れたと感じます。良い仲間に恵まれて学ぶことも多く、とても充実した半年間でした。

今後の課題

授業を組み立てていく際、何度も話し合いを行いました。間違った情報はないか、わかりやすい話し方をしているか、どのように伝えたらいいのか、直前まで授業の練習をしたり話し合ったりしていました。これらの原因の１つは、わたしたちが事実をよく知らないことでした。知識を深めるために勉強会を行いましたが、実際に学校に行けない子どもたちに会ったことはないし、彼らの生活を見たこともありません。実際に見たことのない、本や他人から得た情報を正確に子どもに伝えることはとても大変でした。わたしたちは機会があれば、自分の目で学校に行けない現状を見てくる体験が必要だと思います。

授業では、竹園高校の生徒さんが手伝いに来てくれました。しかし、高校生との打ち合わせは一度しか行えなかったため、授業に積極的に参加してもらうことができませんでした。竹園高校の生徒さんと、またいばらき子ども大学の方とも、さらに連携を深めておく必要がありました。

また、授業には120人以上の子ども、それと同じくらい保護者の方が参加してくれました。250人近くの人を動かすということは、わたしたちの予想をはるかに超えるものがありました。そのため、運営面で抜けている点が多々ありました。授業内容にとどまらず、運営の面でもさらに検討する時間が必要でした。

経験者からのメッセージ

自分の「やりたい」という気持ちに自信をもって、まずは一歩踏み出してほしいです。大変なこともあると思いますが、必ず仲間と乗り越えられると思います。ぜひ、たくさんに方にどんどん挑戦していってほしいです。

運営者側から見たパーティシパントの変化

ミーティングを重ねていくにつれ、メンバー同士の仲も深まり、話し合いに積極的に参加してくれる人も増えていきました。授業直前には、メンバー全員がどうしたら上手く伝えることができるのか、子どもの立場に立って考えてより良くしていこうとがんばっていました。本番でもみんなが一生懸命に授業をしていて、半年間の活動で最後には、みんなが一つの目標に向かって活動していくことができたと感じました。

T-ACT に関する感想

毎回たくさんお世話になっており、とても感謝しております。今後とも、いつでも相談に行けるあたたかい雰囲気の T-ACT であっていただきたいです。

ミニオープンキャンパス（16051A）

T-ACT プランナー　伊藤　春花（体育専門学群3年）

活動目的

【調べても分からない。それなら来ちゃおう！！】
　大学入学を控えた筑波大学新１年生のみなさん。
　いくら調べても解決しない大学についての悩み、疑問。
　わからないなら、実際に大学に足を運んでみよう！！
　ミニオープンキャンパスは、先輩と話しながらキャンパス探検ができるイベントです。
■ミニオープンキャンパスの、ここが魅力！
①先輩と話しながら、春から実際に使う施設を探検できる！
　先輩が、「ここ、まじで使うよ！」という施設のみを厳選。新１年生のみなさんに、施設の効果的な利用の仕方について教えます。
②疑問が全部解決できる！
　家具は何を買えばいいの？入学したら、まず何をすればいいの？留学のために、早めに行動を起こしたい。
　こんな悩みを解決します。
　一人暮らし、授業、教職、留学、単位、ボランティアなど、大学に関する疑問を先輩に直接聞ける！入学前の準備に役立てよう。
③大学で活躍する先輩と対談できる！
　自分なりの、他の人とはちょっと違ったキャンパスライフをデザインする５人の先輩の話を聞けます。あなたの「やってみたい！」精神を応援します！
■日時：３月31日　10：00〜16：00
■当日内容：学校施設探検→昼食→対談
■申し込み締め切り：３月23日　23：59　先着30名
■申し込みは以下の URL より行ってください。
　https://goo.gl/forms/mqXQlypYT85TSdAW2
　大学を、自分で見て、聞いて、感じる。そして、分かる。
　全学類対象だからこそ、他学の先輩、友達とも交流できる！
　大学生活の初めの一歩を、一足さきに踏み出そう！

活動計画

　概要：キャンパスツアーを午前から午後にかけて実施。大学生が新１年生を案内する。午後のツアー終了後、大学生ゲストスピーカーと高校生の対談を行う。
【日時】2017年３月31日（金）
【場所】筑波大学構内
【対象】筑波大学新一年生
【スケジュール】
10：00　平砂宿舎共用棟集合　ツアー①開始
10：15　宿舎施設見学
10：45　体育館周辺見学
11：45　昼食 @ 一食
12：30　ツアー②開始　二学＆三学見学（施設要検討）
13：15　中央図書館見学
14：00　大学会館再集合
14：15　自己分析シート記入
14：30　対談（大学生１、高校生４〜５、大学生ファシリテーター１）×5、10分×3
15：00　感想、宣言記入
15：15　終了、記念撮影
【手法】：午前のツアーでアイスブレイク。大学の情報を話すことで、実際の大学生活を高校生が具体的にイメージできる→昼食（大学生と新１年生が一緒に）→午後のツアー再開→大学会館にて再集合後、対談の会場へ移動→対談前に新１年生に現状分析をしてもらい、紙に記入する。→5 つ程度のグループに分かれ10分の対談を３回行う。新１年生には話を聞きたい大学生を事前に３人選んでもらう。（大学生ゲストスピーカーの登場、TC はファシリテーターとして参加）→感想を記入し、前後の比較をする。→記念撮影等

活動期間
平成29年２月16日～29年４月７日

対象者
学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：王東皓（物理学類４年）、鈴見祐悟（物理学類３年）
P：上田孝典（人間系）

活動報告

活動成果

３月31日、筑波大学新１年生を対象に、キャンパスツアーと対談を行った。

新入生申し込みは35名、当日参加は30名と、参加人数目標の30名に到達することができた。

キャンパスツアーは午前から午後にかけて４時間実施。宿舎見学、体育館見学（体操部パフォーマンス見学）、一学見学、昼食、二学・三学見学、図書館見学という流れだった。

工夫した点は、申し込み時点で先輩に聞きたい項目についてアンケートをとっていたことだ。新入生の疑問点が事前に明確になっていたため、ツアー中に話しながら疑問を解決することができた。また、ツアースタッフもあらかじめ模擬ツアーを行い、見学ポイントを共有していたことで、無駄なく見学が行えた。

その後の対談は、新入生が６人のゲストスピーカーから話を聞きたい先輩を３人選び、１人20分ずつ話を聞いてもらった。６個のテーブルに分かれ、新入生が20分毎に入れ替わる体制にしたため、少人数での対談が可能になった。ゲストスピーカーにはそれぞれの大学生活での体験談を話してもらった。どのスピーカーも、大学で能動的なアクションを起こした経歴の持ち主。自らの体験をふまえ、有意義な大学生活を送るための秘訣を新入生に話してくれた。新入生からも積極的に質問が飛び交い、充実した対談となった。

対談で工夫したことは、対談前後の自らの変化を知ることができるようワークシートを用意したことだ。多くの新入生が、漠然とした大学生活のイメージしか持てていなかったが、より具体的に今後の生活を考えられるようになったとポジティブな回答をしており、対談前後の変化が十分に感じられた。また、一回の対談が終了する毎に新入生にコメントカードを記入してもらい、ゲストスピーカーにフィードバックも行った。こうすることで、ゲストスピーカーが話題の展開の仕方を修正したり、話の振り方を工夫したりと、対談をよりよくつくるためのヒントとなった。

全体を通して、「新入生が大学生活の疑問を解決する」「新入生が大学生活に対するモチベーションを高める」「新入生が、自分も能動的に活動を起こしたいと思えるきっかけをつくる」という目標は達成できたと感じる。新入生へのアンケート結果（別紙１）にもある通り、大多数が本企画に大変満足している。また、特に良かった点の項目からも分かるように、先輩の生の声を聞けたというのは新入生にとってとても有意義だったようだ。新入生と先輩の交流を通して、新入生が自らの大学生活をより具体的に考えられるようになったことが分かり、本企画の目標を十分達成できたと感じている。

新入生だけでなく、運営に携わった大学生スタッフもまた、本企画を通して大きく成長できた。まず、プランナー・オーガナイザーは、企画立案・外渉・人事・広報などの仕事を通して、一つの企画がどのような過程を経て完成していくのかを肌で感じることができた。また、ツアースタッフは、新入生の疑問を一つでも多く解決するため、ツアールートの作成や事前の知識収集を綿密に行った。ゲストスピーカーも、20分間の対談時間をどう使うか頭を悩ませながら、新入生にわかりやすく自分の活動を伝え、かつ新入生にも話を振って場を盛り上げるという難題に取り組んだ。これらの活動を通して、大学生スタッフ自身も自らの大学生活を見直し、これから更に頑張っていこうと決意を新たにすることができた。

新入生の満足とともに、スタッフ自身の成長も得られたことは、大きな収穫だった。

今後の課題

本企画準備段階で一番難航した過程は、合格発表でのビラ配りの取り決めだ。新歓期間以前の活動にはなるが、新歓ではなくあくまでもイベントの広報活動である、という点を打ち出し、許可を得るため全代会議長にも協力していただいた。学生生活課・入試課・広報課に許可を得られたことは、全代会の方々の協力があってこそだ。他にもポスター作製や申し込みフォーム設置など苦労は多かったが、その全てをプランナーとオーガナイザーで進めており、仕事が集中しすぎてしまった点は反省点だ。本企画を一回限りで終わらせないためにも、仕事の過程をメンバーと共有していくべきだった。

また、遅刻した新入生への対応策が不十分であり、３名ほど途中からのツアー参加となった。あらかじめメールにて遅刻者への対応や交通機関時刻表を明記し、新入生が当日慌てずに行動できるよう配慮する必要があった。

経験者からのメッセージ

企画準備段階での作業は、どうしても一部の人に仕事が偏ってしまう。これはよくあることだが、他のメンバーが知らないうちに事が進んでいた、という状況にならないよう、仕事内容を共有することが重要だと思う。

また、困ったときは積極的に T-ACT に頼るべきだと痛感したし、できないことはできないと言ってしまった方がいいと感じた。何よりも人の繋がりが大切で、その繋がりでスタッフや参加者が集まっていくのだと思う。

運営者側から見たパーティシパントの変化

新入生に大学を紹介するということは、まず大学生スタッフが大学をよく知っておく必要がある。下準備として大学に関する知識の共有を行ったり、自らの生活を見直したりすることで、大学をより深く知り、自分自身の考えも整理することができた。

活動結果に記述したとおり、大学生自身が自らの大学生活を見直し、新年度に向けて再スタートするきっかけとなった。

T-ACT に関する感想

依頼したゲストスピーカーの方に繋いでいただき本当に助かった。

藝術専門学群のエリアに足湯を作ろう！（16052A）

T-ACT プランナー　志賀　英人（芸術専門学群2年）

活動目的

＜動機＞

寒い季節になって外で温まりたいと思った時に足湯があったらふらっと立ち寄れていいかなと思いました。それと、みんなで入ったら楽しいのかなって思ったので足湯をイベントっぽく日時を決めてやろうと思いました。面白そうだなって思って集まった人たちが足湯イベントを通して交流し、何か得るものがあったら大成功だと思います！

＜目的＞

足湯新歓を通して新入生と在学生が交流し、それぞれが新しい発見を得ることです。

足湯を同じ浴槽ですることで、物理的距離も縮まり、体験の共有で得られる親近感と足湯によるリラックス効果で心の距離も縮まるというメリットがあります。また、藝術専門学群は学年が変わると専攻ごとの関わりが極端に薄れ視野が狭くなりがちなので、より多くの人と交流することは視野を広げよりよい作品作りに繋がると考えます。

出来るだけお金をかけずにあるものを使うという方針でやっています。

活動計画

12月中　具体的行動に向けた準備と企画の練上げ

1/1～2/28　○配置図や完成予想図を考える
　→会場に必要な材料の確認
○会場図を元に必要な材料を集める
　→リサイクル精神で有効活用を目指す
○安全面の問題で常時設置しておけない可能性があるので、そうなった場合は　工房棟前のスペースを保管場所とする
○材料の加工場所は藝術エリアの工房棟を使う予定
　→使用基準に則り行動する
○使用するもの（随時検討中）
湯船
ブルーシートまたはホワイトシート
竹
ドラム缶　×2
竈用の木材

3/1～4/12　○実際に組み立てを（＊）ミューズガーデンで行う
　→ミューズガーデンの使用許可は 渡和由先生 からもらっています
○＊足湯新歓の予行練習を２～３回行う

4/13～5/31　足湯新歓を開く
　日時 4月21日（金）雨天中止
　予備日 4 月28日（金）
　時間 18：00～21：00（開始時刻は検討中）
　内容　ステージイベントを開催する予定
　　→募集で集まったパフォーマーが参加
　　（無絃塾、ダンサー、個人プレゼンター、ミュージシャン、随時更新）
　　→新入生のためのトークイベント
　　（在学生が新入生の質問に答えるコーナーです。お題に沿って在学生が会話をし、質問があればその場で言うか、ツイッターのリプライを活用する）
○当日の流れ
・浴槽の準備・
　ミューズガーデン近くの芸術学系棟の給湯室の給湯器からお湯を取る→ホースで直接入れるか、ポリタンクに移し替えて湯船に入れる→ゆずを浮かべる→完了
・ピザの準備・
　新歓当日の前日にピザ生地を必要と思われる数の分作る→開始１時間前にピザの具を調理する→開始10分前くらいから焼いて、焼きたてを提供する予定→随時足りなくなったら焼いていく→完了

・ステージの準備・
ブルーシートまたはホワイトシートを敷く。パフォーマーによって随時備品を準備する。
・備品の準備・
食事に使う皿、アルコールスプレー、手拭き、音響機材、ライト、他に必要なものがあれば準備する予定
◯衛生面
・浴槽のお湯について・
水虫の原因菌（白癬菌）に水中感染することはないので安全。足の汚れ（皮脂、繊維、その他）でお湯が汚れることは想定されるので20～30分に１度取り替える予定。さらに殺菌効果のある薬草や柑橘類を浴槽に浮かべておくことで衛生面での充実と心地よい空間作りをする。
・ピザの調理について・
調理する際にはマスクの着用とフキンを頭に巻くことを義務付けることで、髪の毛や唾液の混入を防ぐ。
ピザの具は野菜や肉を扱うので当日に調理し清潔新鮮な状態で使う。
その他、野外での調理についての注意点を（＊）原先生から指導していただいたのち、衛生面には徹底的に気をつけて調理する。
→ピザの調理について保健所から許可をとる予定。
6/1　反省会（検討事項）

補足
＊取得する許可＊
保健所、集会届け、騒音届け、機材貸し出し、消防（検討事項）
＊ステージ＊
有志のパフォーマーが演じるための場所。
＊ミューズガーデン＊
場所は藝術学系棟の裏のオープンスペースのことを指します
火をくべられる竈があります。竈を使うとお湯を作れたり、材料さえ調達すればピザを焼けるいい環境です。
＊足湯新歓＊
釜焼きピザを食べつつ、足湯に入りつつ、新入生と在学生の交流を促す新歓。
いかに情報交換をするかが肝である。
＊原忠信先生＊
竈プロジェクトを率いている先生
＊当日の予想必要最低人数＊
ピザ窯担当×2～４

活動期間
平成28年12月８日～29年６月７日

対象者
学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：松﨑仰生（芸術専門学群２年）、川西雄己（芸術専門学群２年）
P：渡和由（芸術系）

活動報告

活動成果
まとめ
新歓としては成功、足湯企画としては失敗
パフォーマンス
＜予定していたタイムスケジュール＞
18：00～18：30　無絃塾
18：40～18：50　ダンス
19：00～19：20　トークイベント（前半）
19：25～19：35　ぶらつくば

19：40～20：00　トークイベント（後半）
＜当日のタイムスケジュール＞
18：20～18：50　無絃塾
19：10～19：20　ダンス
19：30～19：40　ぶらつくば

一番最初に無絃塾さんがいたことで大いに盛り上がった。芸術専門学群出身のOBが演奏に参加していたり、華やかな服装と和楽器の心地よい演奏はとても良かった。会場が温まったことで新入生は会話を楽しんでいた。

が、しかしパフォーマンス進行はここから冷めることになる。無絃塾さんが使ったマイクとスピーカーを使えると考えていたが機材の都合で無絃塾さんの撤収とともにマイクとスピーカーは使えなくなってしまったのである。

この時、音響機材の使用に慣れているものがその場にいなかったため次の演目のダンスはT-ACT側から借りたミニスピーカーでやってもらった。

ダンスは良かったのだがでかいスピーカーがあっただけに物足りなさを感じた。次のトークイベントはワイヤレスマイク4本と有線マイク4本でやる予定だったが、有線マイク4本を会場にあった音響機材と繋げなかったのと2本のワイヤレスマイクの発掘が遅れたために中止にした。現場トラブルである。

そして最後『ぶらつくば』をしてもらった。つくばが大好きな少年がつくばを語るパフォーマンスである。プロジェクターとマイクでうまくやってもらった。

パフォーマンス全体を振り返るとそれぞれのパフォーマンスは完成度が高く、質が高かった。それだけにつなぎをうまくできなかったのが非常に残念だ。

足湯新歓の成功

1．何を持って成功とするのか

新入生や来た人が大方満足していたから。これはあくまで会話した感覚なのでアンケートなどを取ったわけではない。

2．ピザ竈

あらかじめ用意しておいた生地と具材で合計30枚のピザを焼くことができた。4種類用意できた。

3．ステージパフォーマンスの進行の失敗と原因

新入生強制参加の集まりの終了時刻が足湯新歓の開始時刻の18：00と同じだったため、人の集まりが悪く開始を15分遅らせた。その影響と大学から借りた音響機材の使い方や特徴を把握しきれてなかったことが進行に支障をきたし企画していた一年生とのトークイベントをすることができなかった。ぐだったような印象を与えたと思う。

今後の課題

足湯企画の失敗

1．当日に起こった足湯の2つのハプニング

・お湯の元栓からお湯が出なくなる

原因：給湯器がガス式ではなく、電気式だったから。初めの一時間くらいはお湯が出ていたが途中から水に変わった。当日わかったことだが、その給湯器は一度専用のタンクに貯めた水を電気で温めお湯に変える仕組みであり、長時間だし続けたことでタンク内のお湯がなくなり水が出てきたものだと思われる

・水漏れチェック済みだったブルーシート浴槽から水漏れを起こす

原因：不明。劣化していたのかもしれない

2．何を持って失敗とみなすか

当日に起こったハプニングに対処できずに、結果的に足湯は実現されなかったので失敗とする

かゆいところに無機化学（17001A）

T-ACT プランナー　廣瀬　拓（応用理工学類3年）

活動目的

スケジュールの関係上、応用理工学類生は無機化学全体を学ぶことができない。それゆえ、錯体化学や有機金属化学の基礎といった研究上重要と思われる学問である無機化学を学ぶ機会を逸している。ゆえに無機化学の自主ゼミを開くことにした。

最終目標として、8 月の半ばまでには、ゼミの内容を踏まえて無機化学のサマリーを作成する。これは活動内容を記録として残すためである。記録に残すということは、先生方の批判を受け、間違いに気づくことや、参考資料として後輩に役立ててもらうということにつながる。

活動計画

日時　春学期。平日の午前 9 時～午後 6 時までのうちに行う。1 時間半程度で週 2 回を予定。ただし、開催にあたっては日時含め参加者と相談したい。

場所　図書館のラウンジ、セミナー室などを利用する。

ゼミの内容　「シュライバー・アトキンス無機化学（上）」（版は問わない）を教科書とし、そのなかの 1 ～ 8 章を扱う予定。学ぶ内容は次の通り。

・原子・分子の構造
・固体の構造
・酸塩基反応
・酸化還元反応
・分子の対称性を記述するための群論
・錯体、配位化合物の基礎

対象者　無機化学の初学者。大学院生も歓迎。高校化学を学び、学類でなにかしら基礎的な化学の講義を履修した、またはしていることが望ましい。

ゼミの形式　輪講形式。ある教科書の範囲に関して、誰か担当を決めてその部分の板書を作り、解説してもらう。一通り解説し終わったら続けて質疑応答・討論を行う。

活動期間

平成29年 4 月13日～29年 8 月 9 日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：髙嶋泰帆（応用理工学類 2 年）
P：小林正美（数理物質系）

備考

予定希望人数を超えた場合でも活動は実施するが、その際は 3 ～ 5 人程度の小グループに分け、個別的にゼミを開催する。

活動報告

活動成果

ゼミで用いたテキストの 1 章、2 章を扱った。扱った章の数としては少ないかもしれないが、1 章ごとに深く掘り下げることはできたと思うので満足である。

今後の課題

人数をもっと増やしていき、せめて 6 人で活動できるようにしたい。少人数であるとどうしても一人一人の負担が大きくなって活動が滞ってしまうし、疲弊してしまう。

経験者からのメッセージ

焦らないこと。

運営者側から見たパーティシパントの変化

積極的に発言してくれるようになった。

T-ACT に関する感想

現状通り、活動を見守ってくだされば、幸いです。

Omochi Language Club Spring 2017（17002A）

T-ACT プランナー　大草　有里枝（国際総合学類3年）

活動目的

Omochi Language Club（通称おもち）の活動の目的は、言語を教え学びあうことを通して留学生・日本人学生ともに交流を深めることです。日本人の友達がほしい・日本語の勉強を頑張りたい留学生と留学生の友達がほしい・外国語の勉強を頑張りたい日本人学生をつなぐ場をこれからも作っていきたいと思います。

活動計画

毎週金曜日18時半から20時半までの間、主に3A 棟の教室を利用して言語交換を行います。具体的には、英語、フランス語、スペイン語など外国語での会話を一時間程度、そのあと同様に日本語でも行います。比較的マイナーな言語に関しても、学びたい人と教えられる人がいれば学べます。留学生と日本人学生の比率はおおよそ７：３ほどです。

活動期間

平成29年４月７日～29年10月７日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：三田村美穂（国際総合学類３年）、小森太郎（応用理工学類４年）、祖父江崇史（社会学類３年）、遠藤菜摘（知識情報・図書館学類３年）、川村尚（生物資源学類２年）

P：山田亨（人文社会系）

活動報告

活動成果

活動内容

通常の活動としては毎週金曜日の放課後に学内の教室にて言語交換を行いました。最初英語やフランス語、スペイン語などで一時間弱おしゃべりした後、同様に日本語でも行います。また、月一回を目安にイベントも企画しました。４月にはゲームとお菓子をつまみながら自由におしゃべりする時間をとった Welcome Party、５月にはやどかり祭を一緒に楽しんだり、７月にはバーベキューイベントを開いたりしました。

今期特に取り組んだこと

今期のおもちでは運営陣の組織化に取り組みました。おもちは７年ほどの歴史がありますが、これまでの運営はリーダーが一人で行ったり、仲の良い人と行ったりと組織化されていませんでした。私はこの活動を安定して継続していくために、また日々の活動やイベントをより効率よく楽しいものにするために、運営メンバーを集めサークル化することを決めました。そして４月から少しずつ仲間を集め、話し合いを重ねました。日々の活動のやり方の見直し、イベントの企画、ウェブサイトの開設、ポスター・ビラ制作など、仲間と考え実行に移してきました。

目標達成度

私はリーダーとして下の二つの目標がありました。

（１）参加者に満足してもらうこと

（２）運営メンバーがやりがいと楽しさを感じながら、組織としてまとまること

（１）に関しては、参加者が６月以降激減してしまったので達成度は30％くらいです。日本人学生が増えたことは評価できますが、できるだけ多くの参加者に楽しんでもらいリピーターになってもらうことが目標です。おもちの強みはいつでも誰でも参加できることですが、だからこそ単純な「楽しさ」や「強いつながり」が欠かせません。あまり難しく考えないで、純粋に交流を楽しむことが必要なのだろうと思っています。

（２）については、活動終了時点では60％ほどです。理由は共におもちを作っていく中で徐々に関係を深めており、まだその途中であるからです。以前からの仲間と新しい仲間がうまく打ち解け合ったり、スムーズに作業をすすめていけるようになったりするまでにはやはり時間がかかります。またリーダーの私自身の問題として悲観主義が強すぎたせいで、仲間に悪影響を与えていたことも多々ありました。今は仲間を信頼できるようになってきて、一人で考え込むことが圧倒的に減りました。これからの期待も込めて60％とします。

今後の課題

今後の課題は主に、リピーターを増やすことと後継者探しの二つです。リピーター増加については上で触れたとおりです。また、後継者についてはまず日本人学生に知ってもらうことから、そして同様にリピーターになってもらうことから始める必要があります。

経験者からのメッセージ

ぼんやりとでもやってみたいことがあるなら、T-ACT で気軽に相談してみると良いと思います。最終的に T-ACT のプロジェクトという形での実現にならなかったとしても、いただいたアドバイスは必ずあなたのためになると思います。

まず、誰かに話してみること。そこから「それ、おもしろいね！」とか「こうしたらもっと面白くなるんじゃない？」と言ってくれる人が出てきて、それがチームになり、そのチームでさらに他の誰かを楽しませることができる。

このように自分が秘めていた小さな「やりたい」が大きくなって、いろんな人を巻き込んで実現できたら最高だと思いませんか？

苦労することもあると思いますが、すべての経験があなたの力になります。

まずは動いてみましょう！

運営者側から見たパーティシパントの変化

おもち以外の場でも参加者同士で遊んでいたり、言葉（外国語）がうまくなっていたりという変化が見られました。

T-ACT に関する感想

サークル化の相談や運営メンバーをまとめる際のアドバイス、ぜいたくに使わせていただいた印刷など、T-ACT に助けられたことがたくさんありました。支えていただきありがとうございました。

盆 LIVE2017（17003A）

T-ACT プランナー　喜瀬　沙織（比較文化学類3年）

活動目的

「つくばに集う大学生、留学生、地域の方や外国人が、お祭りを通して交流できる場をつくりたい！」という思いからスタートして、今年で第３回目の開催になります！！盆 LIVE は、日本の伝統である盆踊りとバンド演奏を掛け合わせた、古くて新しいエンターテイメントです。曲目は古典から、洋楽、J-POP、歌謡曲、子供、アニメ曲と多岐に渡り、国際色豊かなパフォーマンスや出店が華を添えます。誰もが気軽に参加して楽しめる、そんなお祭りを目指しつつ、つくば市のさらなる活性化や、人々の交流発展に繋げていきます。

活動計画

活動内容は、９月に開催予定のお祭りを成功させるべく、週１回ミーティングを行って、運営を進めていきます。

実行委員の仕事を大まかに分けると、以下の４つになります。

総務・・・書類や備品、会計等を担う
企画・・・踊りや演奏などのパフォーマンス、会場装飾、出店交渉、祭当日のスケジュールを考える
広報・・・SNS やビラ、ポスターなどで情報発信
渉外・・・協賛や後援を頂いたり、地域の方のお手伝いや交流

活動の流れ

４月　新メンバー募集
　　関係者や団体さんへ挨拶
　　各種申請、踊りの練習
５月　企画内容を詰める
　　出店交渉や出演依頼
６月　広報活動
　　協賛交渉
７月　申請
　　ポスター・チラシデザイン完成・入稿
　　各種祭りへの参加
　　当日スタッフの募集
８月　広報活動
　　当日の流れ確認
　　各種申請
９月　各業務調整
　　MC 等台本制作・リハーサル
　　16日本番開催予定。開催後、お礼・挨拶周り、報告書作成と反省
以降　引き継ぎや挨拶

やることは多岐に渡りますが、楽しみながら運営を進めています！
お祭りや踊りが好きな方、もっと地域の人と関わりたい、スキルを生かしたい人という方大歓迎です！！

活動期間

平成29年４月１日～29年９月30日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：野崎凌太（比較文化学類３年）、飯村ちはる（比較文化学類３年）、小田島実結（比較文化学類２年）、木邨弥生（比較文化学類２年）、高野大（比較文化学類４年）、福田哲郎（比較文化学類３年）、吉川健人（生物学類３年）、大迫未歩（比較文化学類４年）、小関渚月（比較文化学類４年）、杉山萌依子（比較文化学類４年）、三浦希美（比較文化学類４年）、周俊杰（情報科学類４年）、芹川瑠美（芸術専門学群１年）、宮川月子（比較文化学類４年）、相馬愛（比較文化学類４年）、王東晧（物理学類４年）、吉田翔（情報科学類１年）、小杉太一（情報科学類４年）、岡田唯（物理学類２年）、中野彬（比較文化学類１年）、藤田行悠（比較文化学類４年）、酒匂陸（比較文化学類３年）、クレイグ聡良（生物資源学類２年）、小林陽一郎（数理物質科学研

究科修士課程１年）、荒井怜奈（生物学類４年）、開田健太郎（社会学類２年）、菊嶋京子（比較文化学類４年）、長﨑宏輝（生命環境科学研究科修士課程１年）
P：木村周平（人文社会系）

備考
お祭り本番の開催予定
盆 LIVE2017
日時：2017/09/16（予備日17日）
　　15時～20時
場所：研究学園駅前公園
※予算は50万円程度で、現在は、筑波大学社会貢献プロジェクト等の助成金やクラウドファンディングの活用も考えています。

活動報告

活動成果

「つくばに住む様々な人々がともに楽しめる場を作る」を目的として、盆踊りと生演奏を掛け合わせた新しいお祭り「盆 LIVE」の活動で、今年で三回目の開催となった。約一年間かけて運営メンバーを集め、協賛、パフォーマンス、出店の交渉などを行い、準備・計画をしてきた。新しいメンバーで、初めからまたお祭りを創り上げていく不安と、手探りの中でも運営していく中で楽しみながら、新しいことに挑戦してきた。今年は、地域の色々なお祭りにも参加したり、運営を手伝ったりと、自分達の祭りを創り上げる活動に加えて、積極的に地域と連携を密にしてきた。祭り本番は、雨が降ったことと、広報の不足から、目標とする動員数に全く及ばなかった。しかし、悪天候の中でも、500名ほどの来場者が来て下さり、一緒に輪になって踊ることができたのは嬉しく、無事に祭りをやり遂げることができた達成感があったし、地道にやってきた準備期間がとても価値のあるものに感じられた。「自己のため」などではなく、何の見返りもないことに自分の時間を注ぎこみ、計画を実行に移し、周りの人を巻き込んでいくという、今しかできない、今だからこそできることを経験できたのではないかと思う。何よりも、学生ではない地域の様々な方々と関わっていく中で、「つくば」というまちの魅力を改めて実感するとともに、つくばに愛着を抱くようになった。

今後の課題

運営の人数確保が今後の最大の課題。運営方式を変えていくなどの必要性や、来年はもうやめるという可能性もある。プランの最中での課題は、メンバー間の調整が合わず、当日直前に計画を行動に移せる人員が不足していた。また、ミーティングが進まず、同じ議題を何度も繰り返し考えるということも多かった。加えて、雨天時の時の対策も甘かったり、備品の確認不足も目立った。

経験者からのメッセージ

行き詰ったり、悩んだりしたら、T-ACT の先生に相談するのが一番です。

運営者側から見たパーティシパントの変化

一般来場者の方には、前回来て下さった方がリピーターで来て下さったり、他のお祭りで関わった人が来てくれたりと、人脈が広がった結果、来て下さった方が多かった。また、周囲の人からの認知度も上がってきたのか

なと活動していく中で実感した。

T-ACT に関する感想

今回、お祭りを開催するにあたり、先生方のサポートはとても助けになりました。悩んでいる時にアドバイスをくれたり、声をかけてくれたり、そうした気遣いが精神的な面で支えになりました。備品もフル活用させて頂きましたし、広報面でも Twitter での宣伝や、ポスター・ビラなどで協力して下さったのはすごくありがたかったです。魅力的な企画が沢山あるので、もっと学生がそれを知ることができればいいのになぁと思ったりします。

Teens Cafe Vol.2（17004A）

T-ACT プランナー　伊藤　春花（体育専門学群3年）

活動目的

「つくば市内の中高生の視野を広げる」ことを目的に活動を行います。

この活動に至った経緯として、昨年度の活動で中高生（特に竹園高校生）と関わり見えてきた課題があります。以下に課題を示します。

①進学先や就職先を見据えている生徒・そうでない生徒の二極化
②進学先の決定理由があいまい
※例えば竹園高校の生徒は、無条件に筑波大学進学を選ぶ傾向がある
③筑波大学が近くにあるにも関わらず、市内の中高生は大学の学びの環境についての知識が薄い

上記の課題を解決するため、筑波大生という歳の近い先輩が、中高生と関わり将来選択に寄り添っていく場が必要だと考えました。

具体的には
①大学生のこれまでの人生の体験談を話す
②中高生の悩みや疑問を汲み上げ解決する
③大学を紹介する

これらを通して、学校では得られない大学生の生の声を届け、中高生が将来選択をより主体的に考えられるような環境をつくります。

様々な生き方・考え方に触れること、自分はこの先どうなりたいのかを考えること。このような場所をつくることで中高生の視野が広がっていきます。

活動を始めるにあたり、竹園高校から許可をいただき、月１回交流会を開催することになりました。竹園高校との交流を足掛かりに、つくば市内の中高生と交流できるよう努めていきます。

最終的にはつくば市内の中高生が、貪欲に将来を考える姿勢を持つ・目標を持って進路選択をすることができるよう、後押ししていきます。

活動計画

【活動の柱】
■竹園高校との交流会（月１）
・・・竹園高校社会科室をお借りし、月１回交流会を行います。内容は、中高生との対談・パネルディスカッション・ワークショップ等を予定しています。

【活動スケジュール】
４月・・・通年の大まかな交流会の流れ確定。第１回交流会実施。
５月・・・第２回交流会実施。（高２・３年対象。大学紹介イベント）
６月・・・第３回交流会実施。（竹園高校姉妹高校交流に備えた中国語講座）
７月 or8月・・・第４回交流会実施。
９月・・・第５回交流会実施。（竹園高校読書感想文期間にあわせ、読書の秋企画）
10月以降未定

活動期間

平成29年４月25日～29年10月24日

対象者

学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：王東皓（物理学類４年）、平橋夏希（心理学類１年）、半澤輝尚（情報メディア創成学類１年）、畑直行（国際総合学類３年）、蔵持菜摘（心理学類２年）、黄金理佐（体育専門学群２年）、堀部夏穂（国際総合学類２年）、藤本信（教育学類３年）、小宮歩（人間総合科学研究科修士課程１年）
P：上田孝典（人間系）

備考

Teens Cafe は、随時大学生スタッフを募集中です。
・自分の体験談を話してみたい
・教育分野に興味がある！

・中高生と関わってみたい
・他学の人と関わりたい
・自分も視野を広げたい
・とにかく大学で新しいことに挑戦したい
・空いた時間を有効利用したい
　このような方、ぜひ一度でも良いので活動に参加してみませんか？
　企画の立案・実行・反省など一連の過程を通して、大学生も社会勉強ができる良いチャンスです。
　中高生と話をするのはあまり得意はない・・・
　定期的には関われない・・・
という方、ご安心ください！
〇中高生との交流以外にも、渉外・広報・企画立案をする大学生
〇時間があるときだけ交流会やイベントに参加する大学生
も募集しています！
　ぜひ参加お待ちしています！

活動報告

活動成果

　2017年 4 月から 7 月の間、月に 1 回中高生向けに「将来の自分を考える」ためのワークショップを実施した。
　中高生が進路選択をする際、パンフレットや資料から何と無く進学先を選ぶ現状に問題意識を感じた大学生が集まって現状を変えるためワークショップを企画。月 1 回のサイクルを守るため、企画実施と反省、計画のサイクルを繰り返しながら、中高生が進路選択のため視野を広げられるよう多様なワークショップを企画した。
　竹園高校の教室や Bivi イベントスペースを使用したことで、高校との強いパイプや竹園高校の生徒以外との繋がりも作ることができた。
　また、参加学生からは「大学で何が学べるのか分かった」「もっとこんな企画をしてほしい」との声をいただいた。進路先を選ぶ上で、自分の興味や関心がどこにあるのか、見つめ直す機会を作ることができた。

今後の課題

・主に竹園高校との活動がメインであったため、「竹園高校の生徒に筑波大学の様子を伝える」という活動の色が強く出てしまった。大学受験や高校受験全般に使える知識や考え方を参加者に提供できる体制を作るべきだった。
・大学生の力量により参加者に伝えられる内容に差が出てしまい、属人的な面があった。進路選択に正解は存在しなく、ノウハウも確立しにくい課題ではあったが、メンバー内でも勉強会を開催するなどして知識の共有を図る機会が儲けられればよかった。

経験者からのメッセージ

　中高生は普段から進路のことばかり考えて生活しているわけではない。日々の勉強や部活動で頭が一杯であるところに、いかにして自分を見つめ直す時間の有用性を感じてもらうか、というところが非常に難しかった。しかし、企画を実施してみると、自分を振り返る機会がどれだけ重要か、その意義を心から感じてくれる参加者も多数いた。この企画に意味なんてあるのか、と悩むことがあるのかは不明だが、悩んだ際は、企画を必要としてくれている人のことを思い出してほしい。
　またどの企画も広報活動は困難を極めると思う。筑波大学の先生方の人脈や、他の学生を十分に活用して、グループで広報活動をしていくとうまくいく。

運営者側から見たパーティシパントの変化

　最後の活動は若いメンバー（1、2 年生）のみで実施した。自分たちで考え、現場に出て、FB をもらうという体験をしたことで、嬉しさや反省点を肌で感じられたと思う。
　また、中高生も自分の好きなこと、好きなものについて改めて考え、進路選択を自分ごととして捉えられるようになっていた。

T-ACT に関する感想

　社会に出てするようなことを、学生のうちから経験できるのはすごく大きいことだと思う。実際、就活で話すエピソードも TACT での活動がメインだし、自分の軸を形作ってくれたとても大きな存在。体育専門学群の私でもここまでできるんだ、という自信を持つことができた場所。

おもしろ@研究会 ver.2（17006A）

T-ACT プランナー　石橋　正幸（社会工学類4年）

活動目的

世の中には、お笑いなどを実践しているサークル団体は多いが、それについて深く考察し、研究しているところは少ない。当研究会では、様々な実践を通じて企画を楽しむだけではなく、より深く「笑い」とは何か、ひいては「おもしろいこと」とは何かといった本質を探っていきたいと考えている。

参加者の年齢や国籍などパーソナルな要件を問わず、お笑いやラップバトル、その他様々なパフォーマンスなどとにかく各々が「面白い」と思うことを題材に、メンバー同士で実際に共有し実践してみることを通じて、メンバー間の相互理解や交流の促進を図ることを目的とする。

活動計画

［活動内容］

主にお笑いやラップ MC バトルなどテレビ等でも頻繁に題材に上がっているエンターテインメントについて実践を通じて研究し、理解を深める。

具体的には、大喜利や MC バトルなど、テレビでも実際に行われている企画を想定している。誰でも歓迎。

［活動日時］

週 1 回（18：15〜20：30）3A 棟のいずれかの教室 or 実習室にて活動を予定

［活動予定］

1 月〜 3 月　まず参加者募集。活動ではお互いの理解のためのアイスブレイキングなどを活動に取り入れながら幅広くエンターテインメントについての理解を深める

4 月〜 5 月　参加者募集継続。活動では個々の題材を実際にメンバー内で実演。感想意見を述べ合う中でメンバー同士の相互理解を深めていく。

6 月　活動を継続しつつ、全体を通しての総括を行う時間を設ける。反省点や今後に生かすべき課題などを列挙していく。

活動期間

平成29年 2 月15日〜29年 6 月23日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：吉田真聖人（社会工学類 4 年）、堀田文太（社会工学類 4 年）

P：繁野麻衣子（システム情報系）

活動報告

活動成果

前年度実施した「おもしろ @ 研究会」の続編企画として、前回の反省を踏まえて活動を行なった。具体的には、参加者が企画を持ち寄り、各回 1 つないし 2 つの企画を実行し、それによって相互理解を深めるということであった。企画は主に大喜利に加えて、昨今メディアでも多く取り上げられているラップバトルや、その他自分たちで編み出して考案したゲームなど、多くの企画を実施できた。前回企画では、活動が単調になってしまい冗長になってしまう事があったので、それを踏まえて短時間で多くの企画を実施できるよう時間を細分化し、進行をよりスムーズに行った。それぞれのゲームごとに個人のアイデアのユニークさ、また内面の考えなどが表面化する中で、単に会話では分からなかったお互いの深い側面が見え、結果として相互理解を促進することができたと思う。

今後の課題

前回企画よりも活動内容をより充実させることができ、参加者の満足度は向上した一方で、広告面であまり時間を割くことができず、やはり少人数での活動になってしまったことが挙げられる。多くの参加者を巻き込み、より大きい規模で企画を行うことも想定していたので、もう少し努力すべきだったと感じる。参加者全員が 4 年生であるということによる忙しさなどの時間的な制約の他、積極的に広報を行うという気概が各人に不足していた。

経験者からのメッセージ

まずは、計画を無理のない範囲でしっかり構築することだと思う。比較的長期での活動になると、期間中に細かなプランの変更、改善を余儀無くされる場面は必ずあると思うので、そうした事態に柔軟に対応できるような計画を立てることが肝要だと思います。

また、初期人数は多い方が良いと思う。自分たちは初期人数が少なかったことで、それぞれの交友から参加者を見出すことに苦労したので、なかなか広がらなかった。そもそも企画発起の段階で可能な限り多くの人を巻き込んでおくと、企画自体が指数関数的に発散され、その後の広告効果もより出やすくなると思います。

運営者側から見たパーティシパントの変化

もともと内向的な参加者同士での活動開始だったが、様々な企画を実施していく中で、ゲームのノリでお互いの印象をぶつけ合ったり、普段なら口にしないような言葉が飛び交ったりと、より相互の深層に迫ることができたと感じる。そうした中で、参加者も少しずつポジティブに、かつオープンな性格に変化していった印象がある。

T-ACT に関する感想

広報活動への援助が欲しいと感じた。T-ACT の学内における知名度、信頼度を生かして、SNS や web 上での発信があればより多くの人に知ってもらえたのではないかと感じる。企画の進め方や活動上の不具合などに対して、先生方には相談に乗ってもらい大変助かりました。

あなたの小説が読みたい！――第十回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集――（17007A）

T-ACT プランナー　箱崎　玲音（知識情報・図書館学類2年）

活動目的

小説を書くこと・読むことに興味を持つ学生の活動及び交流の活発化を手助けしたい。またつくばに関わる、筑波大学外の学生との交流のきっかけにしたい。最終的にはつくばに関わる学生全体の創作活動の活性化を目指す。

今年度は第十回を迎えるにあたり、これまで文芸賞を支えてくださった方や冊子の読者の声を聴く機会を設け、文芸賞をより良いものにしていきたい。

活動計画

5月1日	作品募集開始
6月	一般選考委員（パーティシパント）向け説明会＆選考体験会
7月	一般選考委員（パーティシパント）向け説明会
7月15日	作品募集締め切り
8月	一次選考：集まった作品を筑波学生文芸賞運営委員（オーガナイザー）のみで選考する。
9月	最終選考：一次選考通過作品を一般選考委員（パーティシパント）と共に選考し、受賞作を決定する。一般選考委員参加者との交流及びアンケートを行う。
10月	受賞作を発表・受賞作掲載冊子を編集する（オーガナイザーのみ）
11月4日～11月5日	雙峰祭にて冊子配布。筑波学生文芸賞運営委員（オーガナイザー）のみで最終振り返りを行い、活動報告書をまとめる。

活動期間

平成29年5月1日～29年11月1日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：饒波美香（知識情報・図書館学類2年）、三井鴻志郎（心理学類1年）、小川奈々（知識情報・図書館学類1年）、千葉高志（人文学類4年）、小川耕平（人文学類4年）、柏原歩那（化学類4年）

P：綿抜豊昭（図書館情報メディア系）、青柳悦子（人文社会系）

活動報告

活動成果

概略

第十回筑波学生文芸賞を開催し、受賞作品を収録した冊子を発行・配布した。また、十周年記念企画として、ベストセレクション・青柳悦子教授の講演会を催した。

第十回筑波学生文芸賞について

一般部門・ベリーショート部門にわけて作品を募り、運営委員（オーガナイザー）による一次選考・最終選考により受賞作を決定した。応募作品数は計42作品で、昨年度の倍以上となったが、その一方で本来運営委員とともに最終選考に参加してもらうはずの一般選考委員（パーティシパント）は集まらなかった。

その後、受賞作品や受賞者インタビュー、選考の様子などを収録した冊子を400部ほど発行した。また、希望した応募者に対しては、作品のフィードバックを送信した。

ベストセレクションについて

十周年を記念して、筑波学生文芸賞のホームページ上および大学の中央図書館で過去作品の一般投票を行った。そして、投票のあった作品や運営委員おすすめの作品を筑波学生文芸賞ベストセレクションとして紹介するフリーペーパーを雙峰祭で配布した。

（注：過去作品本文は筑波学生文芸賞のホームページにて無料でアクセス可能）

雙峰祭について

冊子・フリーペーパーの無料配布を行った。冊子は320部ほど配布することができたが、フリーペーパーにはあまり興味を示してもらうことができなかった。

他、青柳教授の講演会を開催し、T-ACT 主催のスタンプラリーにも参加した。どちらにも、想定以上の人が集まった。

広報活動について

作品の募集にあたってはポスター・看板、一般選考委員（パーティシパント）の募集にあたってはポスター・ビラ配りによる広報活動を行った。雙峰祭当日についての広報は、雙峰祭実行委員会の定める規定に従って、ポスターを掲示した。また、企画全体の活動を通して、Twitter やホームページも広報の場として活用した。他、T-ACT から声をかけていただいた、ラジオでの宣伝も行った。

目標の達成度について

応募作品数より、小説を書くことに興味を持つ学生の活動の活発化の手助けをしたいという目標は、ある程度達成されたと思われる。しかし、それは筑波大学の中に限定した場合の話であり、つくばに関わる学生全体の創作活動の活性化にはまだまだ遠く及ばないと言えるだろう。加えて、小説を読む側の人の参加も目標よりかなり少なかった。

雙峰祭の講演会後、文芸賞への応募者を含む数名が残って議論をするような場面があった。ごく少数ではあるが、小説に興味がある人の交流の場がそこにできていたのではないかと思う。

今後の課題

大きな問題は二つあった。まず、一般選考委員（パーティシパント）が集まらなかったこと。次に、予算が足りなくなったこと。前者は一般選考委員なしで最終選考することで対応し、後者は足りないぶんをメンバー全員の私費で負担する形で解決した。ただし、資金に関してはその場しのぎの対応をしたにすぎず、来年度以降も大きな問題となることが予想されるので、今年のうちに解決策を打ち出していきたいところである。

また、これは今年度のみの企画であるので今後に持ち越す課題ではないが、ベストセレクションについては投票数が集まらず、雙峰祭でもあまり興味を持ってもらえなかった。これについては広報不足と、投票時期が夏季休暇中だったことが災いしたと思われる。

経験者からのメッセージ

T-ACT でやるような企画は、たぶんどれも凄く広報が大事になってきます。

人が集まらないと意味がない、そういう企画も多いんじゃないかと思います。

T-ACT は広報のための機会や設備をたくさん用意してくれているので、ぜひ活用してください。

「ラジオに出ませんか？」「授業で宣伝しませんか？」と T-ACT からメールがくるのですが、メールをいただいてから広報について考えているようでは、おそらく遅いです。もちろん、T-ACT はある程度余裕をもって連絡してくれますが、私は「今から準備しても間に合わないかも」とせっかくの機会をふいにしてしまうことが何度かありました。あらかじめ、「次に広報の機会があったらこういうプレゼンをしよう」とプランをある程度練っておくことを強くおすすめします。

運営者側から見たパーティシパントの変化

パーティシパントは最初一人いたのだが、夏季休暇中に連絡がつかなくなり、最終的に参加してもらうことができなかった。

T-ACT に関する感想

ポスターやビラの印刷や、手続きの簡略化に助けられた。T-ACT のスタンプラリーによる集客も、かなり大きな効果があったと思う。

【芸専通信 '17】芸専1年の作品お見せします！（17008A）

T-ACT プランナー　髙木　凜（芸術専門学群1年）

活動目的

入学間もない私たち芸専一年の作品を多くの人に見てもらいたいと思い、宣伝部を立ち上げました。フリーペーパーやムービーを作りみてもらうことで、作品の発表の場を作るとともに、広告物の制作自体の中でも芸術の学びを得、メンバー同士高めあえていける研鑽の場にできたらいいなと思っています。

活動計画

・作品発表のフリーペーパー制作
・作品制作過程をまとめたムービー作り
・作品を SNS で発信していくための Twitter 運営
・作品制作終了後、T＋での展示

活動期間

平成29年 4 月21日～29年 6 月30日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：岡本太玖斗（芸術専門学群 1 年）、監物沙耶香（芸術専門学群 1 年）、齊藤妃菜（芸術専門学群 1 年）、島田千聖（芸術専門学群 1 年）、吹田雛乃（芸術専門学群 1 年）、鈴木里穂（芸術専門学群 1 年）、船木盛之介（芸術専門学群 1 年）
P：大原央聡（芸術系）

活動報告

活動成果

芸専一年生の作品発表。今回はやどかり祭での神輿、浴衣コンテストパフォーマンスに焦点を当て、ポスター・チラシ制作、T＋でのやど祭展を行いました。T＋展示では300人近くの来場者に足を運んでいただくことができ、一年生の勢いを見せつけることができたかと思います。一年生の初めからこのような活動をすることは珍しいとよく言われましたが、ほかの人がしないのは技術不足でなく積極性の問題だと考えています。今回芸専通信として参加してくれたメンバーは怖気づかない姿勢を持つ楽しさを感じてもらえたのではないでしょうか。

今後の課題

ポスター、チラシは一生懸命制作したのですが、貼っただけ、配っただけで終わってしまったのでそれを見ての反応といったなにかを得ることができませんでした。モチベーションにもかかわるので次回こういうことがあったら改善したいです。

経験者からのメッセージ

T-ACT というと二年生、三年生になってから、という思い込みがあるかもしれませんが一年生の今だからこそ企画・参加してみてほしいです。グループで行動したりグループで成功に導く活動をするというのは生きている限り絶対に必要なことなのに、学校で学ぶことはあまりありません。筑波大学ではこんな贅沢な環境が用意されているのですから是非使い倒して経験値の肥やしにしてくれればいいと思います。

運営者側から見たパーティシパントの変化

一緒に活動した彼らをあまり参加者としてみてはいませんが。（自分より大きな仕事を割り振っています）

デザインをすること。締め切りを守ること。人とかかわること。人に伝えること。何案も練ること。助け合うこと。自分以外の作品を題材にすること。受験の時に経験したような芸術活動とは全く違う芸術に触れることができた場になったのではないでしょうか。自分が作った作品が知らない大勢の手元に届くといった特別感、非日常感はきっと精神的に成長する刺激になります。

私がリーダーでは技術面で伸ばすことはできません。ただグループワークを楽しいと思えるようになっただろうとはちょっとだけ自信があります。

T-ACT に関する感想

印刷時遅い時間まで手伝っていただき、お世話になったことばかりです。さらに望むとしたらなんでしょうか…T-ACT 自体がもっと広まってほしいと思います。まだ「自分には関係ない」「意識高い系がやるやつだろ」「なにそれ」といった認識が見えます。せっかく頑張って企画する人がいても参加者となりうる筑波大生たちがこれではちょっともったいないです。

つながろう！楽しもう！福島ジュニアフェスティバル2017（17009A）

T-ACT プランナー　高取　美央（生物資源学類3年）

活動目的

2011年３月の東日本大震災で起きた原発事故の影響で、福島県からつくば市周辺に避難している、あるいは避難の経験のある子ども達とその保護者の方達を対象にイベントを行います。ぜひ、私たちと一緒にイベントを企画・運営しませんか？

東日本大震災からすでに６年が経過しました。しかし今もなお、避難している子ども達に対して、繰り返す転校により友達が出来にくい、避難先の学校でいじめに遭うなどの問題が全国的に起きています。

そうした問題を分かち合い、また未然に防ぐために、私たちは以下のことが必要だと考えました。

①福島県からつくば市近辺に避難している、あるいは避難経験のある子ども達やその保護者（同じ境遇の人同士）のコミュニティ形成。

②震災や避難者に対する正しい理解。

そのために、次のような目的でイベントを開催します。

①福島県からつくば市近辺に避難している、あるいは避難経験のある子ども達やその保護者（同じ境遇の人同士）の交流の場を継続的に作る。また、参加者に楽しんでもらい、特別な思い出を作る。

②多くの学生とともに避難者との交流を深めることで、震災や避難者に対して正しく理解してもらう。

このイベントは筑波大学公認一般団体　Tsukuba for 3.11のメンバーを中心に２年前から実施していました。

今回は特に、より多くの学生が震災やボランティアについて関心を持って欲しいとの想いで、T-ACT を通じて募集させていただきました。

自然災害はいつ起きるかわかりません。

いざというときすぐに動ける人が増えるように、より多くの学生が震災やボランティアに興味をもつきっかけを作れたらと思います。

活動計画

４月　話し合い開始（福島ジュニアフェスティバル2017実行委員会 発足）
　　目的・日程決定
　　運営メンバー募集

５月　中旬までに大まかな内容決定（ゲスト含む）
　　企画書作成・茨城県教育委員会に広報に協力していただけるよう後援を申請
　　いばらきコープさんに当日の食材提供を依頼・相談

６月　内容を詳しく決める
　　広報開始

７月　開催
　　（子ども達と一緒に体を動かすゲームなど親睦を深められるアクティビティー、学生サークルによるショー及び体験会　等）

活動期間

平成29年４月25日～29年９月30日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：瀧田渓吾（生物資源学類４年）、野中駿宏（生物資源学類３年）、名取暁（生物資源学類３年）、菊池礼花（社会学類３年）、加古捺巳（社会工学類３年）、野中美那（生物資源学類３年）、姫氏原慎也（社会工学類２年）、小林彩香（比較文化学類２年）、若松玲奈（国際総合学類２年）、池田花於里（比較文化学類１年）

P：草野都（生命環境系）

備考

参加者は全員、いばらきコープのイベント保険に団体加入の予定。

活動報告

活動成果

日時：2017年 7 月23日（日）10：00～16：00
参加対象：福島県をはじめ東北各県から茨城県に避難している親子、つくば市在住の親子
内容：自己紹介ゲーム、準備運動、フープリレー、ジャグリング、昼食、ものまねゲーム、ダブルダッチ、ドッチビー

参加者の子どもたち、保護者ともに楽しんでいただけた。子どもたちだけでなく、その親や学生も一緒にアクティビティーに参加することで相互のコミュニティが取れ、つながりがより深まったと感じた。また、ジャグリングやダブルダッチなどの学生団体にサークル単位で参加していただき、より多くの学生に震災に関わるイベントに携わるきっかけを作ることができた。

今後の課題

様々な方面で広報を実施したが対象となる参加者が十分に集まらなかったことから、イベントの需要について改めて見直す必要があることがわかった。今後も、避難している方々とのつながりを大切にし、時間の経過と状況変化に合わせた事業を行っていきたい所存である。

経験者からのメッセージ

人をどんどん頼りましょう！！自分だけではわからない色んなアドバイスをもらえて、活動が捗ります。

運営者側から見たパーティシパントの変化

想像力を働かせて、いろいろなアイデアを出してくれました。

T-ACT に関する感想

イベントに参加する一般の人々に対するイベント保険について、もっと情報をいただけると助かります。

学生プロジェクト Nature Human Linkage（17010A）

T-ACT プランナー　近藤　瑞穂（生命環境科学研究科修士課程2年）

活動目的

近年、人為的な開発や気候変動・異常気象などによる自然環境の変容と損失が問題になっている。それぞれの地域にどのような生きものが、どこに、どのくらい生育生息しているのか、という情報は、自然環境の保全のための重要なデータである。そこで、身近な自然環境の保全を目的に、地域の生き物及びその生育生息環境を調査する、市民による生き物調査が各地で実施されている。こうした活動は、身近な自然に目を向けることが習慣化し、自然の変化に気づける市民の存在に支えられている。

ワークショップでは、小学生に楽しく生き物調査を体験してもらい、身近な自然に目を向けるきっかけを提供する。生き物を観察する際の注目ポイントやデータの取り扱いについて、さらに集めたデータをインターネット上のデータベースに登録するまでを体験する。普段、なかなか見ることができない生き物を知ることで、人との共存の方法について考えるきっかけとする。

活動計画

・月に一度のミーティングを行う。
・7 月に 2 回江戸川区立二之江第三小学校「すくすくスクール」にてワークショップを行う。
＜ワークショップの開催概要＞

江戸川区立二之江第三小学校のすくすくスクール事業にご協力いただき、身近な自然を観察するワークショップを開催する。当事業は、放課後に児童が自由に活動できる場を提供するものである。

＜ワークショップの目的＞

1．身近な自然や生き物に目を向ける
2．観察や記録を残す際に注目するポイントを知る
3．観察したデータを整理して共有するという生き物調査を体験する

活動期間

平成29年 6 月 1 日～29年11月30日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：神宮翔真（生命環境科学研究科博士課程 1 年）、小川結衣（生命環境科学研究科修士課程 2 年）、岡田浩平（生命環境科学研究科修士課程 1 年）、甲斐龍之介（生物資源学類 3 年）、相澤良太（生物資源学類 3 年）、谷口咲輝（生命環境科学研究科修士課程 2 年）
P：佐伯いく代（芸術系）

備考

・保険について

本プログラム実施時の事故等について、参加児童ならびにすくすくスクール指導者についてはすくすくスクールにて保険に加入。

筑波大学学生は大学の学生教育研究災害傷害保険に加入。

活動報告

活動成果

2017年 7 月12日と19日に、東京都江戸川区立二之江第三小学校のすくすくスクール事業にご協力いただき、身近な自然を観察するワークショップを開催した。身近な自然や生き物に目を向け、観察や記録を残す際に注目するポイントを知り、さらに観察したデータを整理して共有するという生き物調査を体験することを目的とした。このワークショップを通じ、参加した児童は、生き物に触れることの大切さや、身近な生き物の記録を残すことの必要性を理解し、関心を広げることができた。また、江戸川区の協力により、実際に参加児童が見つけ、記録した生き物の情報を区の公式ホームページ上に掲載（2017年 7 月18日～）頂き、調査の結果を目に見える形で残すことで、生き物調査の面白さと大切さを教えることができた。なお、ワークショップの開催にあたり、事前に 2 回（2017年 2 月21日、6 月21日）小学校に出向いてミーティングを行った他、大学内でも会議を実施、準備にあたった。

2017年11月 4 日に筑波大学の雙峰祭にて企画展示を行った。「つくばのけもの」と題して、プロジェクトで収集したデータや昨年度の自然保護寄附講座の実習において得られたデータなど、多様な視点からつくばにおけるけものと人の関係を学んでもらうことを目的にポスターやクイズ形式の展示を行った。子供から大人まで幅広い年代の人につくばにおける野生動物の実態に興味を持ってもらうことができた。来場者は 1 日で200人程度であり、学長にも見学いただいた。なお、企画展開催にあたり、NPO 法人つくば環境フォーラムにご協力いただき、2017年 8 月20日～9 月23日まですすみの森にトレイルカメラを設置、つくば市内の野生動物のデータ収集を行った。

今後の課題

すくすくスクールのワークショップの 2 日目にパソコンを使って江戸川区公式ホームページに生き物情報を掲載したが、低学年にはキーボード入力が難しく時間がかかってしまった。小学生にはパソコンではなくもっと簡単な方法で観察データを共有する必要があると感じた。活動場所が都内だったため、スタッフの交通費の負担が大きかった。備品の購入までに時間がかかることを考慮に入れておらず、準備が後手に回ったところがあった。詳細な計画と必要な備品の洗い出しを早急に行う。

雙峰祭では、予想していたよりも多くの人に来場していただいたので人手不足だった。プロジェクトのメンバーを集めることが今後の課題である。

経験者からのメッセージ

自分たちが考えた企画をメンバーや外部の人達と実現することは、大変ですがとてもやりがいを感じることができ、今後の糧になると思います。上手くいかない時は一人で悩まずメンバーや T-ACT コンサルタントの黒田さんに相談することで、より良い企画になると思います。

運営者側から見たパーティシパントの変化

東京都江戸川区立二之江第三小学校の児童は普段の授業から生き物に触れ合う機会はあったが、ワークショップの参加児童は、生き物を探す楽しさだけでなく、観察して調査の結果を共有することの大切を学んだ。

筑波大学の雙峰祭の来場者の多くはつくば市に野生動物が多く生息していることを知らなかった。しかし、我々の展示を通して野生動物の実態や農作物への影響、ロードキルが多発していることに興味をもってもらえた。

T-ACT に関する感想

コピーやラミネートが無料でできたのがすごく助かった。ただ、T-ACT のツイッターアカウントを利用してオーガナイザーの募集をしていただいたが、あまり反響はなかったのでもう少し広報活動の方法をアドバイスしてほしかった。

みかんジュース飲み比べ（17011A）

T-ACT プランナー　宮部　ひかる（生物資源学類2年）

活動目的

今回の春休みに愛媛のワーキングホリデーに10日間ほど行ってきました。

私はただただみかんを食べるのが好きという理由で行ったのですが、このワーホリに行き柑橘についていろいろなことを学ぶことができました。

自分はかなりみかんが好きという自負があるのですが、愛媛に行ったら聞いたことのない品種にたくさん出会いました。

しかも、そのどれもがそれぞれ個性を持っていてすごくおいしいんです！

「自称ミカン好きの私が知らなくてほかの人が知ってるわけない！」

「こんなおいしい柑橘が温州ミカンやデコポン以外にもあるんだっていうことを知ってほしい！」

そんな思いが帰ってきてから沸々とわいてきました。

そこで今回、つくばの人に柑橘を知ってもらうために柑橘のジュース（そろそろ柑橘シーズンが終わってしまい品種がないので…）の飲み比べ会を開きたいなと思いました。

この場でいろいろな柑橘の味を知ってもらい、スーパーなどで見かけたとき少しでも興味を持っていただけたら、さらに言うと買っていただけたらいいなと思います。

活動計画

開催に向けての準備

・品種の説明などを考える

・愛媛の農家さんからジュースを送ってもらう

・その他なにか楽しめる企画を考える

６月中　開催

活動期間

平成29年５月１日～29年６月30日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：原田壱成（生物資源学類２年）、野原夢乃（芸術専門学群２年）、中村ちはる（芸術専門学群２年）

P：松下秀介（生命環境系）

活動報告

活動成果

活動内容

一般の人にもっと柑橘を知ってもらおうとみかんジュース飲み比べを企画した。

企画では、

・8 種のみかんジュースを飲みくらべし、チェックシートを記入してもらう

・みかんクイズでみかんについて簡単に知ってもらう

・みかんについてのパンフでみかんを知ってもらう。

目標達成度

60パーセント

企画が初めてだったこともあり、いろいろと準備不足なことがあった。

しかし、一般の人に柑橘の種類の多さを知ってもらえたようでうれしかった。

今後の課題

先の見通しがついてなくて、準備が不足しすぎていた。

経験者からのメッセージ

案外自分のやりたいことを実現するのは簡単かもしれないのでどんどん企画してほしい。

運営者側から見たパーティシパントの変化

柑橘のすごさに参加者の人が驚いていてうれしい。
また、参加者の柑橘に対する思いを聞けて良かった。

T-ACT に関する感想

何もわからないところから始まったがいろいろアドバイスしていただけてよかった。

手作りグッズを作る会（17013A）

T-ACT プランナー　大井　千聖（人文学類1年）

活動目的

筑波大学に手芸サークルを立ち上げるのが最終的な目的です。この活動は、そのサークルの人員確保、及び試運転を目的として発案しました。

近年、手芸業界では「レジン」「プラバン」等の高価な器具を用意する必要がある物や「デコポッジ」「マニキュアフラワー」等の初心者にはやり方が分かりづらい物が流行しております。長年手芸好きであった方々が「新しい物はよく分からないから」といった理由でこれらの新しい形のハンドクラフトを避けて、やがて手芸から離れていってしまうのは非常に惜しいことであります。

そこで、手芸好きが集まって器具を共有したり、新しい技術や情報を教え合う場があれば、古参の手芸ファン達もそれらの新しい形のハンドクラフトをもっと身近に感じられるようになるのではないかと思いました。

手芸をするのに学類は関係ありません。手芸を通じて、学類を越えた交遊関係を築くことができればこれほど嬉しいことはありません。また、参加者と作品が十分に集まった場合は11月の雙峰祭で作品の展示・販売をしたいと考えております。

人数、設備が十分に揃い、サークルとして今後も運営を続けられるような規模になれば、ハンドクラフト同好会として正式にサークルを立ち上げるつもりです。

活動計画

５月　参加者の募集、手芸体験会の実施
６月　週１、２回の活動開始
　　及び月１回の手芸教室の開催
　　空き教室を借りて活動場所とする。
　　普段の活動では、各人で持ってきた材料、あるいは回収した活動費で購入した材料（あるいはキット）を用いて制作を行う。
10月　雙峰祭に向けた活動（仮）
11月　雙峰祭での出店（仮）

活動期間

平成29年５月31日～29年11月30日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：北條海織（人文学類１年）
P：中野目徹（人文社会系）

活動報告

活動成果

週二回活動場所に集まって手芸活動や情報交換を行った。ツイッターやT-ACT のページを見て来てくれた人が多く、思いのほか人は集まった。来るもの拒まず去る者追わずというスタンスを取っていたため人の出入りが激しかったが、最終的に毎回５名程度が集まるような形で落ち着いた。10月に外部の講師を招いて開催したつまみ細工講習会には、部員の口コミや Twitter での宣伝が功を奏したのか９名もの参加者が集まり、さらなる部員獲得の余地が見えた。現在は、サークルに形を変えて活動を続けるための準備に入っている。

今後の課題

宣伝にあまり力を入れられなかったので当初全く人が来なかった。もう遅いと思いつつ秋に企画の Twitter アカウントを作成したが、これが意外にも人々の目に留まり思わぬ宣伝効果を得た。今後はこちらでの宣伝に力を入れていきたい。

経験者からのメッセージ

ポスター、Twitter、T-ACT のページはどれも意外と見られている。どうせ誰も見てないだろうなどと思わずちゃんと更新すること。プランナーが一人でなんでもやろうとするとボロがでるものであるので、適度に他の者に仕事を割り振ること。

運営者側から見たパーティシパントの変化

特に変化は無いように思われる。手芸の知識・技能が身についたくらいである。

T-ACT に関する感想

何度も相談に乗ってくださってありがとうございました。無理なお願いであることは百も承知ですが、T-ACT の窓口に行くときに毎回別の部署のお部屋を通過しなければならなかったのが少し気まずかったです。そのくらいの度胸もない奴がプランナーなどやるなという話でしょうが、もっと手前にあれば相談しやすいのにと常々思っておりました。

食について学ぼう（17014A）

T-ACT プランナー　徳谷　祐輝（社会工学類3年）

活動目的

筑波大学の学生は、アパートや宿舎で一人暮らしをしている人の割合が非常に高いですが、勉強やバイト、サークルなどで忙しい大学生は、なかなか自炊する時間や気力がなく、外食に偏りすぎている人も多いのではないかと思います。将来の健康のために、健康的な食事は大変重要ですが、現状としては食にしっかりと関心を持って生活している大学生は少ないのではないでしょうか。

そこで、私たちは、勉強会を通して私たちを含む大学生の食への意識を高めて行きたいと思います。

活動計画

まずは、5月から6月にかけて、自分たちの中で食育の重要性をしっかりと理解するための勉強会をします。筑波大学で食を専門にしている先生にお話をしていただいたり、食に関する本や映画を調べたり、手軽にできる自炊向きのレシピを調べたりして、自分たちが食育のエキスパートを目指します。

その集大成として、食の重要性や楽しさを広めるワークショップを企画しています。この勉強会の中で詳しい内容を企画し、別企画として申請する予定です。

活動場所：中央図書館セミナー室、第3エリアの教室など

活動期間

平成29年5月11日～29年11月10日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：石井雄太（物理学類3年）、齊藤啓誠（社会工学類2年）、部坂親太郎（応用理工学類2年）

P：湯澤規子（生命環境系）

活動報告

活動成果

今回の活動では、食に関するワークショップを開催し、筑波大学生の食に対する意識を高めていくという目的で、食に関する様々な問題についてのディスカッションやワークショップの計画を立てた。何度か話し合いを重ねたものの、目標を実現するための十分な時間や人手を確保できず、ワークショップの実現には至らなかった。

当初の目標は達成できなかった一方で、話し合いを重ねる中で運営メンバー自身は食に関して様々な知識や考えを得ることができ、完全に意義のない活動とはならなかったと考えている。

今後の課題

一番の課題は、プランナーを含む全員が「このプロジェクトを実現したい」という強い思いを持てず、各々の勉強や事情が優先になってしまい、T-ACT の活動がなかなか進められなかったこと。また、メンバーのスケジュールが合わずに活動が流れてしまうことがあり、スケジュール管理や、活動の予定をきっちり立てる必要があった。

経験者からのメッセージ

今回のプロジェクトは実現できませんでしたが、挑戦することに意味はあったと思います。熱い思いと予定や方向性をしっかり定めてやれば、思い描くプロジェクトを必ず実現できると思います！

運営者側から見たパーティシパントの変化

あまり変わらなかった。

T-ACT に関する感想

今回はあまり活動報告などができず、担当の方にはご迷惑をかけてしまったと思いますが、対応はとても手厚くて素晴らしいと思いました。

つくば MVP ～ Attracting! ～（17015A）

T-ACT プランナー　飯沼　天空（比較文化学類1年）

活動目的

自分一人でギターの練習を始めたが、時々誰かと演奏することも楽しそうだと考えることがある。その時に、例えばドラムは軽音部でロックをやって、バイオリンはオーケストラでクラシックを演奏する、というようにそれぞれの楽器で演奏する楽器の組み合わせや曲のジャンルが固定されていることに思い至った。しかし、エレキギターでバッハを演奏することも、琴でビートルズをやってみることも不可能ではないはずだと考えた。そこで、様々な楽器（声、手拍子など、「人の身体」も含め）が一堂に会し、皆で一つの楽曲を作り上げることができたら、観客とも一緒に今までにはなかった新しい音楽の楽しみ方ができ、演奏する側も新たな刺激が得られるのではないかと思った。

「つくば MVP（ミュービップ）」は「つくば Music Variety Project（つくば音楽多様性プロジェクト）」の略。４年間を通して活動できればと考えているが、まず今年は目標を「雙峰祭での発表」に絞って、つくば MVP の形作りができればと思う。その準備段階として、今回の企画では「参加者募集」と「パフォーマンスの方向決め」を宣伝活動、ミーティングを通して行う。

活動計画

1．雙峰祭への企画申請
2．ポスター・チラシの作成と宣伝
3．週に一度あるいは２週に一度程度のミーティング（隔週木曜日、それぞれの楽器や普段の音楽活動について伝え合いながら今回演奏したい音楽の方向性を考える）

活動期間

平成29年５月11日～29年７月９日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：小林由花（比較文化学類１年）、長部世理菜（比較文化学類１年）、武田爽（比較文化学類１年）、阿部光児（比較文化学類１年）、楊欣海（比較文化学類１年）、稗田真衣（人文学類１年）、刑部朱音（人文学類１年）
P：小川美登里（人文社会系）

備考

第43回雙峰祭の企画団体としての活動。

活動報告

活動成果

参加者募集の結果、合計８人が集まり、曲も決めることができた。
周囲の認知も上げることができ、複数の学類にわたってメンバーを確保することができた。

今後の課題

練習場所と、全員が集まって話し合いや練習ができる時間の確保が予想以上に難しく思った。技術的なことが全員でカバーするのが難しい企画なので、それぞれがそれぞれの役割について自覚してもらう必要があると感じた。
また、今後４年にわたって継続して活動していくにあたって、広報活動などの必要性も感じた。

経験者からのメッセージ

ステージパフォーマンスの企画は、「舞台の確保」だけでなく、実際に自分たちで演奏の練習をする必要があるので、どのようなスケジュールで進めていくのかの見通しを立てないと大変だと思う。
ただし、仲間を見つければ仲間が優しくサポートしてくれるので、その人たちを信頼しながら進めていってほしいと思う。

運営者側から見たパーティシパントの変化

ビラ配布の結果、認知度が向上し、雙峰祭のステージに興味を持っていただける方、今回は参加できないが興味を持って頂ける方が増えた。

T-ACT に関する感想

サークルだとハードルを感じてしまうような内容でも、「T-ACT」ということで興味を持ってくれる人が複数いたこと。

サークルという縛りやルールがなく、すべて自分たちで決めて動けるので、やりたいと思ったことを実現させやすいこと。

キャンプで語る（17017A）

T-ACT プランナー　宮部　ひかる（生物資源学類2年）

活動目的

目的：
つくばで、大学生同士が自分や将来についてを語る場を気軽に参加できる形でつくる。

対象：
普段の大学生活の中でまじめなことを話すのが恥ずかしい人
まじめな話を聞いてくれる人がほしい人
自分について人生について真剣に考えるきっかけがほしい人
漠然とした不安はあるけどセミナーみたいな所には行きづらいなと感じている人
友達とは真面目な話をしにくいという人

活動計画

5月　・ターゲットを絞る方法
・当日やる軽いレクリエーション
・予算
・日程
などを決め、内容を詰める
6月上旬　・キャンプ場の予約
・イベントの参加者の募集
7月7日、8日　キャンプ開催
・場所　ゆかりの森
・交通手段　自転車
・参加費あり（1000～2000円）
・キャンプの宿泊は希望者のみ
・キャンプはキャンプ場にテントを張って行う

活動期間
平成29年５月１日～29年７月15日

対象者
学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：伊藤春花（体育専門学群３年）、野崎凌太（比較文化学類３年）、高野大（比較文化学類４年）、飯塚光（人文学類３年）
P：松下秀介（生命環境系）

活動報告

活動成果
活動内容
・なにか心にモヤモヤを抱えている人を集めキャンプをし、話す機会を設けた。
目標達成度
60パーセント
人数が少し物足りなかったが、来てくれた人たちは新たな交流ができた。

今後の課題
広報が大変。

経験者からのメッセージ
広報は早いうちから

運営者側から見たパーティシパントの変化

結構、変な人（いい意味で）がおおかったので参加者の人もいろいろな人と出会え見聞（？）が広がったのではないか。

T-ACT に関する感想

今回具体性に欠けていたところもあって、手伝ってくれる人がいるのかわからなかったけど人員をさがすのを手伝っていただいたのは助かりました。

学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について伝えよう～（17018A）

T-ACT プランナー　南雲　俊樹（教育学類2年）

活動目的

８月20日に茨城子ども大学で開催するプロジェクト「学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について知ろう～」に参加した子供たちを対象に、学んだ内容をアウトプットしてもらう場として、Bivi つくば、その他大学内での展示ブースを提供するワークショップです。子ども大学にて行う授業では、子どもたちが世界の教育に目を向けるきっかけづくり、知識のインプットを目的としておりますが、本企画における目標は、子ども大学での授業で世界の教育の現状を知り、そこで学んだことを学生とともに改めて考え直し、模造紙やその他展示物を作成する中で実際に自身の考えを文章にまとめたり、視覚的に改めて世界の教育を捉えるなどアウトプット的側面を重視しながら、子供達に教育に対する考えを構築させ、今後の将来の展望などを持ってもらうこととしています。

活動計画

６月　展示物の決定、模造紙で取り扱う内容の決定
７月　展示物の作成
８月　授業にてイベントの実施の告知、参加する小学生を募集
９月　子供達とともに大学内の教室または Bivi つくばにて展示物、模造紙を作成。子供達と模造紙の発表
10月　Bivi つくばにて展示
11月　その他学内で展示できる場がある場合は学内にて展示する予定。反省

活動期間

平成29年５月27日～29年11月27日

対象者

学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：高橋和生（障害科学類２年）、細田柊登（教育学類２年）、小川真穂（障害科学類２年）
P：塩川宏郷（人間系）

備考

他企画「学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について知ろう～」と連動して行う企画になっています。

活動報告

活動成果

９月18日と30日で、「学校に行けるのはあたりまえ？～世界の教育について知ろう～」に参加した小学生のうち19名と一緒に、展示物（地球ランタン、未来の絵）の作成、模造紙の作成と発表を行いました。

小学生が作った展示物と、こちらで用意した展示物を10月８日に、つくば BiVi のイベントスペースにて展示しました。60人近くの方が来場し、感想を書いてくださり、こちらも来場してくださった方と交流を通して、多くのことを学べました。

２回目のイベントとして、雙峰祭にブースを出しました。こちらには二日間を通して約600人の方が足を運んでくださいました。多くの方が教育に関心を持ってくださっていることがわかり、私たちも驚くとともに非常に喜びを感じました。

昨年から活動を始めましたが、今年は茨城子ども大学にて講師をさせていただいたことで、様々な活動をすることができました。多くの子ども達とふれあう中で、私自身が改めて教育を深く考えることができたと思います。

今後の課題

昨年との大きな変化で、新しく挑戦することも多く、円滑な運営ができなかったり、チーム内での仕事の割り振りなどのバランスが悪かったりなど反省は多くありました。また外部の方との連携も多く、その面でもまた不備があったと思います。

来年度以降もこの活動を継続する際に、どのような形で展開してくのかもまた深く考える必要があると思います。

経験者からのメッセージ

規模が大きかったり、パーティシパントが多かったり、外部との連絡が多いと、仕事を振るのが難しかったり、色々なことを調整したりしなくてはならず大変だと思います。しかし大変な分だけ、終わった時のやりがいは大きいですし、今回僕はいろいろな子ども達と交流できたり、外部の方とのコネクションもできました。
ぜひ、大変さの中にある貴重な体験を大事にしてください！

運営者側から見たパーティシパントの変化

最初は新しいことばかりで、なかなか方向性がまとまらずに意識の差が見られましたが、中身がしっかりできてくると、全体としてそれぞれが責任感を持って活動に臨むようになりました。意見も活発に出るようになり、全体で良いものにして行こうという意識になりました。

T-ACT に関する感想

様々なサポートをしていただき、ありがとうございました。常にアドバイスをしていただいたり、支えてくださったおかげで活動に集中することができました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

English Camp（17019A）

T-ACT プランナー　森田　美咲（心理学類2年）

活動目的

国際交流が進んでいる筑波大学の特性を生かした地域との交流の機会をつくる
小学生にプロジェクトを通して英語や異文化に興味をもってもらう
留学生に異年齢の日本人との交流の機会をつくる
留学生に日本文化を体験してもらう
総合大学の特徴を生かし、様々な学群の人と交流する機会をつくる

活動計画

４月　　メンバー募集
５月　　メンバー、役割決定
　　→それぞれの役割に従い企画計画・運営を進めていく
　　役割：SNS 広報、連絡係、しおり・スケジュール係、食事係、イベント係、会計係
６月　　留学生、小学生の募集
７月16日　【English Camp】実施

【実施期間】

学生・留学生は当日の企画・運営に加え、事前活動として４月下旬からミーティング、事後活動として、まとめ・反省を７月下旬まで行う予定です。

１．日時　７月16日（日）　９：45～17：00
２．対象　小学生20名　留学生10名　大学生13名
３．スケジュール（予定）
９：30　現地集合・受付
９：45　アクティビティー①

【自己紹介ゲーム】

グループのメンバーで円をつくり、最初に自己紹介する人が毛玉をもって英語で自己紹介（名前・年齢・出身・趣味など）を行い、毛糸の先を持ちながらメンバーの誰かに渡す。全員終わった後、毛糸で蜘蛛の巣のような形ができあがる。それを、前の人の名前などを言いながら糸を戻していくゲーム。

＊毛糸が必要

【Scavenger Hunt】

児童にアルファベットの文字が書いてある紙を配布し、その字で始まるものを一個探して紙に書いてもらう。英語が分からない物を見つけたら留学生または学生に聞く。チーム同士で競争し、時間中に一番多くの言葉を集めたチームの勝ち。（例：A/ant・apple B/ball・bee）

＊紙・画用紙・筆記用具が必要
☆新しい単語（名詞・形容詞）を学ぶ
☆「How do you say ～ in English?」という文法を使ってみる

【Verbs Charades】

英語の動詞を使ってジェスチャーゲームをする。

＊画用紙が必要
12：00　昼食
13：00　アクティビティー②

【パートナー探し（チーム替え）】

全員に一枚ずつ名前や役職が書かれた紙を配る。自由に歩き回りいろんな人に Are you ○○？と尋ねながらパートナーとなる人を探してもらい、見つけたら一緒に座る。（例：Romeo と書かれた紙をもっている人は Juliet を持っている人を探す）

＊紙が必要

【推理ゲーム】

各チーム１人ずつ回答者を選出し、回答者は目をつぶる。回答者以外の人にお題の絵を見せ（例：お題 turtle）、絵を見た人たちは各自紙にお題を連想させる単語を書く。（例：slow, animal, greenなど）回答者はチームメイトが書いた単語から推理して答える。

【スイカ割りゲーム】

チームの代表者がスイカに見立てた紙風船を割る。

☆ Right と Left を使い分ける
＊紙風船と棒と目隠しが必要

16：30　まとめ
17：00　現地解散
【実施する場所】
筑波大学構内（体育館、野生の森、教室）（予定）
→ 小学生にとって大学はなかなか縁がなく、この機会を通して、大学の雰囲気を知って欲しい。
→ 筑波大学は「開かれた大学」であるので、学生だけでなく地域の人に開かれた場所となる。

活動期間
平成29年４月17日～29年７月20日

対象者
学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：片岡永理奈（国際総合学類２年）、鬱田圭介（生物資源学類２年）、鈴木葵（教育学類２年）、立野温（生物資源学類２年）、村上舞佳（国際総合学類２年）、佐々木寛明（生物学類２年）、Seminario Mondejar Gonzalo Alfredo（生物学類２年）
P：山田亨（人文社会系）

備考
茨城県の女性・若者企画提案チャレンジ支援事業の助成金に応募し活動金にあてる予定です。
【予算案】
収入（単位：円）
県助成金　100,000円
＊昼食代を集めようと思います。
合計　100,000円＋昼食代
＊「区分」には、県助成金、自己負担等を記入すること
支出（単位：円）
消耗品費　13,840円 ･･･ 名札、画用紙、筆記用具、毛糸、紙風船、アイマスク、棒
印刷製本費　30,000円 ･･･ ポスター、チラシ、報告書など
通信運搬費　6,560円 ･･･ 郵送費（定形郵便物82円×40人×往復分2=6,560円）
保険料　20,000円 ･･･（見積もり中）
会場使用料　9,600円 ･･･ 野生の森　300円×8時間（９：00～17：00）=2,400円
照明代　100円×8時間 =800円
ラウンジ（1F）　800円×8時間 =6,400円
備品購入費　20,000円

活動報告

活動成果
県内の小学生を対象とした English Camp を計画した。当日の企画実行は行えず中止と決定したが、大学内外の人への広報、安全管理等、この先、企画運営を行う上で必要となる知識や技術の基礎的な部分を学べたことは自身、そしてメンバーの成長へと繋がったと感じている。

今後の課題
早めに動く。専門的な人にアドバイスを求める。生じうる危険を予測し、対応策を考える。県内の児童を対象とするときは教育委員会にアポをとると物事が進みやすい。

経験者からのメッセージ
具体的に考え、はやめはやめに動くことが大切。やりたいと思ったらとりあえずやってみる。

運営者側から見たパーティシパントの変化
積極的に意見を伝え合うようになった。

T-ACT に関する感想
黒田さんをはじめ、T-ACTの方々には本当にたくさんサポートしていただきました。ありがとうございました。

語り場プロジェクト～分野／学類を越えた繋がりの場～（17020A）

T-ACT プランナー　中井澤　卓哉（教育学類2年）

活動目的

①問題意識

私の専攻である教育学は、様々な分野と密接にかかわりあう分野であり、またこれからグローバル化・高度情報化が進むにつれて複雑性が増すこの社会においては、教育学のみの知見では課題を解決するどころか正しく捉えることすらできない、ということを教育学を１年間勉強して痛感しました。しかし、一人ですべての分野をカバーすることは到底できることではなく、そこで様々な分野の人が集まって「協働する」ことの重要性を認識しました。筑波大学は、２専門学群・23学類を擁する総合大学であり、学際性という面では申し分ないと思いましたが、実際にそのような「学際的な環境」を体現するような「場」、というのが身近にない、ということもこの１年間で実感しました。具体的には、他学類との繋がりはあっても、あくまでサークルなどの友達繋がりで「アカデミックな繋がり」ではない、「アカデミックな繋がり」があったとしても、それは自主ゼミのような分野限定型のコミュニティであって、学際性がない、ということです。このような、「分野を越えた学び・協働の必要性」と、多様性があるにも関わらず、お互いの垣根を越えた「トランスボーダーかつアカデミックな繋がりの場」が身近にない、ということが一つの問題意識です。

さらに、従来の自主ゼミのようなコミュニティでは、アカデミックではあるがどこか堅苦しいというのが一般的な印象で、近寄りがたいという実感がありました。そのような印象は、主にトップダウン型の学びや、学びに対するイメージからくるものであると推測されますが、複雑な課題解決のための「分野を越えた学び・協働」を実現するためには、そのような印象を乗り越えていかなくてはなりません。そのような「従来のネガティブなイメージ」を乗り越え、前述の学び・協働へとつなげていく必要がある、というのが２つ目の問題意識です。

②ビジョン・ミッション

ビジョン：

分野を越えた学び・協働・繋がりによる価値の構築

ミッション：

１．トランスボーダー（分野横断的）かつアカデミックなコミュニティの形成
２．分野を越えた学び・協働・繋がりを通じて生まれる成果物の可視化
３．アカデミックなコミュニティへのネガティブなイメージの払拭

このプロジェクトを通じて、問題意識で述べた「分野を越えた学び・協働・繋がり」から創り出される価値を構築し、いずれはそれらを社会に還元していきたいと思っています。（←ビジョン）そのためには、まずそのような分野を越えた、アカデミックなコミュニティの形成が必要であり（←ミッション１）、そこで生み出される価値や成果物は何か、というのを探求し可視化することによって還元の可能性を検証し（←ミッション２）、同時にアカデミックなコミュニティに対するネガティブなイメージを払拭し（←ミッション３）、コミュニティの多様性、規模の拡大につなげていきたいと思っています。そのために、従来のようなプレゼン形式のトップダウン型学び、座学などを中心におくのではなく、「語り」を通じて「学ぶ」ことを主眼に置きたいと考えています。

活動計画

①活動内容

前述の、ミッションで述べたアカデミックなコミュニティへのネガティブなイメージを払拭する、ということに則って、「語りを通じて学ぶ」という形式で活動していきます。雰囲気も堅苦しい感じのものではなく、いわばカフェのようにリラックスできる仕掛けを取り込んでいきたいと思っています。

活動の具体的な内容は、

１．自己紹介などを通じてお互いの分野について知り合う
２．ワークショップ（自分の分野について、勉強しようと思ったきっかけ、現在の関心分野、将来の展望などの語り合い）などを通じて、お互いの分野について深く知り合う
３．ディスカッション活動などを通じて、自分の分野と他人の分野の（疑似）協働をする
４．プレゼンなどによって、ある特定の分野についてさらに深く学ぶ
５．分野横断的に結集した知を用いたプロジェクト活動（未定）

１～３が中心になり、必要に応じて４、５を取り入れていく形式です。

語りが中心になるので、グルーピングによって少人数単位で活動します。

②活動によって期待される成果

１．分野（学類）を越えたアカデミックな人脈を形成することができる
２．他分野についての知識を得ることができる
３．他分野を知ることによって、自分の分野について相対化により見つめなおす機会になったり、また他分野との繋がりを発見して自身の分野の学習にいい影響をもたらす

4．他分野との協働を通じて、様々な分野の知見が結集してこそ可能な課題解決やプロジェクトができるようになる

③スケジュール

5月：メンバー集め、内容・土台を固める

5月末：既に集まってるメンバーでお試しの活動をやってみる

6月：メンバー追加募集、内容のブラッシュアップ

7月：定期的（1週間に1度）に開催

8月以降：継続できる見込みがあればサークル化・規模のさらなる拡大・他大学との協力

④活動場所

少人数の場合（12人以下）：図書館のセミナー室

↑を越える人数の場合：教室をあらかじめ借りて活動

活動期間

平成29年6月1日～29年7月31日

対象者

学生及び教職員

T-ACTオーガナイザー／パートナー

O：砂川宥人（教育学類2年）、鈴木葵（教育学類2年）、和田多香子（障害科学類2年）、池田和香奈（医療科学類2年）、加藤千尋（医療科学類2年）

P：五十嵐沙千子（人文社会系）

活動報告

活動成果

活動回数：

2回（プレ活動含む）

内容：

テーマトーク形式。「自身の専門分野とキャリア」というテーマで、お互いの学問分野がどのようなものなのかを紹介しあった。その際、過度に専門的にならないよう、自身のキャリアに沿って「なぜその分野を勉強しようと思ったのか」「将来それをどのように活かしていきたいか」など、自分自身に重ねて語り合う手法を採った。

得られた成果：

これまで、学群生レベルではあまり見られなかった学問間の壁の交流を部分的ではあるが生み出した。また、その交流・越境も一方が一方を取り込む（または提供する）という形ではなく、お互いがどのように「協働」可能かという視点を取り入れ、双方向的な交流を生み出すことにも一定程度成功した。これは、たんなるテーマトークや座学ではなく、哲学カフェや物語理論の知見を取り入れた成果であると考えている。

目標達成度：

20％

内容的には手ごたえはあったが、部分的・断片的な成果にとどまった。規模が大きくなればなるほど面白くなる活動なだけに、人集めに失敗したことが致命的であった。

今後の課題

今後の課題

①ファシリテーターの増員

哲学カフェの形式で少人数グループでトークするため、グループによってはトークが崩壊しているところも見られなくはなかった（一方的に話す人がいる場合など）。その際、うまく対処ができなかったため、グループに一人はこの活動の主旨に精通した人を置くことが必要であると感じた。

②参加者の増加

少人数でやると、どうしても活動の特性が最大限に発揮できない。そのため、参加者をより増やしていく必要があるが、その際の広報手段や魅力の伝え方など、コミュニティの特性などをしっかり把握するためにいかに効率的に情報発信していくか、ということをより考えていく必要があると感じた。

経験者からのメッセージ

やりたいと思ったことはとりあえずやってみるのが一番です。ダメだったらダメでいったん立ち止まったりまたチャレンジすればいいし、よかったらよかったでそのまま進めばいいと思います。一歩踏み出すのを押さえて

いるのは案外自分の「心の壁」だったりするので、迷わず挑戦してみましょう。

運営者側から見たパーティシパントの変化

今回集まってくれたみなさんは、「何らかの形でほかの学問分野（を学んでいる人たち）とのかかわりを持ちたい」という人だったので、ある程度モチベーションは初めから高かったです。そのモチベーションに見合う価値をこちらが提供できたかといわれれば全然不十分で申し訳なかったですが、異分野交流の面白みの一端は感じてくれたと思います。

T-ACT に関する感想

活動実施にあたって、一人でやるのとは全然違いました。いろいろな相談に乗ってくださったり、サポートを受けられたりして、チャレンジの垣根を大きく下げていただけたことは、本当にありがたかったです。ありがとうございました。

ピアサポートでつながろう！～みんなで助けあえるキャンパスを目指して～（17021A）

T-ACT プランナー　佐藤　ひかり（心理学類4年）

活動目的

ピアサポートとは、学生同士の相互援助活動のことです。

「悩みはあるけどたいしたことないし…」「困ってはいるけど、学生相談室にいくほどじゃないなぁ…」と、学生生活で悩みを抱えていても、相談機関を利用しにくいと感じている学生は少なくないのではないでしょうか。そういった方に、もっと気軽な同じ学生に相談できる場を提供するピアサポート活動は、他の多くの大学では制度として確立し、実施されています。

そういったピアサポート制度を本学にも導入することを目的として、前回の活動では、他大学のピアサポートチームとの交流・視察や、ピアサポートについての勉強会を行い、ピアサポート制度についての理解を深めました。

今回の活動では、本学の実情に即したピアサポーター制度について考え、可能なところから活動の実施を目指します。具体的には、ピアサポート制度についてのアンケートや学生間の交流促進イベントの実施、ポストの設置などを考えています。

活動計画

基本的な活動としては、7 月から約半年をかけてピアサポート制度の立ち上げについて話し合いを行います（制度設計）。そして、可能なところから実際の活動を行っていきます。

具体的には、以下のような点の検討と、関係する活動を行います。

1．定期的なミーティング（1 ～ 2 週間に 1 回程度の会合）
2．アンケートの実施（本学の実情やピアサポート制度の認知度について調査）
3．ひとことポストの設置（生協のひとことカードのような形で、相談投函ポストを設置、掲示板にて回答。箱の設置場所については図書館のカウンター前のように人の目につくところを検討し、箱を開ける曜日・回答までの日数・掲示すること・緊急時には連絡体制を整備し、専門家の助言を受けることを明示）
4．ピアサポーター養成講座・学生の交流促進イベントの施行（ピアサポートを行うピアサポーター養成プログラムやワークを実際にいくつか実施）

活動期間

平成29年 7 月 1 日～29年12月31日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：石橋碧（心理学類 4 年）、北川慶樹（心理学類 4 年）、五味奈々子（心理学類 4 年）、玉田透子（心理学類 4 年）、本多茉莉（心理学類 4 年）、王東皓（物理学類 4 年）、比嘉真理（人間総合科学研究科修士課程 2 年）、菅原大地（人間総合科学研究科 3 年制博士課程 3 年）
P：杉江征・田中崇恵・田附あえか（人間系・保健管理センター）

備考

必要な経費については、パートナーと相談して工面する。

活動報告

活動成果

ピアサポート相談ポスト（つぶやきポスト）の設置・運営を主な活動として取り組みました。

活動の前半では、ピアサポート相談ポストの設置に向け、1 ～ 2 週間に 1 回のペースでミーティングを行いました。ミーティングでは、ポストの具体的な運営のルールや設置場所、そもそもピアサポートの活動として相談ポストの設置がふさわしいのかなどを検討しました。

活動の後半では、実際にポストを設置し、1 ～ 2 週間に 1 回のペースでポストに投函されるつぶやきを回収、それに対するお返事を書き、掲示を行いました。相談やただのつぶやきなど幅の広いつぶやきに対し、実際につぶやきを書いた人だけではなく、そのつぶやきが掲示されているのを見る人に対しても、なにかしら救いや助けになれるよう、オーガナイザーで相談し、パートナーの先生方にご助言をいただきながらお返事を書きました。悩み相談という、絶対の正解がない問いに対しよりよいお返事を書くため、「その答えも悪くないけど、こうい

う可能性も考えたらいいのではないか。こういう視点もあるのではないか。」「最初にまず、“おつかれさまでした”っていたわってあげる言葉をたさないか。」など、率直な意見交換を行い、違う意見・価値観にふれられたことは、私自身やオーガナイザーにとっていい経験になったと思います。ポストの利用状況としては、平均して1日1通つぶやきが投函されていました。

今回の活動では、相談ポストの設置・運営をメインに行ったため、ピアサポートの認知度についての調査や、イベントの企画は実施できませんでした。次回の活動で検討していきたいです。

今後の課題

今後の課題としては、2点あげられます。

1点目は、活動人数が少ないことです。現在、活動に参加しているオーガナイザー、プランナーのほとんどが4年生のため、来年度以降の活動が危ぶまれています。

それに重なる課題として、2点目に知名度の低さがあげられます。Twitterでの活動報告や、中央図書館に設置という立地の良さはあっても、まだ相談ポストの活動やピアサポートについての知名度は低く、それゆえ、新規メンバーが集まりにくい状況です。活動人数が少ないことには、現在活動中の相談ポストの運営はもちろん、今後活動を広めていくことも難しくなります。どうにか知名度を上げ、活動人数を増やしていくことが今後の課題です。現在は、新歓への参加などを検討しています。

経験者からのメッセージ

相談ポストの設置の上で、パートナーの先生方に大変お世話になりました。活動について相談できるパートナーの方を見つけられると活動が楽になるかと思います。

運営者側から見たパーティシパントの変化

悩みや思いをただ紙に書く、誰かに聞いてもらうというだけでも、すこし気持ちを吐き出せて楽になれる面があるのではないかと思います。実際につぶやきを投函した人がお返事を読んで、どう思ったか、どんな様子だったかはわかりませんが、一生懸命に考えて書いた返事が少しでも力になっていたらいいと思っています。また、つぶやきを投函していなくても、掲示されているつぶやきとお返事を読んで「同じような悩みを抱えている人がいる」と、励まされたり、元気をもらえたりする面があったら嬉しいです。

現状では、力になったらいい、と願望のような形になっていますが、今後、利用アンケートなどを実施してもいいのではないかと考えています。

T-ACTに関する感想

つぶやきポストの用紙の印刷をカラーで行いたかったため、プリンターを使わせていただき、大変助かりました。ありがとうございました。

進め！博士号（17022A）

T-ACT プランナー　本田　恒太（工学システム学類3年）

活動目的

筑波大学の第一エリアには、学生食堂や文化系サークル会館に面して松美池と呼ばれる池が広がっています。1.6 ha の広さがあるこの池は洪水調整機能とともに、風や光による空間表現やボートや魚釣り・水遊び等の多角的な利用をねらって大学の貴重な土地を割いて整備されました。しかし、今現在は当初の目的を果たせていると言えない状況で、ボート遊びはおろか釣りや水遊びをしている姿を見かけることはありません。松美池の有効活用と水質の改善を狙いかつてアヒルボートが運用されていた時期もありましたが、今ではそのアヒルボートも池の端に放置されています。また、泥が湖底に堆積しているためその水質は水遊びに適しておらず、前述のアヒルボートを運用する上でも障害となっていました。

そこで、本プロジェクトではそのアヒルボートを再利用し松美池の有効利用を促します。池の利用が活発になれば、周辺環境も自然と良好な状態になり、周辺エリアのポテンシャルを活かせると思います。また、長期的には松美池のケースがモデルとなり、学内の他の池の活用も進むことを期待しています。

プロジェクトの目標は、身体能力に関わらず誰でも利用できるアヒルボートの開発と、松美池の水質調査および改善の２つです。

アヒルボートの開発は、電動化と遠隔操縦の二本立てで行います。まず、アヒルボートの動力をモータに変更することで重たいペダルを漕ぐ必要が無くなり、力の弱い方や足の不自由な方でもアヒルボートを楽しんでいただけるようになります。そして、操舵システムを遠隔操作可能なシステムに変更することで、搭乗者が松美池の状態に詳しくなくても、豊富な知識を持った人員が遠隔操作で支援することで安心して楽しめます。

水質調査は PH 測定、COD 測定、透視度測定を行います。松美池全体のデータを収集することで、松美池の状態を明らかにするとともに、水質改善前後の変化を確認します。

水質改善は曝気法で行います。これは、アヒルボートによって水を掻き回し泥中に酸素を供給することで微生物の活動を活発化し、汚泥の分解を促進します。

活動計画

【日時】

春学期および夏季休暇中と秋学期の一部。ミーティングは火曜日の18：00より行う。

作業時間は定めない。各自の都合のよい時間に行う。

【場所】

主に松美池の岸で行う。

【日程】

５月：基本計画の決定
　　アヒルボートの引揚げ・清掃・動作確認
　　プロジェクトに係る諸手続き
６月から８月：アヒルボートの改造、水質調査の準備
11月：雙峰祭にて展示

【アヒルボートの改造計画】

・船体を点検し、不備があれば修理する
・水質調査のための器具を搭載する
・モータ駆動に変更する
・無線による遠隔操縦を可能にする

なお、これらの改造は速やかに船体を復元できる範囲に限定する。

活動期間

平成29年６月１日～29年11月30日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：高橋光太郎（物理学類３年）
P：磯部大吾郎（システム情報系）

活動報告

活動成果

・『博士号』第一次改造
- ● 脚漕ぎペダルの軸にプーリーを接続
- ● 同プーリとモータをベルト接続
- ● モータやその他電源用にカーバッテリーを搭載
- ● DC-AC インバータと三相インバータ（モータ PWM 制御用）経由でモータに接続
- ● 三相インバータへの入力をマイコン制御
- ● 船体搭載マイコンと外部マイコンを無線モジュールで接続・通信
- ● 船体舵をボールねじ＋ブラシレスモータで制御→モータのマイコン制御は未完成

・『博士号』第一回遠隔運用試験（雙峰祭展示企画）
- ● 雙峰祭 1 日目は整備不良＋雨天により陸上展示のみ
- ● 雙峰祭 2 日目、天気良好のため走行展示
- ○ ペダル駆動用モータ回転テストに成功
- ○ 同モータを利用したペダル軸（動力輪）の回転に成功→松見池での部分的走行（速度不明）に成功
- ○ 無線モジュールを利用したマイコンの通信テストに成功（？）→船体～陸上のやや離れた区間でのテスト結果は不明
- ○ マイコン～三相インバータ間の通信が結果不明（失敗？）
- ○ 上の結果より遠隔通信による博士号の前進・後退は失敗

・第一回運用試験までの成果
- ● 走行試験は 2 日目のみ
- ● モータを使用した走行、マイコンの通信には（おそらく）成功
- ● マイコン～三相インバータ間の通信が（おそらく）失敗
- ● 有人走行で松見池に堆積したヘドロを確認
  池中央部～ペデストリアン池の淵　間に多量の堆積を確認した
  使用したモータでは堆積したヘドロを乗り越える出力は得られなかった
  人間が脚漕ぎした場合でもヘドロは乗り越える事ができなかった

・松見池水質調査
- ● 水質調査においては単一の地点ではなく複数の地点においてサンプリングを行うことが有用である。したがって Aruduino および GPS を用いた位置情報発信・記録の機構を作成した。
- ● 試験紙を用いたごく簡易的な計測では、池の縁での Ph は中性～弱酸性を示した。以前の T-ACT プロジェクトに松見池の Ph 測定を行いアルカリ性であるとの結果の報告が見られるが、当時より池の性質が変化しているか正しい計測手順を踏まえていなかった可能性がある。

今後の課題

・『博士号』第二次改造案
- ● 強力な推進システム or ヘドロを攪拌しながら進む機構
- ● マイコン・無線モジュールによる遠隔制御の確立
- ● 作業の人手不足

・水質調査
- ● 松見池全体の本格的な Ph 測定
- ● 光透過度の測定による水質汚濁度調査
- ● 透過度測定機構の作成、試験→水密構造の確保が課題

経験者からのメッセージ

・池は大切な資源です。薬品の不法投棄は控えましょう
・Ph はきちんと測定しましょう
・物品の購入は慎重に、用途に合ったものであるかを十分に確認しましょう

運営者側から見たパーティシパントの変化

大学生活における活動への模範的な参加意欲を自ら学び実践していました

T-ACT に関する感想

こちらの半ば支離滅裂な意見にも熱心に耳を傾けていただき感謝しております

T-1グランプリ2017～つくばでお笑いグランプリを～（17024A）

T-ACT プランナー　小林　陽一郎（数理物質科学研究科修士課程1年）

活動目的

本企画の活動目的は、「より多くの人を『お笑い』に巻き込むこと」です。

『T-1グランプリ』は、2014年に筑波大学落語研究会の有志が「もっと筑波大学にいるお笑い好き・面白いことを考えている人と関わりたい」と思い立ち、企画が始まり、今年で４年目になりました。そもそも筑波大学には「お笑いサークル」と呼べるようなサークルが落語研究会しかないという惨状以上に、研究学園都市と呼ばれるつくばは学問に関わる有名な施設は多くある一方、「休みの日は何して遊ぶの？」と思ってしまうほど圧倒的にエンターティメントが不足しています。そこで、私たちは「つくば発（初）のお笑いグランプリ」・『T-1グランプリ』の企画・開催をもって、このつくばを「お笑い」というエンターティメントで盛り上げていくことを考えました。

また、ただお笑いグランプリを開催するだけでは、多くの人を「お笑い」に巻き込むことができないと考え、２年目から「お笑い」を科目として捉えた「解答が面白ければ面白いほど得点が上がるテスト」・『全国統一大学生お笑いテスト』を企画するなど、様々なスピンオフ企画を行っています。

本年度の目標は、以下の４つを目標として活動を行います。

・年々拡大しているお笑いグランプリ『T-1グランプリ』をより拡大していくこと
・『全国統一大学生お笑いテスト』を全国的なムーブメントにすること
・新企画として、お笑いトークとフリースタイル・ラップ・バトルを融合させた『お笑いトーク MC バトル』の企画・開催
・『T-1グランプリ』の宣伝に関する企画の実施（未定）

『T-1グランプリ2017～つくばでお笑いグランプリを～』では、より多くの人を「お笑い」に巻き込む企画作り・実施を目標として活動を半年間、行っていきます。

活動計画

前年度の活動から引き継ぎ

『T-1グランプリ2017～つくばでお笑いグランプリを～』では、一ヶ月に一回ミーティングを開催する。

６月　企画承認終了後
・『T-1グランプリ2017』　エントリー開始・受付（以降、継続）
・『第三回 全国統一大学生お笑いテスト』の問題公表・配布・回収（以降、継続）
・企業協賛募集（以降、継続）
・『お笑いトーク MC バトル』の宣伝準備
・『T-1グランプリ2017』宣伝企画について話し合い

７月　・宣伝企画の実施（以降、継続）

8～10月　・『お笑いトーク MC バトル』の宣伝開始（以降、継続）
・『お笑いトーク MC バトル』の美術・小道具準備（以降、継続）

11月　・『お笑いトーク MC バトル』を筑波大学学園祭り・雙峰祭にて実施
・『T-1グランプリ2017』の美術・小道具準備

12月　・『T-1グランプリ2017』の実施（12/16）
会場はアルスホールを使用する

活動期間

平成29年６月20日～29年12月19日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：荒井怜奈（生物学類４年）、倉澤保（生物資源学類４年）、池上雄紀（生物資源学類３年）、安藤悟史（社会工学類２年）、前川正樹（人文学類１年）、中村惇之介（障害科学類 1年）
P：中村顕（生命環境系）

活動報告

活動成果

【実施企画】

1．『第 3 回 全国統一大学生お笑いテスト』(6 月から12月にかけて)

本年度で 3 年目の企画。科目「お笑い」の期末試験というコンセプトの元行った「投稿型の大喜利」。誰でも投稿ができ、気軽に「大喜利」(お笑い) を体験できるよう行った企画。

2．『つくば大喜利ランド』(11月 4 日・5 日)

筑波大学学園祭・雙峰祭で出展した企画。誰でも「大喜利」ができ、また教室内に展示してある大喜利の展示を観覧できる場所を作り上げた。

3．お笑いの大会『T-1グランプリ2017』(12月16日)

本年度で 4 年目の企画。誰でも参加できる「お笑い」の大会、また、つくば市初の「お笑い」の大会として、つくば駅前アルスホールにて開催した。

【活動内容・得られた成果】

1．『第 3 回 全国統一大学生お笑いテスト』(目標達成度 60%)

今年度より活動規模を全国に拡大するため、「『全国』統一大学生お笑いテスト」とタイトルを変更した。

昨年度同様、筑波大学中央図書館また春日図書館にて問題用紙を半年間設置して頂いた。それに加え、学外のお笑いイベントに対しても営業を行い、東京で開催された大喜利イベント 3 つ、また名古屋で開催された大喜利 1 つ、岐阜県で開催された学生落語の大会で問題用紙を配布して頂いた。また、『盆 LIVE2017』や地域のお祭り（『東光台祭り』など）に積極的に参加し、お祭りに来場された方に解答用紙を配布した。

T-1グランプリ運営員会の SNS（Twitter・Instagram）で昨年度（『第 2 回 全国統一大学生お笑いテスト』）の面白かった解答を投稿し、一つの投稿は多くのユーザーに拡散され108万人程の方の閲覧があった。

結果的に、問題用紙は2500部ほどを配布し、200個ほどの投稿があった。今年度は例年に比べ、沢山の方に配布することができ、沢山の投稿があった。加えて、「全国」というタイトルに負けないよう、つくば市を超え企画を関東に進出させることに成功した。

2．『つくば大喜利ランド』(目標達成度 100%)

活動計画では雙峰祭で参加型のトークライブを行う予定だったが、運営スタッフの確保が難しかったため、急遽、参加型展示企画として本企画を行った。

Twitter 上で募集した大喜利の回答は、企画実施前にも関わらず1200個以上の投稿があった。当日の来場者は700人程、当日、投稿があった回答は800個ほどであった。来場者は学生から家族連れなど幅広く、お子様が親御さんなどに教えてもらいながら大喜利に初挑戦するなど非常に微笑ましい場面も見られた。

大喜利の「絵馬」、大喜利の「おみくじ」など一つ一つの美術に工夫を凝らし、「世界初の『大喜利』の遊園地」というコンセプトの元、斬新な大喜利の場を作り上げることができた。

3．『T-1グランプリ2017』(目標達成度 60%)

昨年度に行った『T-1グランプリ2016』では50名ほどの来場があり、今年度はそれ以上の来場が見込めると予想し、100人キャパのアルスホールを会場にした。

企画宣伝のため、Web ページを作成し、また FaceBook や Twitter などの SNS も頻繁に動かした。FaceBook についてはイベントの宣伝（FaceBook 機能の一つ）を行った。加えて、『第 3 回 全国統一大学生お笑いテスト』には常に本企画のポスターを挟み、様々な場所で宣伝を行った。筑波大学周辺の飲食店やコンビニには、ポスターの掲示をお願いし、実際に30店舗近くのお店にポスターを掲示して頂いた。

結果的に、例年以上に早く参加者募集の告知に動き、31名の企画出場者に参加して頂けた。(昨年度14名) お客様は、100人キャパの会場で立ち見が出るほどに大盛況だった。

出場者の方に行ったアンケートにおいて、80%の方が本企画について「満足した」、「また参加したい」と回答した。

【自分たちの変化】

（小林陽一郎）

今年度は他のサークルを引退したこともあり、本企画に集中して企画進行・団体運営を行うことができた。企画を行う中で、一人で仕事を抱え込んでしまい企画進行が遅れてしまったことなどがあった。今後は、より皆が企画に関わる事ができ、また皆がやりたい事のできる企画・団体作りを心がけていきたい。

また昨年度から「横の繋がりこそ大事」と思い、今年度は他団体の企画等に参加する機会を増やした。他団体の方と関わることにより、自分の団体に足りない事（団結力や仕事の分担の方法）を学ぶことができた。

（倉澤保）

『T-1グランプリ2017』の司会を担当したが、司会が上手くできなかった。より現場慣れをして、経験値を上げていきたいと思った。

来年度以降の目標＝より大会規模を大きくしていきたいと思った。

（荒井怜奈）
半年間の活動を通して、特に「ビラ配り」の活動を楽しいと感じた。自分は「人と接すること」が好きなのだなと知る事ができた。今はメンバー内でお金を出し合い企画を行っているので、来年度以降は協賛を集める活動を行い、様々な方と接する機会を増やしたい。
（池上雄紀）
以前、自分が主催した企画では、宣伝やビラ配りもせずお客様が1名だった。半年間、企画運営に携わり、地道なところから企画ができている事を知った。インターネットでは知名度があっても、リアルな場まで来ないという感覚がある。企画運営を通して、小さく地道な作業が楽しかったので、来年度は動画編集や冊子の編集などを行いたい。
（安藤悟史）
自分は企画に深く関わる事ができなかったが、反省会などで沢山、意見を思いつき発言する事ができた。課題発見の能力を培う事ができた。
（前川正樹）
仕事の分担の難しさを感じた。団体運営の難しさを再認識した。来年度以降は、自分でお笑いやってみたいと思った。

今後の課題

1.『第3回 全国統一大学生お笑いテスト』
今年度の活動で、茨城県を超え関東地区での問題用紙の配布をする事ができたが、まだ活動は全国規模とは言えない。来年度は、北海道から沖縄まで、各都道府県のお笑い団体に営業を行い、活動を全国に広げたいと思う。
また、皆様から投稿頂いた回答を発表する方法に関しては、現在、メンバーで審議中である。（動画にする・冊子にするなど）
2.『つくば大喜利ランド』
全企画に通じる事だが、小林が仕事を抱え込みすぎて、結果的に企画進行が遅れてしまった点があった。今年度から小林のTO DOリストをメンバーで共有して企画進行を行ったが、機能する事ができなかった。来年度以降は、全員で企画を作る運営体系を整えたい。
3.『T-1グランプリ2017』
より多くの方に参加・来場頂ける可能性がある。参加者の方から「年に2回行ってくれ」という要望が多く、宣伝や気軽に参加できる企画作りに繋がる事が予測されるため、来年度は年に2回の開催を行いたい。
リハーサルが不十分で、司会進行が上手くいかなかった。「お笑いが好き」な方をお客様として設定して企画を作って行ったが、実際に来られたお客様は家族連れやご老人などお笑いに詳しくない方も多く、企画やネタがウケていなかった点が見られた。今後はターゲットを明確に設定し、企画を行いたい。

経験者からのメッセージ

T-ACTはこちらが申し訳なくなってしまうほど、無責任で破綻している「やりたい！」という気持ちを、的確に理路整然と「サポートします！」と丁寧に支援して頂けます。
企画を行なっていると、時には自分の「やりたい」が義務のように感じてしまい大変になる事もありますが、そんな時こそT-ACTのスタッフの方々に相談して、自分が成長できる時間を作り上げて下さい！

運営者側から見たパーティシパントの変化

「お笑い」を体験する・表現する事で「悔しい！」「楽しい！」など様々な感情の振れ幅が見えて嬉しかったです。特に『T-1グランプリ2017』に参加された方の多くが、「来年以降も参加したい！」、「もっとお笑いをしたい！」とおっしゃっており、とても良い場を提供する事ができたのだな、と自信に繋がりました。

T-ACTに関する感想

不満や要望等はございません。半年間を通して、沢山のご支援（主に印刷……）誠にありがとうございました。私が卒業しても、多くの後輩たちがお世話になると思いますが、その際は何卒よろしくお願い致します。

はじめてのにほんしゅ（17025A）

T-ACT プランナー　野中　駿宏（生物資源学類3年）

活動目的

○若いうちから日本酒のおいしさに触れてもらうことで日本人の日本酒離れに歯止めをかけ、日本の伝統文化を護る

○正しいお酒の知識を知ることで、「遊ぶためのお酒」ではなく「嗜むためのお酒」を感じ味わってもらう

若者（大学生）には日本酒が苦手という人もいれば、日本酒を非常に好んで飲んでいる人もいる。しかしその傾向は極端に見受けられ、日本全体的にみると日本人の日本酒離れもしばしば叫ばれている。そもそも日本酒は和食と共に世界で認められる日本の伝統文化である。無形文化遺産にも指定されたこの文化を守っていくのは我々日本人の使命ではないかとも考える。嗜好品である日本酒を、若いうちから楽しんでもらう・嗜んでもらうことを目標に、日本酒に関する知識を身につける機会を作ることで、若者への日本酒文化の継承を目的とする。

また、新年度に毎年呼びかけられる飲酒問題。「飲みすぎるとどうなってしまうか」とだけいつも教えられるのであるが、私はそこに違和感を覚える。この問題が発生する原因の一つに「お酒はそもそもどういうものか、どう楽しむことか」を教えられないことが挙げられるのではないかと感じていた。正しいお酒の楽しみ方を学ぶことで、飲みすぎなどの飲酒のかかわる諸問題を減らしていく目的も持つ。

活動計画

酒店舗もしくは酒造に交渉
同時に T-ACT 申請
↓
開催日程等、詳細決定
↓
学内の教室確保等、諸申請
↓
学内向け広報・募集＆諸準備
↓
開催

活動期間

平成29年５月１日～29年８月31日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：内田麟太郎（生物資源学類２年）、保科裕之（生物資源学類３年）、藤原桃子（知識情報・図書館学類３年）
P：氏家清和（生命環境系）

備考

未成年飲酒対策として
・講演会と試飲会の２部制での企画を検討中、未成年は講演会のみ参加可能とする。
・飲料水を準備する
・イベント参加者全員に入口にて、顔写真付き身分証明証の提示を義務付ける
・未成年の参加者には着用する名札に目印をつける
などを講じる

活動報告

活動成果

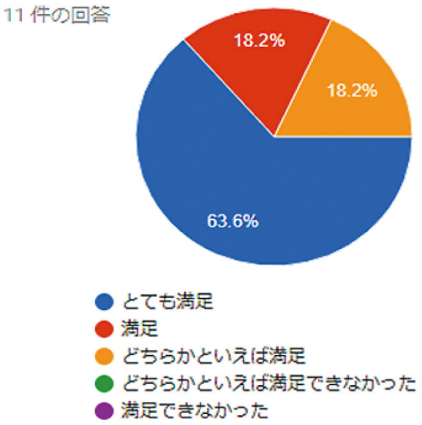
【実施した活動内容】
タイトル：日本酒講習会　～はじめてのにほんしゅ～
実施詳細：2017年７月13日　18：30～20：30
筑波大学 2学群 D 棟 307号室
参加者：小野公顕 様（小野酒店）

高井幹人 様（高井株式会社 代表銘柄：巌）
本学学生 26名
運営 3名（野中・内田・保科）
参加費：500円
企画内容：日本酒に関する講演（前半）
…日本酒の製造から商品のラベルに関することまで、日本酒を飲むうえでより愉しめるような知識について高井様・小野様よりお話いただいた
飲み比べ（後半）
…特徴の違う 5 種類の日本酒を用意。参加者にはテイスティングを空いていただき、どの味わいのものが自分の好みの味なのか感じてもらう企画を行った。
＜開催における留意事項＞
・未成年者の飲酒を避けるため、参加者全員に学生証の提示を義務付け、生年月日の確認を行った。
・急性アルコール中毒の対策として、飲料水を準備しテイスティングの合間に飲んでいただくよう呼びかけた。
・前日夜時点で定員に達していなかったので、当日飛び込みでの参加も可能とした。
以上の内容で本企画を実施した。

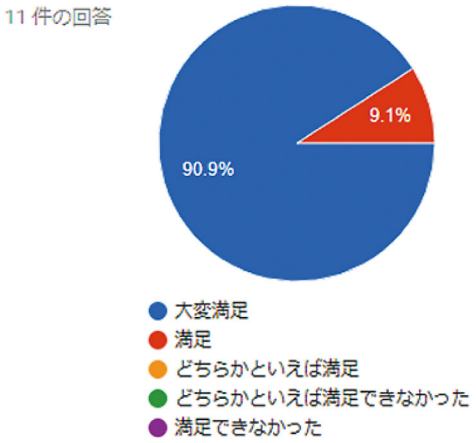
＜当日の様子＞

【目標達成度・得られた成果】
本企画「日本酒講習会」の最大の目的は以下の通りである。
○若いうちから日本酒のおいしさに触れてもらうことで日本人の日本酒離れに歯止めをかけ、日本の伝統文化を護る
○正しいお酒の知識を知ることで、「遊ぶためのお酒」ではなく「嗜むためのお酒」を感じ味わってもらう
これらを踏まえたうえで、「はじめてのにほんしゅ」の目標を次のように考える。
①日本酒に対するイメージ、親しみの向上
②自分に合った日本酒の好みの発見
③飲酒に関する諸問題の予防・喚起
以下、パーティシパントへの事後アンケートより考察する。

Q2. 講演の内容には満足できましたか？

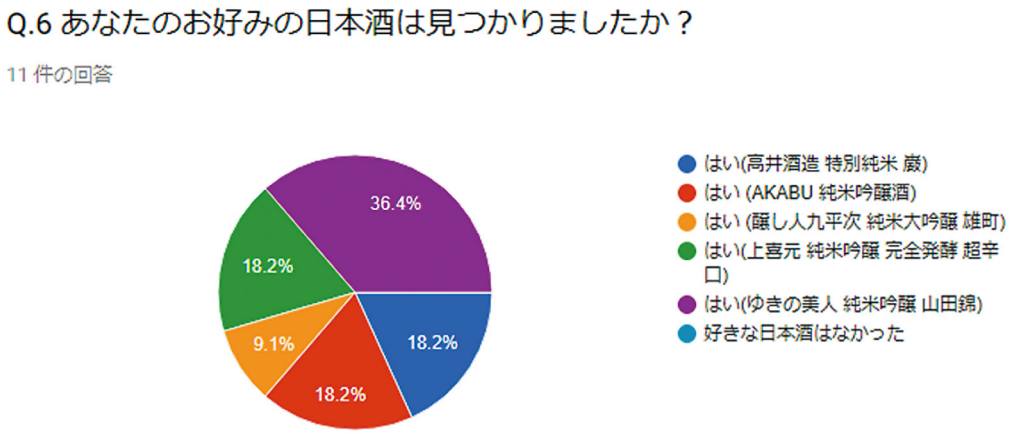


Q4. 飲み比べの内容には満足できましたか？



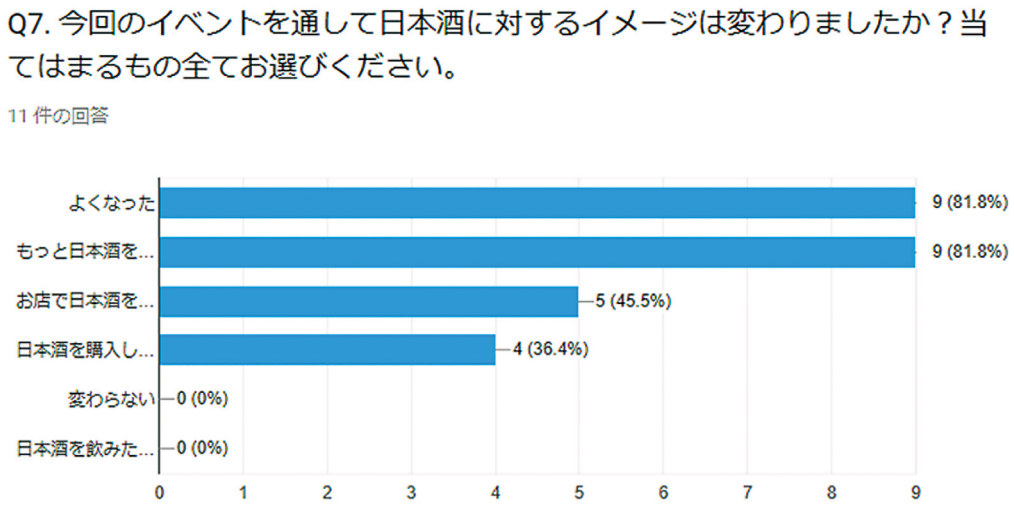
○ Q2、Q4より、本企画前後半の満足度について。
講演の満足度に関して、「とても満足・満足」の回答数が80％を超えていた。また残り20％の回答に関しては、すでに日本酒の知識を一定以上持っていたことがアンケートより分かった。
飲み比べの満足度に関して、回答者の90％が「大変満足」と回答する結果となった。各々が自分のペースに合わせて 5 種類の日本酒を飲み比べられたことや500円という価格設定がこの結果につながったと考える。
これら 2 つの問いを踏まえて、「どちらかと言えば満足できなかった・満足できなかった」という回答がなかっ

たことからも、『はじめてのにほんしゅ』への参加者の満足度は大変高いものだったと考えられる。



○ Q6より好みの日本酒の発見について

今回の飲み比べにおいて小野酒店との相談の結果、大きく味わいの違う 5 種類の日本酒を用意していただいた。そうしたことにより、どの銘柄が好きかによって自分の好む味わいのものが大まかに参加者にわかっていただけるように仕掛けていた。当日の飲み比べ後にもどの銘柄が好みであったかリアルタイムでアンケートを行った。事後アンケートにおいて「好きな日本酒はなかった」との回答が見られていないことからも、『はじめてのにほんしゅ』の目標②は概ね達成されたと考えられる。



○ Q7より日本酒に対するイメージ、親しみの向上について

上記アンケート結果より、「よくなった」という回答が80％を超える結果となった。また、「もっと日本酒をのみたくなった」という回答も同数あることから、目標①に関しても概ね達成されたと考えられる。

しかし「お店で日本酒を飲んでみようと思うようになった・日本酒を購入してみようと思うようになった」にはまだまだ伸びる余地があるとも考えられるので、それは今後企画運営していくうえでの課題であり、そこに焦点を当てながら活動をしていく意義はあると考える。

また、③に関して「お酒」の味わい方について、講師の方からアドバイスを頂けた。それだけでなく、今回飲み比べ用のカップを実際に品評会などでも使用されるような「テイスティング用グラス」（小野様より借用）に変更したことで参加者の方に「酔うためにお酒を飲む」時間ではなく「お酒を嗜む」時間として楽しんでいただけた。また飲み比べの最中に水を飲むことを、準備分が足りなくなるくらいしっかり呼びかけられたこと。

以上のことから③に関してもおおむね達成されたと考えられ、今後さらに多くの人に呼びかける必要があると考えている。

【自分たちの変化について】

企画・立案の段階において、基本的に私主導で行うことが多々あった。しかし企画運営を進めていくにつれて、他のメンバーからも面白い提案が挙がるなど各人に積極性が見られるようになった。学内での飲み比べイベントは初めてであったりと、私をはじめ他のメンバーにとってもイメージしづらいところも多々あった。一度経験したことを踏まえ今後の動きが楽しみになるような変化があった。

今後の課題

以下、本企画で得られた反省点である。

〇企画前

・告知が遅れた、T-ACT への申請等で遅くなったところもあった
・ポスターづくりに関する情報は早めに
・広報についてもっと力を入れて
　→学類ラインにもっと流すべき
・Twitter のフォロワー数が増えない
　→定期的に動かしていく
　　キャンペーンやってみる
　　ハッシュタグをもっと活用

〇当日

・もう少し水を多く準備していても良いかも
・おつまみの持ち寄りを事前に呼びかけてもよかった
・駐車場の準備について考えなければならない
・コインケースを準備しなければ
・講習会中の出だし＆流れを決めておくべきだった
・空調の申請をしておく（熱中症対策）
・飲み比べの時は机いらなかった
　→二つきょうしつを借りて移動してもらってもよい

当日準備に関して、知らなかったことや足りなかったことが多くあった。そこについては今後本企画を実施していくうえで改善していくべきものであると考える。

事前広報に関して、SNS での広報だけでは足りないことに気づき直前に学類 LINE にて広報を行った。広報の手段に関して SNS だけに頼らず、より幅広い手段を考えていく必要はあると考える。自分たちの活動にもう少し必要であるとも感じた。

【今後の展望について】

メンバー内で出た実施してみたい企画案を箇条書きで添付いたします。

・ペアリング
・居酒屋ジャック
・はじめてのにほんしゅ ～リターンズ～
・変わりもの（スパークリング）を飲む
・女性限定イベント
・蔵ツアー
・SNS の活用
・つくばの日本酒系の居酒屋の紹介
〇 SAKE Lab 〇

経験者からのメッセージ

イベント集客に関して Twitter はあてにならないようにも感じました。まだ私自身もどんどんやっていかないとわかりませんが、口コミなど地道な広報活動が大事になってくるかもしれません。

また、もし何か解決したい課題に受けて企画・立案する方は、ぜひ 1 回だけでやってやろうではなく長いスパンで考えてほしいです。段階を踏んでいくことが絶対的に大事になってくると思っています。頑張って下さい。

運営者側から見たパーティシパントの変化

一つ驚いたのは飲み比べの時、私たちが何を言うわけでもなく初対面の参加者同士でコミュニケーションを取り始めたことだった。企画開始時からそういった雰囲気だったわけではなかった。これは、本企画目標に参加者全員が沿って参加してくれたことによる効果であるのではないかとその場で感じた。今後企画を立案する上で、「参加者同士でのコミュニケーションをとる・コミュニティをつくる」といったことを意識していきたいと考えさせてくれた変化でした。

T-ACT に関する感想

次回は一発で申請が通るように準備したい。

わがままを言うと、6 限終わりに T-ACT に寄れるようになった方が利用しやすさは増すと思いました。

つくば MVP ～ Acting! ～（17026A）

T-ACT プランナー　飯沼　天空（比較文化学類1年）

活動目的

自分一人でギターの練習を始めたが、時々誰かと演奏することも楽しそうだと考えることがある。その時に、例えばドラムは軽音部でロックをやって、バイオリンはオーケストラでクラシックを演奏する、というようにそれぞれの楽器で演奏する楽器の組み合わせや曲のジャンルが固定されていることに思い至った。しかし、エレキギターでバッハを演奏することも、琴でビートルズをやってみることも不可能ではないはずだと考えた。そこで、様々な楽器（声、手拍子など、「人の身体」も含め）を一堂に会し、皆で一つの楽曲を作り上げることができたら、観客とも一緒に今までにはなかった新しい音楽の楽しみ方ができ、演奏する側も新たな刺激が得られるのではないかと思った。

「つくば MVP（ミュービップ）」は「つくば Music Variety Project（つくば音楽多様性プロジェクト）」の略。４年間を通して活動できればと考えているが、まず今年は目標を「雙峰祭での発表」に絞って、つくば MVP の形作りができればと思う。前回の「つくば MVP ～ Attracting! ～」に続き、今回の企画では宣伝活動、ミーティングに加えて楽器を用いた練習に中心を移し、雙峰祭当日のパフォーマンス成功を目指す。

活動計画

７月中旬を目途にメンバー募集をかける。それまでは毎週木曜日のミーティングで宣伝活動、曲決めなどを行う。

メンバー募集を打ち切ったところで本格的な練習に移る。

楽器の種類があまりにも多様であるという企画の特性から個人練習を重視し、平日は毎日練習場所を確保する。毎週水曜日・木曜日を全体練習とし、個人練習ではまかないきれない部分を埋め曲全体の構成を整えていく。

雙峰祭の本祭２日目、松見池ステージでパフォーマンスを行う。

活動場所：2A403、2D307、2C403、1E302、松見芝生石段

活動期間

平成29年７月10日～29年11月25日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：小林由花（比較文化学類１年）、長部世理菜（比較文化学類１年）、武田爽（比較文化学類１年）、楊欣海（比較文化学類１年）、阿部光児（比較文化学類１年）、稗田真衣（人文学類１年）、刑部朱音（人文学類１年）、高橋日和（知識情報・図書館学類１年）

P：小川美登里（人文社会系）

備考

第43回雙峰祭のステージ企画団体としての活動。

活動報告

活動成果

７月～曲決め

８月・９月練習、CM 撮影

10月・11月練習、宣伝活動

11月４日のステージパフォーマンスを予定していたが、雨天により中止。

前例のない音楽的活動に対して、どのようなアプローチの仕方があるのかが分かった。また逆に、どのような運営上の困難があるかもわかった。

しかし、実際にステージに立つという目標をクリアできなかったのはやはり残念だった。

今後の課題

・各自の予定調性の問題。音楽系である以上、団体として集まって確保する練習時間が一定以上必要になるが、それが想像以上に確保できなかった。

・楽器の管理の問題。大きな楽器を練習で使用するためにどこに保管し、どう持ち運ぶのかが大きな問題として浮かび上がった。歴史のある音楽系サークルとは違い、明確な保管場所を所持していないために、これは今後活動を続けていくうえで常に課題となると実感した。

経験者からのメッセージ

日程調整など話し合いの事項は非常に難しいけれど積極的に動かないとあまり進展しないと思います。いつも一緒にいるメンバーだけならまだいいですが、そうではない人もいる場合は、そこも含めて考えられるとよりスムーズに事が運ぶと思います。

運営者側から見たパーティシパントの変化

演奏者側は全員オーガナイザーの扱いにしたうえで、ステージを決行できなかったため、パーティシパントと呼べる人物はいません。

T-ACT に関する感想

・T-ACT があったから宣伝などの面で負担を軽くすることができた。

香風寮学習ボランティア　vol.3（17027A）

T-ACT プランナー　篠原　真悠子（心理学類3年）

活動目的

児童養護施設に赴き、施設の児童との信頼関係を構築しながら学習の手助けをすることを目的とします。

主に施設の小学生から高校生までの子ども一人に対して私たちが一人ずつつき、週に１回学習面のサポートを行います。

子どもたちの学力の向上に加え、子どもとの信頼関係の構築、子どもが学習をしやすい雰囲気作りをすることが重要になります。

今期は夕方での活動を行います。

宿題を見たり、一緒に外で遊んだりなどさまざまな活動を子どもと行います。

活動計画

平日の17：00～18：30（つくばセンター２番乗り場15：55発）、もしくは19：30～21：00（つくばセンター２番乗り場18：25発）のいずれかの時間で週に１回、児童養護施設に赴く。

４月　メンバー集め＆活動開始

８月　施設で開催される「夕涼み会（バーベキュー）」に参加し、施設の子どもたちとさらなる関係性の向上を目指す。

８月末　活動報告書まとめ

活動期間

平成29年４月24日～29年９月30日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：宮山由佳（芸術専門学群４年）、福島智穂（比較文化学類４年）、齊藤桃子（芸術専門学群４年）山川慧（人文学類４年）

P：塩川宏郷（人間系）

活動報告

活動成果

児童養護施設へ赴き、子どもの学習の手助けをしたり、一緒に遊んだり等を行った。子どもたちが学習の楽しさを感じ、同時に人とのふれあいを感じる時間になったと思う。私たちにとっても、子どもと関わることの楽しさ、学習を教える難しさなどを考え直すきっかけになった。

今後の課題

同じような活動をするサークルが複数あるため、宣伝を積極的にしていかないと人が増えなかった。

交通費がかかるため、そのお金をどこからどのように出すかということについて悩んだ。

経験者からのメッセージ

人を集めて新しいことをやるのは難しく大変なこともありますが、その分やりがいがあることだと思います。応援しています！

運営者側から見たパーティシパントの変化

全員が意欲的に取り組み、自分だけではどうしようもないときは積極的に相談に乗ってくれました。

T-ACT に関する感想

わからないことや行き詰ってることについてアドバイスをくれ、スムーズに運営することができました。

Tsukuba × Sweets project（vol2）（17028A）

T-ACT プランナー　藤原　優人（生物資源学類2年）

活動目的

将来、食品開発の道に進みたいと思っており学生のうちで将来に向けて何か行動を起こしたいと考えた結果、有志で食品開発プロジェクトを行いたいと思いました。そこで、学生のアイデアと企業さんの技術力を掛け合わせてコラボ商品を作り地域発展を目指したいと思っており、商品開発後つくばコレクションの認定申請を目指しています。

また、コミュニケーション能力や企画力などのスキルアップにつなげたいと考えています。

最初の半年間の反省を踏まえ、後半の半年間は協力していただける企業さんを見つけ、商品の発売、販売活動を通じてつくば市の特産品の良さを色々な人に知ってもらえることを目的に活動します。

活動計画

企画の内容

「つくば市×？？？×スイーツ」のテーマで、地元の企業のみなさんにコラボ協力を仰ぎ、地元の企業と筑波大学の学生のタッグ商品を作り、新しいつくば市のお土産を生み出す。またつくばコレクションの認定申請しイベント販売をして未来都市つくばを多くの人に知ってもらいます。

スケジュール

７月：協力企業探し
８月：商品開発
９月：商品開発
10月：商品改良、試食会
11月：商品開発
12月～1 月：商品発売を待つ

活動期間

平成29年７月20日～30年１月19日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：大熊美桜（生物資源学類２年）、大嶋佑星（生物資源学類２年）
P：宮崎均（生命環境系）

備考

まだ大学に入学して日が浅く、自分に足らないところも多く時間はかかってしまうと思いますが、必ず成功させつくば市の新しいお土産として世の中に出したいと思いますので宜しくお願いします。

HP 作成や動画作成が得意な方、随時募集中です。

活動報告

活動成果

［活動内容］
・協力してくださる企業の決定
・特産品を供給してくださる農家さんの決定
・Twitter、instagram、facebook アカウントの更新
・試食会の開催（内部）
・商品案の決定
・使用する特産品の決定

［目標達成度］
50％

［得られた成果］
・SNS で情報を発信したことで特産品をより多くの人に広めることができた。
・協力してくださる企業をみつけることができた

・供給元の農家さんを見つけることができた。

今後の課題

・クラウドファンディングによる資金集め
・団体の代表が不在の時でも円滑に会議を進めることができるように、内部の人一人一人に考えさせる内容を増やすこと。
・今回は自分がほとんど企画の舵をきっていたので、次は内部の人にもっと考えてもらう場を設ける。

経験者からのメッセージ

何事も、決してひとりではできません。
大いに人の力を借りて、みんなで作り達成してください。

運営者側から見たパーティシパントの変化

ここ最近は、内部も活気づきいろいろな意見が飛び交うようになった。

T-ACT に関する感想

補助金が出ればうれしいと思いました。

学生プレゼンバトル2017（17029A）

T-ACT プランナー　鹿児山　陽平（数理物質科学研究科博士課程2年）

活動目的

学生プレゼンバトルは、学群生や院生が異分野の学生・研究者や一般の方に向けてプレゼンテーションを行う機会であるとともに、あらゆる人があらゆる学問や研究に触れる機会です。学生プレゼンバトルの目的は２つあります。１つ目は、プレゼンターである学群生や院生が、学問や研究の魅力を、異分野の学生・研究者や一般の方に向けて伝えるスキルを高めることです。２つ目は、プレゼンターと異分野の学生・研究者の間の異分野コミュニケーション、およびプレゼンターと一般の方の間の科学コミュニケーションを実現することです。質疑応答や評価の仕掛けによって、エンターテインメント性とアカデミック性を併せもったコミュニケーションの実現を目指しています。

昨年度からの改善点として、今年度は開催場所を大学会館にしました。昨年度の開催場所である5C 棟の教室は教室の広さに比してスクリーンは小さく、立地も人里離れた場所であるため、研究発表を多くの人に見てほしいという願いに適した場所ではありませんでした。今回は大学会館で行うということで、スクリーンも立地の問題も解決でき、かつ研究発表を行うにふさわしい大舞台になったと考えています。

活動計画

９月上旬～中旬に出場者募集を行う。出場者には自身の研究をまとめたアブストラクトを提出してもらい、10月中旬に行う予選で15分間の発表をしていただく。観客の投票で上位者３名を選出し、３名には学園祭本祭のプレゼンバトル本戦で発表をしていただく。

上位者には順位に応じた賞品を、予選敗退者にも参加賞として賞品をお渡しする。

活動期間

平成29年７月１日～29年11月30日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：宮本隆典（システム情報工学研究科博士課程２年）、阿部裕太（数理物質科学研究科修士課程２年）、高橋雄太（数理物質科学研究科修士課程２年）、永野恭子（日本語・日本文化学類４年）、川島浩晃、安藤潤人（システム情報工学研究科博士課程１年）、CHEN YI CHING（知識情報・図書館学類１年）、長岡亜美

P：野村港二（本部教育企画室）

活動報告

活動成果

筑波大の学生、院生を集めて研究のプレゼンコンペを行う「学生プレゼンバトル」の運営。９～10月に募集し、10月に予選を行い、学園祭本祭で本戦を行った。10名がエントリーし、予選を勝ち抜いた３名を来場者投票で順位付けしてもらった。今年度は久々の大学会館ステージでの開催だったが、滞りなく進行することができた。達成度としては80％ほどか。本戦において音響の不具合やスケジュールの遅れ、目標来場者に達しないなど改善点がある。

今後の課題

とにかく来場者が少ない。予選も本戦も来場者投票で本選進出者と順位を決めるのだが、目標来場者を大きく下回っており、全体的に寂しいイベントとなってしまった。スタッフも少なかったが、何とか回せる程度ではあった。

経験者からのメッセージ

とにかくやってみることだと思います。３年計画で完璧にしていければ十分です。１年目で何とか運営し、２年目で反省を生かして改善し、３年目には余裕をもって運営できる。そんな感じでとにかくチャレンジすべきです。最初は無計画でもアドバイザーやスタッフと煮詰めていけば形になります。

運営者側から見たパーティシパントの変化

研究プレゼンコンペということで、来場者の研究に対する意識を変えることを目標のひとつに据えていた。し

かし、もともと研究の話を聞くのが好きな人ばかり集まったようで、参加者の意識の変化には影響できなかったように思う。もっといろいろな人を巻き込みたい。

T-ACT に関する感想

あまり活用しなかったが、頼りになるのでもっと相談すればよかった。

ゆめ花火プロジェクト2017（17031A）

T-ACT プランナー　松崎　汐那（看護学類3年）

活動目的

『ゆめ花火プロジェクト』とは、入院中の子どもたちが自由に描いた絵を筑波大学の学園祭で本物の花火にして打ちあげていただき、それを子どもたちに鑑賞してもらう企画です。

入院生活を送る子どもたちは、病院での生活という「非日常」の中での生活を強いられ、検査や治療などを受ける精神的・肉体的ストレスを抱えています。またご家族も子どもの入院という環境の変化の中で、子育ての上で様々な葛藤や不安にさらされています。「闘病を頑張る子どもたち、またそれを支えるご家族に、花火を通じて幸せを届けたい」「子どもたちに夢と希望を持ってほしい」そんな気持ちから筑波大学花火研究会と賢謙楽学とが共同で「ゆめ花火」を立ち上げました。2011年より毎年開催し、2013年度から医療系学生有志つくばけやきっずが賢謙楽学より企画を引き継ぎ、筑波大学花火研究会と共同で活動を継続しています。2017年度には７回目の打ちあげとなる予定です。

「ゆめ花火プロジェクト」を行う目的は大きく以下の４つです。

1．小児がんなどの理由により長期の闘病生活を余儀なくされている子ども達に、自ら思い描いた花火が打ちあがる様子を見てもらうことで一時でも闘病の苦しさを忘れ、花火を楽しんでもらう。
2．病気により、なかなか花火に行く機会がない子どもたちとそのご家族に、花火を見る機会を提供し、花火を通してご家族での思い出をつくってもらう。
3．広報活動・花火打ちあげを通じて筑波大学生・地域の方々に小児医療・療養環境について関心を持ってもらい、患児へのサポートのあり方について改めて考える機会を提供する。
4．医療関係者を含む様々な協力団体と患児やその家族同士のつながりを作り、患児の成長を温かく見守っていく場へと発展していく。

活動計画

企画の流れ

７月　子どもたちに自由に絵を描いてもらう

小児病棟の子どもたちに、花火をイメージしながら自由に絵を描いてもらいます。2017年度は人形劇で花火の趣旨を説明した後に絵を描いてもらいました。

９月　花火会社に依頼する

子どもたちの絵を参考に、（株）山﨑煙火製造所に花火製造を依頼します（昨年協力、本年度も依頼予定）。花火での表現が難しい絵柄もありますが、花火師さんのご尽力で毎年素敵な花火にしていただきます。

10月　観賞会参加者募集開始＆当日準備開始

打ちあげ当日の観賞会にいらっしゃるお子さんとご家族へ案内を送付します。また、当日へ向けての最終的な準備を行っていきます。

11月　鑑賞会を開き、ゆめ花火を鑑賞する

打ちあげの際は、鑑賞会を開き、絵を描いた子どもたち、入院中の子どもたちとそのご家族を招いて鑑賞会を開きます。鑑賞会ではバルーンアートや工作などのレクリエーションも行います。今年度から、花火を見に来られないお子さんのため病棟でのライブ映像の上映も予定しています。

12月　各種報告

お世話になった関係各所、来てくださったお子さまとそのご家族にお礼をします。また、関係各所にゆめ花火の開催報告をします。

活動期間

平成29年９月１日～29年11月30日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：関純令（医学類３年）、松下朋生（医学類３年）
P：福島敬（医学医療系）

備考

ゆめ花火プロジェクト2013：T-ACT 承認企画として『筑波大学人間力育成事業』の資金援助を得た。T-ACT 平成25年度下半期最優秀賞、平成25年度社会貢献プロジェクト最優秀賞を受賞した。

ゆめ花火プロジェクト2014：常陽リビングの取材を受け、つくばスタイルブログに記事掲載。日本小児白血病リンパ腫研究グループの全国会合において活動内容を発表した。
ゆめ花火プロジェクト2015：常陽新聞につくばけやきっずの活動についての記事掲載、第14回茗渓会賞を受賞
ゆめ花火プロジェクト2016：筑波大学広報刊行誌「ツクコム」、ならびに常陽新聞に活動についての記事掲載
・筑波大学公式 HP　http://www.tsukuba.ac.jp/news/n201311181618.html
・つくばけやきっずブログ　http://yumehanabi.tsukuba.ch/e239630.html

活動報告

活動成果

筑波小児病棟に入院中の子どもたちが描いた絵を花火にしてもらい、絵を描いてくれた子どもたちとその家族、また筑波大学小児病棟に入院中の子どもたちをそのご家族を招待し花火を鑑賞した。花火鑑賞前には、ワークショップとしてオリジナルのハンコを作成したり、バスで筑波大学附属病院から筑波大学構内の鑑賞教室に移動して遠足気分を味わったり、レクとして花火に関する劇を行ったりした。また、毎年ご協力いただいている筑波大学附属病院スターバックスさんからのドリンクの配布や筑波大学花火研究会さんからの花火の説明などを行った。花火鑑賞会終了後はバルーンアートをプレゼントした。

ご家族からのアンケートでは、とても楽しかったが 9 家族、楽しかったが 3 家族、ふつうが 1 家族との評価いただいた。「長期の入院で気分が落ち込んでいた娘がとても楽しく過ごせた。」「このような機会に恵まれ大変感謝している」などの意見をいただいた。

今後の課題

今回18家族54名と大変多くの方に参加いただいたことで、鑑賞教室への移動のバスにお子さんが乗り切らず、車で移動していただくご家族がいました。今後は、参加人数を制限するか、ほかの交通手段を考えるかなど、対策をとっていきたいです。

経験者からのメッセージ

イベントに参加される方の人数は、早めに確定するか、的確な予想を立てて進めるといいと思います。

運営者側から見たパーティシパントの変化

各自が責任をもって仕事に取り組むようになりました。

T-ACT に関する感想

今年 T-ACT で開かれる授業のお誘いもいただきましたが、参加することができなかったので、ゆめ花火プロジェクトを多くの方に知っていただくためにも、積極的に参加できるようにしていきたいです。

【芸専通信 '17】vol.2（17032A）

T-ACT プランナー　髙木　凜（芸術専門学群1年）

活動目的

芸専通信の思いは
「普段作品発表の場が少ない一年生に活躍の場を作りたい。」ということ。
3、4年生は卒業制作展などで一般の人に公開するチャンスがあります。芸専通信はその代わりの場となって、若い才能を多くの人に見てもらいたいのです。また発表資料制作に関わるメンバー同士で研鑽し、制作のスキルアップにもつながることを望んでいます。
5月に始めた芸専通信 vol.1ではチラシ制作・展示会開催を行い、「大人数で大きなことを成す」ということを学びました。今回の vol.2ではメンバーを改め増員し、さらに大きな活動を行っていくつもりです。
ポスター・ムービーは前回の経験を活かしさらに意味を込めたものに、また新しくモチーフグッズの作成も考えています。
前回と同じく T+ を使用して芸専通信展 2 の企画も検討しています。

活動計画

芸専 1 年モチーフグッズ制作（フレークシール・ポストカード）
ポスター制作
ムービー制作
9月10日　ポスター絵下書き
　　15日　ポスターデザイン下書き
　　17日　ポストカードデザイン下書き
　　25日　ポスター絵完成
　　28日　シールデザイン完成
　　30日　ポスターデザイン完成
　　ムービー完成
10月 2 日　フレークシール印刷開始
　　4 日　ポスター掲示開始
　　6 日　ポストカード完成
　　9 日　ポストカード印刷開始

活動期間

平成29年10月 1 日～29年12月31日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：岡本太玖斗（芸術専門学群 1 年）、鈴木里穂（芸術専門学群 1 年）、松村岳（芸術専門学群 1 年）、佐藤紀乃香（芸術専門学群 1 年）、栄前田愛香（芸術専門学群 1 年）、佐藤彩良（芸術専門学群 1 年）、吹田雛乃（芸術専門学群 1 年）、中野百合香（芸術専門学群 1 年）、江村瑳八佳（芸術専門学群 1 年）、中村日香（芸術専門学群 1 年）、監物沙耶香（芸術専門学群 1 年）、瀬谷美月（芸術専門学群 1 年）、島田千聖（芸術専門学群 1 年）
P：大原央聡（芸術系）

活動報告

活動成果

芸専通信メンバーによるグッズの制作
無事に全て頒布できた

今後の課題

リーダーである私の負担が大きかったので、制作以外のマネージメントや会計管理の仕事も分担しなければいけないなと思った。

経験者からのメッセージ

発案すれば誰かがノってくれます。難しいのはそれを成功まで頑張り続けることです。グループワークでは誰かがやる気なかったり誰かが全く発言しなかったりなんてことがあるかもしれませんが、リーダーが希望を持った人であればきっとその人も変わります。がんばってください〜

運営者側から見たパーティシパントの変化

自分の意見を言えるようになった。作品に対する意見が嬉しいことを知り、お互いに言い合って作品の質を高めた。

T-ACT に関する感想

いつも印刷でお世話になりました。カットのお手伝いありがとうございました。

巨大盤上遊戯企画第１弾「人間ガイスター」(17036A)

T-ACT プランナー　亀沢　和史（工学システム学類3年）

活動目的

常識的なサイズを超えて大きいもの
人々はそれを【巨大】という。
【巨大】なものは人々の目を引く。
【巨大】なものは人々の関心を集める。
【巨大】なものは人々を引き寄せる。
【巨大】なものは人々に衝撃を与える。
【巨大】なものは人々の記憶に残る。
【巨大】、それはロマンである。

複数のプレイヤーで常識的なサイズを超えた巨大盤上遊戯（巨大ボードゲーム）に興じることで , 遊戯に興じるプレイヤー , それを見る観衆にエンターテイメントを提供するとともに人々の交流の場の一つになることを本企画の目的とする。

今回は「巨大盤上遊戯企画」の第一弾として「人間ガイスター大会」を企画する。

活動計画

「ガイスター」とは6×6の盤と16個の駒を使用する比較的ルールが簡単な２人用ボードゲームである。

今回の企画では地面にテープ等で盤を作成し , 人間が駒の代わりとなり、盤上を移動することになる。

駒役の人々には「自分らしい」「筑波大らしい」自由な格好での参加を期待する。

スケジュール・準備内容

11月　T-ACT 企画申請
準備開始
準備
・12/27日の詳細の決定
（イベントの流れ、演出、ゲームのルール等）
・開催予定場所の許可申請
（石の広場、雨天時：体育館または段差がなく広い教室）
・広報活動開始
（紙媒体、SNS（つくばテーブル交流協会のものを利用））
・参加者、協力者の募集
・必要な道具の準備
ゲームのルール上必要となる小道具
スタッフの名札
ブルーシート（荷物置き場用、観戦用）
駒用簡易衣装
テーブル×数個

12月27日（水）　会場準備（ゲームボードの作成、その他準備）
人間ガイスター大会
その後
巨大盤上遊戯企画第二弾？

【企画費用】

巨大ゲームボードの作成（養生テープ）	2500円
ゲームルール上必要となる小道具	1000円
駒用簡易衣装（ビニール袋等）	1000円
雑費	500円

計5000円を想定

負担

イベントの参加費は無料とし、費用の負担はつくばテーブルゲーム交流協会で行う。

活動期間

平成29年11月27日～29年12月27日

対象者
学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー】
O：高野大（比較文化学類４年）、福田哲郎（比較文化学類３年）、吉川健人（生物学類３年）
P：小屋一平（グローバル・コモンズ機構）

活動報告

活動成果
筑波大学 石の広場にてガイスターというテーブルゲームを人間が駒の代わりとなり興じた。
学生、大学職員、社会人、小学生と幅広い層に参加していただけた。

今後の課題
企画の性質上ある程度の参加人数が必要であり、参加者を集めることに苦労した。
足りない分は看板を駒の代わりに用いることで解決した。
冬場の屋外での企画であったためあまりに寒かったので企画の終了時刻を早めた。屋外での企画は天候、気温を考慮すべきであった。

経験者からのメッセージ
冬に屋外での企画はすごく寒かったです。
日陰になるとかなり寒いです。
冬場は事前に企画開催時間の会場での日陰の位置などを確認することをお勧めします。

運営者側から見たパーティシパントの変化
テーブルゲームの可能性を感じていただけた。

平成29年度茨城県警察大学生サポーター（16057V）

受入団体名：茨城県警察少年サポートセンター（13005G）

活動内容

少年の非行防止、立ち直り支援活動
・駅、ゲームセンター等での街頭補導活動（通年）
・県内の小学校を訪問し非行防止教室（通年）
・非行少年等の立ち直り支援活動（通年）
・街頭キャンペーン等（通年）

活動期間

1月27日（土）

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

活動報告

●受入団体担当者

問題を抱える少年への居場所づくり（蕎麦打ち体験）を通して少年の立ち直り支援に寄与した。

●学生参加者：讃井　知（システム情報工学研究科　博士課程1年）

活動の成果

活動は少年たちの立ち直り支援です。サポーターとして登録していると様々な活動が紹介されます。今年は、警察の方が企画してくださった各イベントの場で少年たちとコミュニケーションを深めました。

少年達が交流を通じて何か得てくれたような顔をしてくれた時には、大変やりがいがあります。また、近い世代としてよいロールモデルとなれるよう身が引き締まり、自省する機会にもなります。

今後の課題

少年達のために何かしたいという気持ちを、限られた時間の中で行動に結び付け成果を得るのはなかなか難しいです。そのためには、活動日のために普段から自分に何ができるか、少年たちは何を欲しているのかを考えていることが大切だと思います。

外国人児童・生徒の学習サポート（17001V）

受入団体名：茨城 NPO センター・コモンズ（16003G）

活動内容

常総市には約4000人の外国人が住んでおり、来日直後で授業の理解が難しい子どもや、日常会話は問題なく話せてもサポートが必要な子どももいます。学習サポーターとして子どもたちに勉強を教えるボランティアを募集します。

＜活動の概要＞

場所：JUNTOS ハウス（常総市水海道森下町4335　関東鉄道常総線北水海道駅より徒歩５分）

日時：【小学生】毎週月曜（16：00～17：30）

　　【中高生】毎週土曜（14：00～16：00）

日本語を教えるのではなく、基本的には子どもたちが持参する宿題を中心とした教科指導となります。

活動期間

４月10日～３月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：４人

（内訳）

2017年	４月（０名）	５月（０名）	６月（１名）	７月（３名）	８月（３名）
	９月（４名）	10月（４名）	11月（４名）	12月（４名）	
2018年	１月（３名）	２月（３名）	３月（１名）		

活動報告

●受入団体担当者

常総市に住む外国にルーツをもつ小中学生を対象に、学習支援のボランティアに取り組んでいただきました。基本的には日本語指導よりも教科指導・宿題の補助・中３生の受験指導を重点的に実施しました。子どもたちも、年が近く親しみやすい学生ボランティアの方々との学習を非常に楽しんでいます。

●学生参加者：匿名希望（看護学類　４年）

活動の成果

外国人児童への学習サポート。児童とコミュニケーションをうまくとりながら、学習を進めていくサポートができた。

今後の課題

中学生の進路指導にはあまり関わることはできなかったが、大学生ボランティアがいることを生かし、大学について話せる機会を作れば、少しでも大学に興味を持ち、大学進学を希望する生徒が増えると思ったので、こういった機会を作っていくのはどうかと提案したいです。

アフタースクールの様子

一緒にサッカーしよう！（17003V）

受入団体名：牛久チャレンジドフットボールクラブジョイア（14006G）

活動内容

知的障がい・精神障がいをもつ18歳以上男女のサッカークラブです。NPO 法人つくばフットボールのサッカーコーチの指導のもと、毎月楽しく活動をしています。

≪メインコーチのアシスタントコーチ　・　遠征時の帯同≫

活動予定

練習会　10時から11時半　スポーツシューレつくば （荒天中止）

2017年　5/21・6/11・7/16・8/13・9/24・10/8・11/12・12/17

2018年　1/14・2/11・3/11

交流戦（つくば市内） 8/27

大会（東京）10/15

活動期間

４月16日～１月14日

参加学生

T-ACT ボランティア：２人

（７月16日　１名、８月13日　１名、９月24日　１名、12月７日　２名、１月14日　１名）

活動報告

●受入団体担当者

挨拶から始まり、準備から後片付けまで選手と一緒に活動してもらいました。コーチの説明を理解しづらい選手には個別にわかりやすく補足してもらったり、準備運動や練習のパートナーを務めてくださいました。毎回最後のゲームでは選手と一緒に楽しんでくださっていました。

●学生参加者：匿名希望（知識情報・図書館学類　４年）

活動の成果

サッカーのボール回しの練習に参加、ドリブル中に視線を上げる練習の補助ののち、練習試合に参加した。選手たちの輪に入り、コミュニケーションをとりながら、自身も楽しくサッカーに参加することができた。

今後の課題

どのように接していいのかに戸惑いがあり、うまく話しかけられないことが多々あった。

また、自身が慣れないサッカーに取り組むことに必死で、周囲に目がいかないことがあった。

練習の様子

第11回つくば路100㎞徒歩の旅2017（17004V）

受入団体名：つくば路100㎞徒歩の旅（16021G）

活動内容

100km 徒歩の旅とは、毎年夏、茨城県南地域の小学生４～６年生が、学生・社会人スタッフとともに４泊５日をかけて100km を歩く抜く体験型学習事業です。事業理念として「ひとづくり・まちづくり」を掲げ、子どもたちの「生きる力」の醸成、若い世代のリーダーシップの育成、地域コミュニティの活性化、家庭教育の重要性の再認識という４つの事業目的の下、活動しています。

学生スタッフは、子どもたち全員が完歩を達成し、大きな成功体験を得てこれからの人生の大きな糧とできるよう、そのサポートを行う立場にあります。その一方、本番では子どもたちに背中を見せる存在として、１年を通して様々な研修に取り組んでいます。

★ミーティング（4/2～9/30の期間）
日時：毎週日曜日午後１時～５時
（秋・冬はミーティング回数が減ります）
場所：取手市内、守谷市内、筑波大学など
★100km 本番
日時：2017年８月７日（月）～11日（金）
場所：取手市、つくばみらい市、守谷市、土浦市、つくば市など茨城県南

活動期間

４月１日（土）～９月30日（土）

参加学生

T-ACT ボランティア：15人

活動報告

●受入団体担当者

今年は15名の筑波大生が学生スタッフとして参加した。子ども支援室（５名）、救護室（６名）、セーフティネット室（１名）、マネジメント室（２名）、総務情報室（１名）に所属し、それぞれの役割に全力で取り組むことができた。子どもたちの完歩のために力を発揮できたことは勿論のこと、学生自身の成長や地域・保護者とのつながりを実感し、それぞれが大きな糧を得られた。

今年は大幅に筑波大生の学生スタッフが増加した。この一要因として広報活動をはじめとした T-ACT の多くの援助を得られたことが挙げられる。感謝を申し上げたい。

●学生参加者：河村幸音（生物学類　１年）

活動の成果

子どもたちと100km 歩いた。班付きとして活動して、自分に与えられるどんな仕事も子どもたちのためであるということを実感した。事前の準備が大変だったからこそ当日はその努力が報われる時間となり達成感があった。

今後の課題

特にないが、初めは活動のイメージもつかず、ボランティアがそもそもどういうものか（自分ではない誰かが主役であり、その人のために自分の時間を使うなど）をわかっていなかったので、あまり積極的に動かなかった。

その他

規則など比較的厳しい団体ではあったが自分にとって新しい環境だったし、仲間に出会えてよかったなと思えるので活動して正解だったと思う。

●学生参加者：古藤直輝（人文学類　３年）

活動の成果

今年は３年目として参加し、記録や事務を担当する役割に就いた。地域や保護者とのつながりを実感できたと共に、時間や仕事量などのマネジメントの難しさを知ることができた。昨年までの子どもの班に付いていた役割では得られない視点や考え方を得られた。

今後の課題

学生スタッフのタスク量やその役割分担、また引き継ぎなどの対策は急務で、これを改善していかない限り事業は継続できないように思う。子ども参加者過去最多（第１回の約4.5倍）になった今、変えるべきことは変えなければならないと思う。

その他

T-ACT の皆様には、スタッフ募集を初め、多くの面でサポートをして頂きました。感謝申し上げます。今後

とも宜しくお願い致します。

●学生参加者：小林眞紀（芸術専門学群　３年）

活動の成果

子どももスタッフも誰一人脱落することなく、全員完歩することができました。私は主に子どもたちの健康管理をしていましたが、大きな怪我や病気をさせることなく、無事サポートすることができました。この事業で、私も大きな達成感を得ることができ、自分に自身も付き、楽しい思い出も作れて、とても良い経験になりました。

今後の課題

前もって、きちんと自分の役割の仕事を確認して、覚えておくことの大切さを痛感しました。土壇場で慌ててしまいました。もう一つ、コースは前もって通知されており、そのコースをお試しで歩く企画も用意されているため、事前にコースを実際に歩いてみることが欠かせないと思いました。知っている道と知らない道とでは、心にも体にも負担がまるで違いました。

その他

子どもにも、大人にも厳しい険しい事業ですが、得られるものの大きさや、経験の貴重さなど、100km ならではのものがたくさんあるので、これからもこの事業を続けていってほしいです。

●学生参加者：新木絵里加（人文学類　２年）

活動の成果

活動内容は、5 日間子どもたちとともに100km を歩きながら、茨城県の魅力を発信することです。100km は私にとっても長く険しい道のりでした。実際に途中で「歩けない」と言う子もいました。しかし、その子は「みんなと一緒に歩きたい」と言って、歩みを止めず頑張って歩いていました。「みんなと一緒だから頑張れる」という経験ができることが100km の醍醐味です。

今後の課題

個人的な問題ですが、救護係でありながら、薬に対する知識を持っていなかったことです。初日の夜に医療従事者の方から教えてもらいましたが、本来は事前に学ぶべきであったと反省しております。

●学生参加者：中藤麻里絵（日本語・日本文化学類　４年）

活動の成果

本事業は小学 4 ～ 6 年生と 4 泊 5 日かけて100km を歩き抜く参加型教育事業である。

約140人の中から今年も脱落者を出すことなく、安全に事業を達成することができた。

また本番 5 日間の他、子どもたちと接するにあたりスタッフとして恥じないよう事前研修が行われる。研修ではコーチングの理論や、夏場における健康管理・心肺蘇生法など実践的な内容の他、他大学の学生とのディスカッションなども毎回行われる。これらの研修や、事業の為の働きを通して自己肯定感の上昇や人間的成長が果たせたと感じた。

今後の課題

この事業を毎年継続するうえで課題となっていることは、スタッフの募集および継続参加である。事業の理解や知名度アップも勿論の事、ボランティア活動そのものについての理解を増進できたらと思う。

●学生参加者：塚原浩平（応用理工学類　３年）

活動の成果

活動自体は小学生とともに 4 泊 5 日で100km を踏破するというもの。社会人、OBOG、学生の学年を問わず一丸となって小学生の成長をサポートできた。特に学生同士では敬語ではない会話を推奨していて、連携の大切さを学んだ。

今後の課題

6 月上中旬から 5 つの班に分かれての活動が多くなるが、どうしてもほかの班の活動に疎くなってしまい、保護者からの質問の対応がおろそかになったり、お互いの活動への感謝がしづらくなる。

●学生参加者：塚田梨紗子（比較文化学類　２年）

活動の成果

活動内容概要：

＜本番前＞・本番当日に使う備品の把握、管理。

・企画書などの作成

＜本番＞宿泊地や食事などを準備する。など

これらの仕事は私が担当した仕事内容で、全体の活動では MTG があったり保護者会の運営を行ったりしました。

今後の課題

文書上での誤解、情報共有の難しさ、MTG で会えない間に電話やラインで連絡を頻繁にとる必要がある（直前期など）、社会人さんとの連携…など。

その他

この活動を通して、だれかと一緒に同じものを作っていくことの難しさと楽しさを学びました。少しでもこの活動に興味のある方がいたら、参加を勧めます。

●学生参加者：田中優花（社会学類　４年）
活動の成果
　４泊５日かけて100kmの道のりを子どもたち約150名と一緒に歩きぬくという活動です。時に子どもたちは弱音をはいたり、歩みを止めそうになることもありますが、仲間と協力して励ましあいながら、今年も全員がゴールすることができました。子どもたちが日に日に成長し逞しくなっていく姿を見られることは、この上ない達成感を感じることができます。
今後の課題
　学生スタッフの人数がギリギリでした。学生は、子どもたちに寄り添って一緒に歩くだけでなく、宿泊地や休憩地の設営や写真や動画での記録、ルートの先導など様々な役割があります。子どもたちが安全に100kmを歩くために、もっと学生スタッフを増やしていかないといけません。
●学生参加者：藤村建仁（生物学類　１年）
活動の成果
　子供たちと猛暑の中を歩きぬくことで自分の限界を突破することや、目の前の人を勇気づける感動を得ることができました。
今後の課題
　自分のことで手いっぱいになってしまうことがあったので、いつでも周りを見渡せるような視野を持たなければならないと感じました。
●学生参加者：匿名希望（比較文化学類　１年）
活動の成果
　小学生と共に100キロを歩きつつ、救護係として体調が悪い子や怪我をした子供の対応をした。子どもたちにありがとうとお礼を言ってもらった時、人のために頑張れたのだと感じ、とても嬉しかった。
今後の課題
　ボランティアであるのにも関わらず、自分に余裕がなくなるほどやらなければならないことが沢山あった。今後は、学業や私生活に影響を及ぼさない範囲で上手く関わっていきたい。
●学生参加者：匿名希望（比較文化学類　２年）
活動の成果
　４月から参加し、100kmをこどもたちと共に歩き、主に救護スタッフとして彼らをサポートしました。今年はサポート役としての役割を徹底することを目標としていましたが、できた部分もあれば不十分な部分もあり、まだまだ学ぶことがあると感じました。しかし、全体としては、自分自身の生きる力にもつながったと感じています。
今後の課題
　この活動には様々な人が参加しており、役割も様々です。その中で、自分の力をよりよく発揮するにはどうすればいいか、自分のすべき役目はなにか、考えながら活動していきたいと思います。

●学生参加者：匿名希望（心理学類　４年）
活動の成果
　班付きリーダーとして、子どもと共に５日間を過ごし、僅か５日間で驚くべき成長を見せる子どもの姿を見届けることが出来ました。私個人としても、チームで１つの活動を行う体験に乏しかったので、チームでまとまるということを体感出来て、良い経験になりました。
今後の課題
　チームとして１つにまとまる難しさを実感しました。バックグラウンドの異なる学生が60人集まって、同じ目標に向かう中で、様々な議論を重ねましたが、時にはうまくまとまらないこともありました。

●学生参加者：匿名希望（人文学類　３年）
活動の成果
　茨城県南地域の小学生140名以上が、100kmの道のりを歩くことで、彼らの「生きる力」醸成をすることを目的とする。今年も、大学・地域団体および近隣住民や小学生の保護者等のご協力のおかげで、無事に全員が完歩することができた。

今後の課題

組織活動においては、特定個人に仕事が集中する、という状況はまだ改善の余地があると感じる。また、100km 歩行の中では、子ども同士のけんか等細かいトラブルが発生したため、いずれも再発防止策を練らねばならない。

●学生参加者：匿名希望（国際総合学類　１年）

活動の成果

子どもたちと 5 日間を共にすることで、子どもたちの成長やたくましさ、強さや弱さをみることができた。成長を支える側として、健康面、精神面、安全面など、子どもたちを様々な方面でサポートし、スタッフ同士で支え合いながら、プロジェクトを進めることができた。

今後の課題

社会人の力なしでは遂行できないプロジェクトであるため、大学生である自分たちの限界を感じた。

●学生参加者：匿名希望（社会工学類　３年）

活動の成果

子どもたちが自分の足で100km を歩き抜くためのサポートができた。また、自分自身、子どもたちやスタッフから多くのことを学ばせてもらい、成長を感じられた。

今後の課題

時間の使い方と効率の良い動き方

霞ヶ浦にて集合写真

ボードゲームのひろば（17005V）

受入団体名：つくばボードゲーム愛好会（12002G）

活動内容

つくば市内でまだ児童館が設置されていない春日学区で小学生の放課後の居場所づくりに取り組んでいます。現在、春日小学校では児童数が１～６年生までで1300人近くになり、待機児童数も多く、放課後の過ごし方が問題になっています。

筑波大学 将棋部、チェスサークル、筑波大学 T-ACT、筑波学院大学 OCP（オフキャンパスプログラム）の学生ボランティアの協力を得て、子どもたちとボードゲーム（オセロ、将棋、チェスなど）で遊ぶサークルを立ち上げ、週１回ですが、小学校向かいの春日交流センターで活動しています。

日時：毎週水曜日 15：00～17：00（長期休み以外）

場所：春日交流センター（大会議室） 茨城県つくば市春日2－36－1

活動期間

４月～３月　毎週水曜日

参加学生

T-ACT ボランティア：16人（参加団体　将棋部、チェスサークル）

その他：２人

≪内訳≫※参加人数は延べ人数

４月（３回）８人	５月（４回）12人	６月（３回）５人
７月（３回）３人	９月（４回）７人	10月（４回）７人
11月（５回）11人	12月（３回）３人	１月（４回）７人
２月（４回）10人	３月（２回）５人	

活動報告

●受入団体担当者

園児～小学生の子ども達及びその保護者たちにオセロ、将棋、チェス、囲碁などの指導や対局を行っていただきました。今年度は希望者が多く、園児から小学４年生まで35名と子どもたちは１学級並みの規模でしたが、筑波大学将棋部、筑波大学教育学類２年生、筑波学院大学オフキャンパスプログラムなどの大学生ボランティアさん方のおかげで、怪我もなく楽しい活動を行うことができました。保護者の皆さんからも、家ではなかなか相手をすることができなかったが、ルールを教えてもらって家でも将棋を家族でするようになったと大変好評でした。

（詳しくは Facebook「つくばボードゲーム愛好会」で活動報告をしています。）

●学生参加者：匿名希望（比較文化学類　４年）

活動の成果

春日交流センターで小学生と将棋やオセロなどをやった。将棋楽しかった。

今後の課題

子供たちの元気が回を追うごとに増していき、対応しきれない状況も生まれつつある。

小学生とボードゲームを楽しむ様子

●学生参加者：中山香介（数理物質科学研究科　修士課程２年）

活動の成果

半年間子供たちとボードゲームを通して交流してきました。私は将棋部で将棋の実力は２段相当、オセロでは１級を取得していますので、その知識を生かして子供たちの知見を深めることに貢献できたと思います。

子供たちの成長はめまぐるしいものがあり、半年間で全員大きく成長したと思います。全体的に小学生特有の走り回る、騒ぐ等の行動が減り、落ち着いてきました。また、技術的な点でも、特に将棋では対局開始時のハンデをつける量が減り、子供の実力の向上が確認できました。オセロでも大人に勝てるくらいまで成長する子供も出てきて、その成長具合は少しずつではありますが大きいものであると思います。

そして、子供ばかりではなく私たち学生も成長することができます。走り回っている子供たちがいれば学生が入って一緒に他のことをやる、内気な子に対して積極的に話しかけるなど、子供たちの言動を見てその子の性格を理解し、その子に合った対応をしていくことでコミュニケーション能力や問題対処能力が身につきます。

ボランティアでは将棋部から以外にも教職課程の学生や筑波学院大学生、他サークルの学生など広い幅の人間が参加していますので、参加することで自分の交友関係も広げることができました。

今後の課題

子供の受け入れ人数が増えてきたことによりボランティアの人間だけでは子供全員の対処が難しくなってきたことです。これには全体の雰囲気をもっと落ち着かせることで子供同士だけでもゲームを楽しめる環境づくりが必要だと考えます。また、ボランティアの人数が増えることで、より子供たちとのコミュニケーションが増やせると思います。子供たちと触れ合うことが好きな方は楽しみながら成長することができるのでぜひ参加されてはいかがでしょうか。

トワイライト音楽祭　2017　～よろずの灯り～（17007V）

受入団体名：研究学園グリーンネックレスアートの会（16002G）

活動内容

トワイライト音楽祭は、研究学園駅前の音楽祭として2014年より開始　（2017年度第４回目を開催）。

研究学園は大規模開発で住民のほとんどが新しく移り住まわれた方なので、その人々が明るく楽しく集い交流する場を提供し、住みやすい、自慢できる街を作っていく目的で開催。初年度は約300名の参加であったが、年々増加し昨年は1500名以上の参加があった。

ジャズ・クラシック・民族音楽・古典邦楽等、普段生で接する機会の少ない音楽を、気軽に聞けるコンサート。そして　つくばで活躍する　若いアーチストの発表の場としてのコンサートとして定着させて行きたいと思います。

「トワイライト音楽祭　2017　よろずの灯り」　開催予定

2017年７月29日　土曜日　　研究学園駅前広場

開催に向けての準備内容

1　竹灯篭の材料作成　竹の伐採・加工を行う
　地元の竹林整備を兼ね、竹を伐採し、竹灯篭用に加工する作業

2　竹灯篭を市民の皆様に描いてもらうイベント
　イーアスの会場を使い、来場者（子供が主）に絵を描いてもらい、竹灯篭を作成する、その補助。３日間で　約400個作成する

3　竹灯篭コンテスト
　イーアスに竹灯篭を展示し、来場者の投票で、コンテストを行う
　表彰式とミニコンサート

4　つくばで活躍する若いアーチストも音楽祭に参加できる様、オーディションを開催
　第１回　５月４日　イーアス　ウイズガーデンのイベントに参加
　第２回　６月末予定

5　竹ドーム　製作
　当日会場に展示する

6　当日
　会場設置・音楽祭サポート・会場警備　等　当日のスタッフ

7　その他準備段階
　諸書手続き・広報・資金繰り等

活動期間

平成29年７月８日～７月29日

参加学生

T-ACT ボランティア：16人
（参加団体　盆 LIVE 実行委員会）
その他：１人

竹きりだし - 加工	７月 8日	３人
	9日	３人
イーアスイベント	７月22日	５人
	23日	６人
イベント当日	７月29日	14人

完成した竹灯篭

イーアスでの活動の様子

活動報告

●受入団体担当者

打ち合わせ段階での意見交換から始まり、準備のサポート。イーアスでのイベントのサポート。当日の機材搬入から設置・音楽祭本番中の運営のサポート・着ぐるみ（フックン船長・つくつく）を着用して、来場客への対応・撤収作用まで　ほとんどすべての面で一所懸命活動してもらえました。芸専の学生さんが友人を集めてくださり、イーアスでのイベントのサポートをしていただきました。

●学生参加者：喜瀬沙織（比較文化学類　３年）

活動の成果

私たち盆 LIVE のお祭り運営も手伝っていただいたのがトワイライト音楽祭を運営している方だったので、開催当日だけではなく、準備期間のミーティングに参加したり、イーアスつくばでの竹灯籠を作るワークショップのお手伝いもしました。

開催当日は、チラシ配りや会場の準備片付け、着ぐるみをきるといった事もしましたが、音楽祭なので、野外での音楽を楽しみながら手伝っていました。

今後の課題

開催日は、実行委員の方は手一杯なので、指示待ちでは無く、自分達で手伝えることを積極的に探したり、声をかける必要があります。

イベント当日の様子

塾に行きたくても行けない子どもたちのための無料塾（17010V）

受入団体名：特定非営利活動法人居場所サポートクラブロベ（16006G）

活動内容

子どもを塾に行かせたいが経済的に難しい、塾の送迎ができないなど様々な理由で塾に行けない子どもたちのために、無学年教材を使用し、その子の学習状況に合わせた指導・学習をする無料塾を運営している団体です。
～経済的な理由で子供達の未来をあきらめさせない無料塾～
＜対象＞
小学生・中学生・高校生
（ただし、経済的に塾に通いたくても通えない子。
入塾面談時に伺います）
＜日時＞
毎週　月・木　18：00～21：00
＜場所＞
谷田部地区
主に、採点等を行います。

活動期間

４月１日～３月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：７人（延べ66人）

活動報告

●受入団体担当者

その時々のボランティアのメンバーによって、小学生または中学生の学習指導を担当していただきました。いずれのときも、どなたも真摯に子どもたちに対応していただきました。また、それぞれの得意の教科分野で学習指導をしていただきました。こどもたちも大変信頼して、指導に従い、また休み時間なども学生さんたちと楽しく過ごす事ができました。

●学生参加者：原理紗（生命環境科学研究科　修士課程２年）

活動の成果

無料塾における子どもの学習支援の活動を週に１回行った。私は様々な事情により高校進学ができなかった子どもの高卒認定試験と大学受験のための学習支援を担当した。通塾前は高認試験の問題で全く得点できなかったが、私が指導してからの３か月で約80％の得点ができるまで実力が伸びており、一発合格への道筋がたっている。

今後の課題

依然としてボランティアの人手不足が大きな課題である。より多くの筑波大生にボランティアに参加してもらえるよう、T-ACT 報告会のような広報の場を積極的に活用したい。私自身が卒業するにあたっては、担当する子どもの引き継ぎもするべきである。

活動中の様子

●学生参加者：石橋正幸（社会工学類　4年）

活動の成果

以前から漠然とではあるが教育問題に対する関心があったため、経済的貧困や様々な理由から塾などに通えない子供たちのための学習会を定期的に開催している「居場所サポートクラブロベ」へ参加した。月に数回、自分とは大きく歳の離れた子どもたちと接する中で、教え方やコミュニケーションの取り方などで戸惑うことも多かったが、一方で意外なところで自分にも貢献できることが見つけられるなど当初は想定していなかった側面での自信も得ることができた。そうした思いがけない発見は、今後自分の適性や職業選択などを考えていく上でとても有意なものになると思う。

今後の課題

学習会では主に小・中学生がグループ単位で学習をしているが、時折一部のグループでおしゃべりが大きくなりすぎて、周囲の学習者に迷惑が及ぶという状況があった。ただ、彼らにとっての学習会は勉強と同時に大切なコミュニケーションの場としての機能も果たしており、おしゃべりの時間も大切ではあるので、学習と雑談のバランスをいかに自分も含めたボランティアスタッフが制御し調整していくかが悩みどころであった。

第3回　つくば小中学生将棋大会（17013V）

受入団体名：**つくばボードゲーム愛好会**（12002G）

活動内容

最近までつくば市内では将棋教室や将棋大会が行われていなかったので、小中学生（小学４年生～中学生）までを対象にした初心者向けの将棋大会をTXつくば駅前の「つくばカピオ」で開催します。

当行事の開催により、伝統文化の継承や家庭で親子の対話を増やすことができ、子どもたちの自信につながる教育効果があります。

つくば市内外から大会参加者を募り、運営は筑波大学将棋部（「龍次郎杯将棋大会」「第１回つくば小中学生将棋大会」「第２回小中学生将棋大会」開催実績あり）が主催で行う予定ですが、裏方を一緒に手伝ってくれる人を募集しています。自分の得意な分野で夏休みにボランティアをしてみませんか。

活動期間

８月11日（金・山の日）9：00～17：00

参加学生

T-ACTボランティア：13人（参加団体　将棋部）

活動報告

●受入団体担当者

大会の計画から資金調達、HP（https://tsukubashogi.github.io/Tsukusho/）の作成、ポスター募集、広報、参加者受付、当日の大会運営と、大会のほぼ全てを、将棋部の学生が中心となって半年かけ準備してきました。

上級者部門と初心者部門に市内外から23名の小中学生の参加があり、エキシビションも大いに盛り上がりました。参加された小中学生の保護者からも大変好評でした。

●学生参加者：小野元（情報科学類　３年）

活動の成果

小中学生向けの将棋大会の企画、準備、運営を行った。前回大会から得られた反省を活かし、事前準備に力を入れ、当日は大きな問題もなく円滑に運営を執り行うことができた。参加者に有意義な経験を提供できたのではないかと思う。

今後の課題

思いの他募集要項や注意事項に目を通していない参加者が多く、こちらではきちんと見るように念を押したつもりだったので困惑した。またリーグ分けの方法ももう少し工夫が必要であると感じた。

活動の様子

つくばサイエンスツアー小学生対象工作実験教室（17014V）

受入団体名：**つくばサイエンスツアーオフィス（13002G）**

活動内容

「つくばサイエンスツアーオフィス」は、ノーベル賞受賞者　江崎玲於奈のもと科学技術の普及啓発等を図ることを目的に、つくば市内の約50か所の研究機関とつながる公共の機関です。

次世代を担う子どもたちに、簡単な工作や科学実験をとおし、驚きや感動を提供し、科学・技術に対する関心を高めてもらうことを目的としています。

【日程】

★6/11（日）、6/25（日）、7/17（月）、7/25（火）、8/6（日）、
8/11（金）・・・以降も予定あり。毎月１～２回程度、おもに休日に実施。

【内容】

★講師を招いて「親子工作科学実験教室」と「研究機関見学」を実施

例）「ピコピコカプセル、着地ネコ etc... おもしろい動きを楽しもう！」
「人工イクラ、色素＆レモン汁で七色の変化・・・化学の不思議体験！」
「砂を学び砂絵づくり」、「気分は宇宙飛行士！」
「液体窒素で－196℃の世界を体験」などの講座と
「筑波宇宙センター」「産業技術総合研究所」「国土地理院」
「筑波実験植物園」などの見学を実施予定

活動期間

６月21日～３月18日

参加学生

T-ACT ボランティア：３人

活動報告

●受入団体担当者

・小学生対象の工作実験教室当日の準備や、講座中の参加児童への作業補助。
・つくば市内の研究機関見学時の参加者の引率や記録写真の撮影など、イベント運営時のサポートスタッフとして活動してもらった。
・どの参加者も会場の準備など、面倒な作業にも積極的に取り組んでくれた。
・児童の扱いにも慣れており、参加者と一緒に楽しんで活動してもらい、イベントがスムーズに運営でき、大変助かった。

●学生参加者：Ding Yunjie（人間総合科学研究科　博士課程３年）

活動の成果

今回、活動内容はプロジェクト名と異なり、ツアーのサポートであった。一日四つの研究所を回る、かつ中国語のガイドツアーであった。主にツアーの参加者が循環バスに乗り遅れないように、ツアー団体の最後に声をかけるということだった。

中国語のツアーということで、参加者は殆ど中国人の家庭でありながら、こどもたちは日本育ちが多く、中国語のガイダンスにあまり興味を示さなかった。少し驚くことに、大人たちには受けがよかった。

今後の課題

今回の参加者が多いため、研究所内に見学する際、列が長く伸び、見学の時間が長引く傾向があった。最後にいる参加者が早く移動するように積極的に案内するべきだった。また、一日で四つの研究所を回るには内容が充実しているが、JAXA 以外のどれも十分に楽しめないのは少し残念である。今度は一日二箇所、のんびり見学するツアーの企画をしていただきたい。

放課後、子供と一緒に過ごしてくれるボランティア募集（17017V）

受入団体名：特定非営利活動法人　FutureSupport（17001G）

活動内容

親の離婚・家庭の経済状況などで傷ついた子ども達の心のケア・サポート、「将来の夢や目標につながる学びをサポートしたい」という思いから、活動を始めた団体です。私たち「トリアル」が目指すのは、いつやってきても受け入れてもらえるという安心感のある場所です。

≪主な活動≫
・放課後から20：00まで子供と一緒に過ごす
・一緒に遊ぶ
・学習支援
・無料学習塾（週に一回）ひとり親家庭・生活保護家庭対象
・子ども食堂（月に一回）
・スポーツ、ダンス、アートや音楽の体験

活動期間

４月20日～３月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：３人

＜無料学習塾＞	9/7	１人、	9/21	１人、	11/7	１人、	11/16	１人、	11/30	１人、		
	12/7	１人、	12/14	１人、	1/25	１人、	2/25	１人、	2/22	１人、		
	3/1	２人、	3/8	２人、	3/15	１人、	3/22	１人				
＜居場所＞	1/23	１人										

活動報告

●受入団体担当者

＜無料学習塾＞子供たちに勉強を教えたり、一緒にトランプなど勉強にかわるようなゲームをしてもらった。子供たちの気持ちを考え、気持ちに寄り添ってくれる姿が印象的でした。

＜居場所＞遊びにきた子供の宿題を見たり、一緒におもちゃなどで遊んでもらった。

●学生参加者：森亜友奈（障害科学類　４年）

活動の成果

週に一度、活動場所に小学生～中学生のひとり親家庭など、家庭に様々な事情がある子どもが集まり、宿題や課題、受験勉強など勉強を行い、それに対して指導を行う。たまに雑談をいれたり、課題が終われば遊ぶ子どもたちもいたり、楽しく活動を行えている。

また、今日学校であったこと、家であったことをたくさん話してくれるので、兄弟姉妹のような関係に近づいている。

達成度や成果は目に見える形ではないが、子どもに教えることでわからなかったことがわかったり、笑顔になることでやりがいを感じる。

●学生参加者：喜瀬沙織（比較文化学類　３年）

活動の成果

夏休みの比較的時間がある時は週２回ほど通い、放課後子供たちと遊んだり、木曜日の無料塾の日は子供たちの勉強をみたり、おにぎりの用意をしたりしていました。

時間は16：00～20：00

忙しい時期は、月に一回開かれる子供食堂のお手伝いをしていました。

他の大人のボランティアさんと一緒にご飯を作ったり、子供たちと遊んだりしました。

活動の様子

サマーアートキャンプ2017（17019V）

受入団体名：Art for Children's SHINE（16007G）

活動内容

児童養護施設の子ども達を山梨県のキャンプ場に招待し、アートキャンプを実施します。子どもの中には、深刻な虐待を受けた子もいます。自然の中で、のびのびとアートセラピーを受けることで、子ども達の心が解放され、より前向きに生きていけることを目標としています。

８月23日～25日　山梨県のキャンプ場で２泊３日のアートキャンプを行います。

ボランティアの皆さんには、子ども達のお兄さん・お姉さんとして、見守ったり、遊んだり、交流したりしていただきます。また、一緒にアートセッションに参加したり、その準備や食事の準備など、お手伝いしていただきます。

活動期間

８月23日～25日

参加学生

T-ACT ボランティア：１人

活動報告

●受入団体担当者

子ども達の遊び相手、アートセッションの補助、調理補助などを行った。子どもの担当を決めていたので、担当の子どもに合わせた遊びや会話など工夫してもらった。

●学生参加者：関尾湖富（心理学類　３年）

活動の成果

児童養護施設で生活している子ども達と一緒にキャンプ場に宿泊し、アートセラピーを行うキャンプにボランティアとして同行しました。このキャンプが子ども達の中に長く残る思い出になっていたらといいな、と思います。昨年も参加させていただいたため、自分の子どもへの接し方の変化も感じました。昨年会った子ども達が覚えていてくれたのが個人的に嬉しかったです。

今後の課題

施設での普段の生活を知らない分、どう接するべきなのか考えることが多かったです。非日常の中でのびのび過ごしてほしいと思う一方、集団行動の中で全てを許す訳にはいかないのが難しさでした。

第8回子どものための救命教室（17023V）

受入団体名：NPO 法人子どものための救命教室（16020G）

活動内容

３歳～小学校３年生までの子どもたちを対象に、救命教室を開催しています。

救命教室の中で、子どもたちに「いのちとはなにか、生きているとはどういうことか」を考え、救命の基礎を体験してもらいます。いのちの大切さを知り、自分やまわりの人を尊重できる子どもたちが増えることで、それぞれの心の成長や、社会全体の安全性、救命率の向上を目的としています。救急医の監修をうけながら活動しています。

教室は１回完結、小学１～３年生の約20人が参加予定。

プログラムは、総合ガイド１人と医師１人で進行します。

子どもたちは４つの小グループにわかれ、それぞれに数名のボランティアの方に担当していただきます。ボランティアの方は、総合ガイドの進行に合わせて、教材を子どもたちに渡したり、子どもたちに声をかけて進行を補助していただきます。内容は子どもたちの理解度に合わせて構成されていますので、医療の知識や経験のない方でも無理なくご参加いただけます。また救命教室には、医師が必ず参加します。看護師や救命救急士が同席することもありますので、現場の声を聞くこともできます。

プログラム終了後は、消防署内見学を行います。

活動期間

10月22日（日）９時～11時30分

【場所】つくば市中央消防署　３階　多目的ホール

９時～９時半　ミーティング

10時～11時　　救命教室開催

11時～11時半　消防署内見学　　終了後、解散

参加学生

T-ACT ボランティア：１人

活動報告

●受入団体担当者

小学生１～３年生の児童６人を他のボランティアスタッフ２名とともにご担当いただきました。参加者が来場したときから終始笑顔で迎え入れ、子どもたちもリラックスして参加することができました。プログラム中には子どもたちの様子に気を配り、細やかに声かけをしてくださり、非常に安心してお任せすることができました。是非今後も継続してご協力いただきたいと思っております。

●学生参加者：吉原祐輔（数学類　４年）

活動の成果

小学１年～３年の子ども対象の救命教室の補助を行った。

子どもたちが命や救命についてどのような点に興味を持っているのか、またどのように教えればよいかを学ぶことができた。救命の大切さと、すぐに大人を呼ぶことという点を趣旨としていたのは重要だと感じた。

今後の課題

子どもたち20名弱に対してボランティアを含む補助者が10名以上おり、やや手持ち無沙汰になってしまった。子どもたちの誘導や話を聴くよう促すようなことはもう少し積極的に行うべきだった。

活動の様子

第10回子どものための救命教室（17030V）

受入団体名：NPO 法人子どものための救命教室（16020G）

活動内容

３歳～小学校３年生までの子どもたちを対象に、救命教室を開催しています。

救命教室の中で、子どもたちに「いのちとはなにか、生きているとはどういうことか」を考え、救命の基礎を体験してもらいます。いのちの大切さを知り、自分やまわりの人を尊重できる子どもたちが増えることで、それぞれの心の成長や、社会全体の安全性、救命率の向上を目的としています。救急医の監修をうけながら活動しています。

教室は１回完結、年少～年長の約20人が参加予定。プログラムは、総合ガイド１人と医師１人で進行します。子どもたちは４つの小グループにわかれ、それぞれに数名のボランティアの方に担当していただきます。ボランティアの方は、総合ガイドの進行に合わせて、教材を子どもたちに渡したり、子どもたちに声をかけて進行を補助していただきます。内容は子どもたちの理解度に合わせて構成されていますので、医療の知識や経験のない方でも無理なくご参加いただけます。

また救命教室には、医師が必ず参加します。看護師や救命救急士が同席することもありますので、現場の声を聞くこともできます。

プログラム終了後は、消防署内見学を行います。

活動期間

３月４日（日）９時～11時30分
【場所】つくば市中央消防署　３階　多目的ホール
９時～９時半　ミーティング
10時～11時　救命教室開催
11時～11時半　消防署内見学　終了後、解散

参加学生

T-ACT ボランティア：２人

活動報告

●受入団体担当者

年少～年長の子どもたち22人が参加するイベントにて、他のボランティアスタッフとともに進行のサポートをしていただきました。イベント前のミーティング時から積極的に参加され、内容や目的をきちんとご理解くださいました。イベント中は終始子どもたちの様子に気を配り、細やかに声かけをしてくださり、非常に安心してお任せすることができました。

●学生参加者：匿名希望（看護学類　３年）

活動の成果

幼稚園生の子どもたちの救急救命教室の補助を行いました。まだ小さい子どもたちだったので、手ぶり身振りを使って説明したり、声掛けを積極的に行い活動を促すなど教室のサポートを行いました。子どもの年齢を考慮したプログラムに沿って子どもたちと関わっていく中で、どうしたら伝わるのか、何を学んでもらえるのか考えることができ、救命教育について貴重な経験となりました。

今後の課題

子どもの発達段階に応じた教え方の工夫について、今回は幼稚園児が対象でしたが、小学生、中学生の子どもについても勉強し考えてみたいと思いました。

子どもと一緒に命について学んでいる様子

土浦市立神立小学校　養護教諭の活動補助（17033V）

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター（12001G）

活動内容

週に数回、保健室で養護教諭のサポートをする。

【活動例】

・身体測定補助
・保健室来室児童の対応
・保健室の整理整頓

活動期間

4月14日～３月２日

参加学生

T-ACT ボランティア：５人

≪内訳≫

4月14日、7月11日、7月18日、9月 5日、9月 6日、9月 7日、
10月12日、10月13日、10月19日、10月25日、11月29日、11月30日、
1月30日、2月 7日、2月 9日、2月19日、2月21日、2月23日、
2月28日、3月 2日　　各日１人

活動報告

●受入団体担当者

＜活動内容＞

保健室にて掲示物の作成、保健室来室児童の対応、身体測定の補助、就学時健康診断の手伝い

＜担当養護教諭より＞

続けて活動してくれる学生さんは、こちらの望むことを理解して活動してくれるので非常にありがたいです。児童との距離も少しずつ近づいて、対応が上手に出来るようになっている様子を見て素晴らしいと思いました。このボランティアの経験を今後に活かしたいという言葉を聞くと嬉しくなります。

●学生参加者：匿名希望（看護学類　３年）

活動の成果

小学校の保健室で、来室した児童の対応、書類整理などの事務作業、保健室の掲示物づくりなどを行いました。保健室で出会った個性豊かなたくさんの子どもたちとの関わりは、自分の将来の夢に繋がる大きな経験となりました。また、現役養護教諭の先生の、子どもたちに寄り添う姿を間近で見ることができ、自分の目指す養護教諭像について改めて深く考えることができました。

今後の課題

保健室を訪れる子どもの中には、教室に行けない子や、気持ちの面でサポートが必要な子もいました。そしてその必要なサポートや声のかけ方は、子どもによって異なり、現役の先生でも毎日迷いながら接していると仰っていました。子どもたち１人１人に丁寧に真摯に向き合い、最善のサポートができるように、今は養護教諭としての医学や心理学といった専門性を発揮するための勉強を頑張りたいと感じました。

活動中の様子

2017 年度　実施状況報告　～10 年の歩みを振り返って

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図 1 ）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援―学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生―」にある。学生支援 GP が終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として学生支援が続けられている。

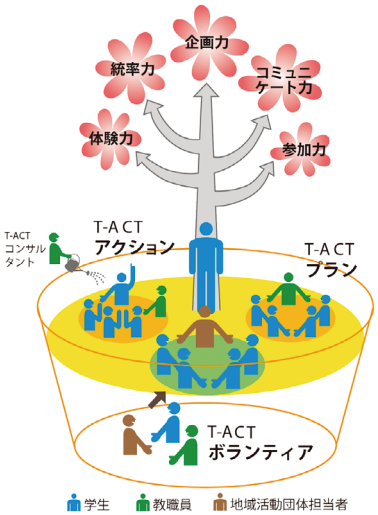


図 1　共創的コミュニティ形成による T-ACT の展開と学生の成長

T-ACT には、学生が企画立案し展開する T-ACT アクション、教職員が企画立案し展開する T-ACT プラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をする T-ACT ボランティア（2012年度スタート）の 3 種類の活動がある。

T-ACT が支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティヴな流動性をもつことを特徴としている。学生は、それらの活動を通して、様々な活動への積極的な参加力、経験から感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケート力、人をまとめ率いる統率力、ヴィジョンを具現化し創造する企画力といった「人間力」を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。

T-ACT の支援が開始され、2017年度で10年目となった。節目の年の活動報告を行うにあたって、本稿では2017年度の活動を中心にしつつ、この10年間の歩みを振り返るデータを提示していく。なお、以下示す全てのデータは2018年 3 月までに T-ACT 推進室で把握できた数に限られる。各企画の活動期間やそれによって変動する活動報告のタイミングの関係上、本報告のデータは今後更新されることがある。

1．T-ACT の周知率と関心度

2009年度から2016年度まで本学保健管理センターの協力のもと、全学的に T-ACT の周知率・関心度・参加率の調査を行ってきた（以下、全学的アンケート）。調査協力者は66811名であった。本学学群生および大学生への周知率（「T-ACT について知っている」に対して、「あまり当てはまらない」「少し当てはまる」「とても当てはまる」の回答をした割合）は2014年度まで増加傾向にあり、2014年度以降は80％程度で前後している（図 2 ）。関心度（「T-ACT の活動に参加してみたいと思う」に対して、「少し当てはまる」「とても当てはまる」の回答をした割合）も2014年度まで増加傾向にあり、2014年度以降は35％程度で前後している（図 3 ）。T-ACT への参加率（「T-ACT の活動に参加したことがある」に対して、「 1 回」「 2 回」「 3 回以上」と回答した割合）は2015年度まで増加している（図 4 ）。

また、2014年度から2016年度まで、全学的アンケートにてボランティア活動への関心度・参加率の調査も行ってきた。調査協力者は29761名であった。本学学群生および大学生へのボランティア活動への関心度（「社会貢献活動・ボランティア活動をしてみたいと思う」に対して、「少し当てはまる」「とても当てはまる」の回答をした割合）は、2014年度より56.1％と高い水準であり、さらに増加の傾向がある（図 5 ）。

なお、2017年度からは全学的アンケートは実施していない。代わりに、5 年に 1 度、本学の学生生活支援室が実施している学生生活実態調査において、T-ACT およびボランティア活動についての設問を設けており、そ

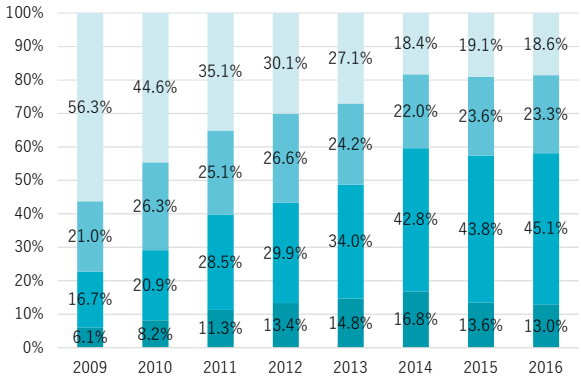


図 2　T-ACT の周知率の変遷

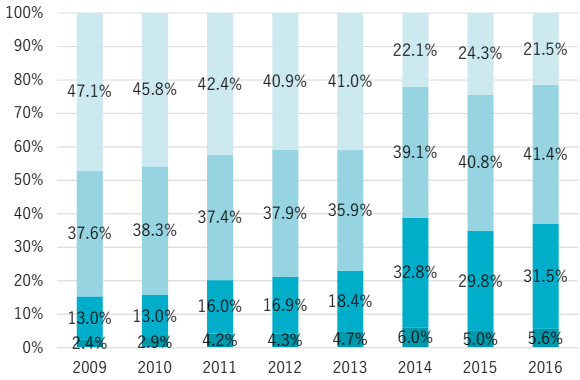


図 3　T-ACT への関心度の変遷

ちらで関心度などの調査を行うこととしている。学生生活実態調査への調査協力者数は学群生2236名、大学院生1369名であった。2017年度の T-ACT への参加・関心度状況は表 1、ボランティア活動への参加・関心度状況は表 2 の通りである。

T-ACT の周知に関しては、既に十分になされていると言える。一方で、T-ACT への関心度は 3 人に 1 人を越える程度である。T-ACT での活動は、正課やサークルとは異なる第 3 の課外活動の選択肢であるという点を考えると、決して低いとは言えないと考えられるが、より本支援体制の魅力をアピールしていく必要性はあるであろう。また、ボランティア活動への関心度は 2 人に 1 人以上の関心があることから、T-ACT がボランティアの窓口となっていることをより学生に知ってもらうことは重要であると言える。T-ACT への参加率は10人に 1 人から 5 人に 1 人といった程度で推移している。より多くの学生に T-ACT を活用してもらうには、T-ACT という支援を知ってもらうだけでなく、T-ACT を活用することでのメリットを知ってもらったり、感じてもらう必要があるであろう。既に活用している学生からは「やってみてから、その良さがわかった」などの報告があがることが多いため、今後は T-ACT の活動により多くの学生を巻き込み、その良さを感じてもらえるような取り組みができると良いと考えられる。

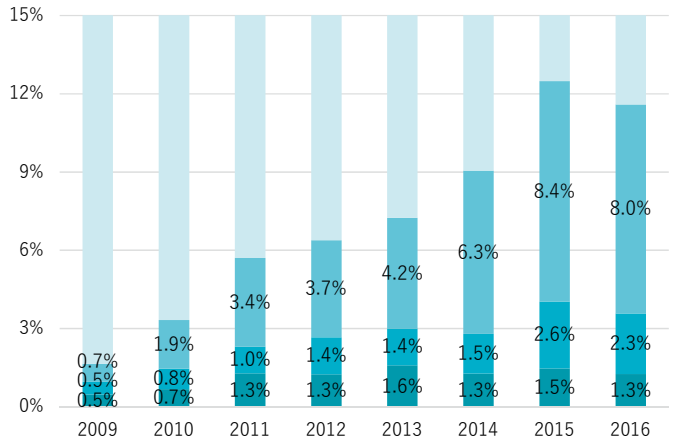


図 4　T-ACT への参加率の変遷

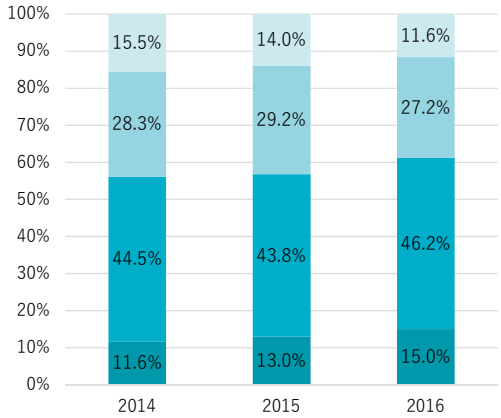


図 5　ボランティアへの関心度の変遷

表 1　2017年度の T-ACT への参加・関心度状況

項目	学群生	大学院生
T-ACT の活動に参加したことがある	17.7%	9.7%
参加したことはないが、在学中に参加したいと考えている	18.1%	17.5%
T-ACT の活動に参加する予定はない	64.2%	72.8%

※　各項目にあてはまる学生の割合を掲載

表 2　2017年度のボランティアへの参加・関心度状況

項目	学群生	大学院生
ボランティア活動に参加したことがある	30.6%	26.6%
参加したことはないが、在学中に参加したいと考えている	24.5%	18.3%
ボランティア活動に参加する予定はない	44.9%	55.1%

※　各項目にあてはまる学生の割合を掲載

2．T-ACT で申請された企画等の状況

2017年度の T-ACT アクション・プランの企画申請数は63件（アクション63件、プラン 0 件）であり、そのうち45件（アクション45件、プラン 0 件）が承認された（図 6 ）。申請された企画における、学生プランナーは56名（重複者を除く実数は49名）、学生オーガナイザーは235名（実数は189名）、教職員パートナーは54名（実数は39名）であった（図 7 から図 9 ）。なお、教職員によるプランナーは 0 名であった。企画のパーティシパントは各企画によって報告された参加者の概数を足し合わせた数のみを報告する。2017年度のパーティシパントの報告された総数は4217名であった（図10）。T-ACT ボランティアにおける登録団体数は35であり、団体登録がなされた上での承認活動数は34件であった（図11）。T-ACT ボランティアからの活動参加者は99名であり、T-ACT ボランティアとは別に活動の情報を得て参加している学生も 3 名いることがわかっている（図11）。

申請数は2016年度に比較して増加したが、承認数は減少した。承認数の減少に伴って、企画運営側であるプ

ランナーやオーガナイザー、パートナーの実数および延べ数も微減したと考えられる。2017年度の承認数のうちには2016年度に申請され、2017年度に承認されたものが含まれるため、2017年度の申請数から2017年度の承認数を引いた数値が、2017年度に申請され承認されなかった企画数の実数とはならない。それも踏まえて、2017年度に申請されたが承認されなかった企画の内訳を大まかに見てみることとする。まず、2017年度をまたいで2018年度に承認されたもの（承認が可能なもの）が 6 件あり、これらは2017年度の承認数にはカウントされていない。また、2018年度も引き続き申請段階での検討を重ねている企画が 2 件ある。これらは引き続き、T-ACT の支援対象として前向きな活動を続けていると言える。他の未承認企画のうち、T-ACT での審議の結果、T-ACT による支援に適さないと結論づけられた企画は 1 件のみである。それ以外の未承認企画の多くは、Web メディアの継続的な運用を目的とした企画、営利も目的に含まれた企画、ベンチャー企業を志向する企画などであり、T-ACT の理念および支援の有効性に適さないと言えるものであった。こういった企画には、学内のさらに適切な支援制度の情報を提供する（例えば、本学国際産学連携本部が開講する「筑波クリエイティブ・キャンプ」の受講を勧めるなど）といった支援を行った。したがって、承認に至らない活動に対しても、その実現を支援することができていると言える。また、昨年度は T-ACT にて企画を申請するのではなく、企画終了後に独自に活動を続けるための相談、サークル設立のための相談、上記したメディア運用、ベンチャー起業志向の相談なども含めた多種多様な相談が増えていることから（図13、図14も参照）、「とにかく何かやってみたいことが

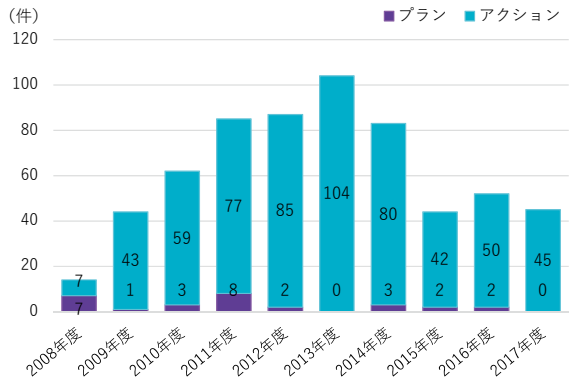


図６　アクション・プランの企画承認数の変遷

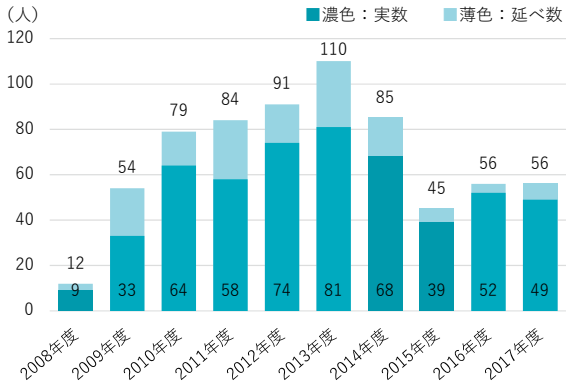


図７　学生プランナー数の変遷

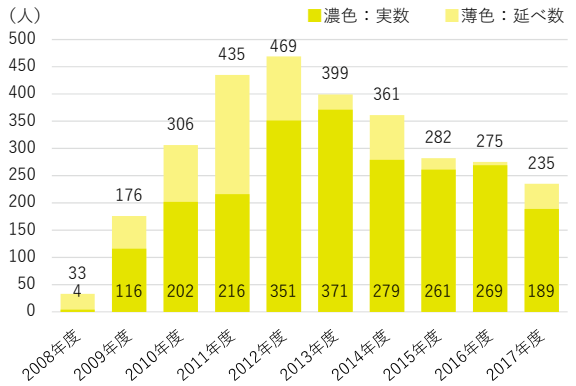


図８　学生オーガナイザー数の変遷

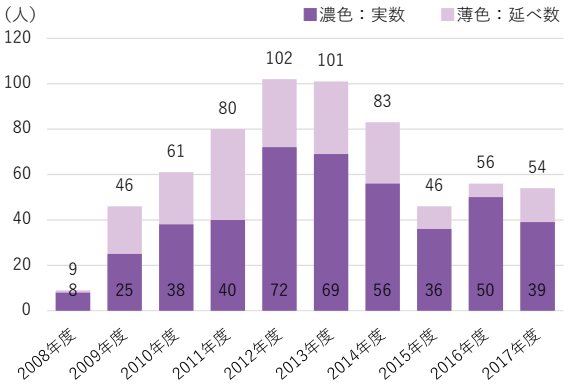


図９　教職員パートナー数の変遷

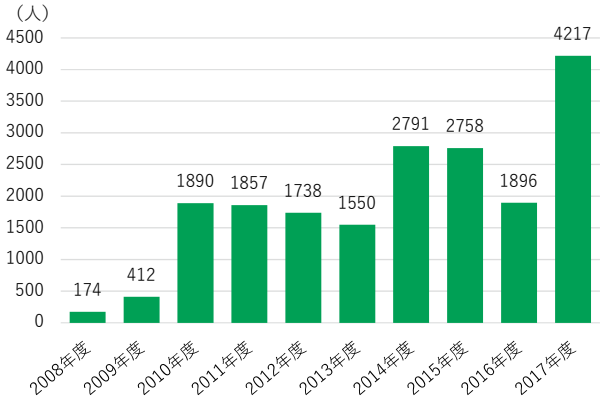


図10　パーティシパント報告数の変遷

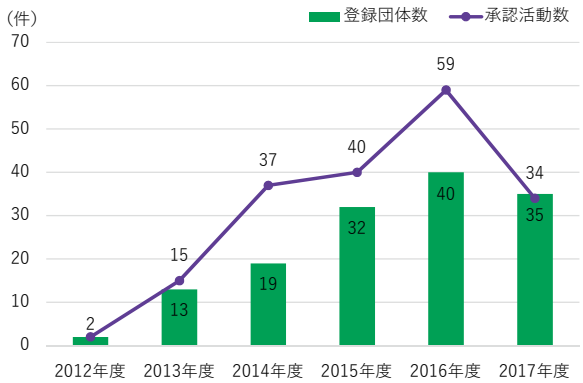


図11　T-ACT ボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷

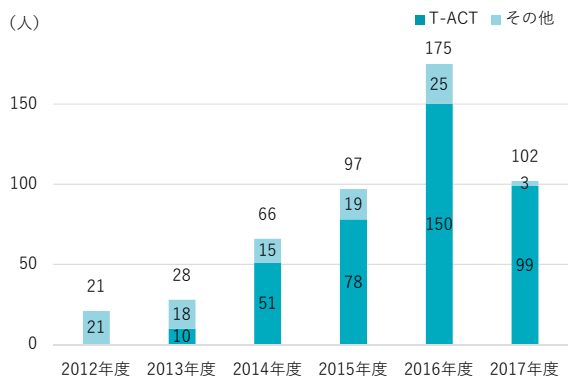


図12　T-ACT ボランティア登録団体で活動した学生数の変遷

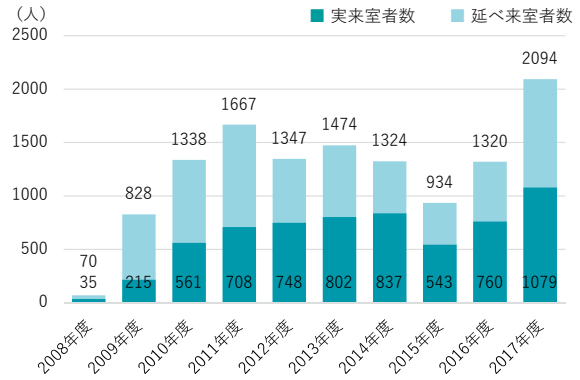


図13　T-ACT フォーラム来室者数の変遷

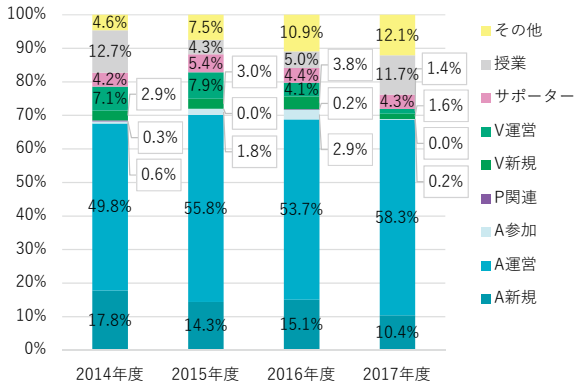


図14　T-ACT フォーラム利用目的の変遷

あったら T-ACT で相談する」という学生が増えつつあることが示唆される。

パーティシパントの総数は、2016年度に比較して大幅に増加し、過去最多となった。ただし、パーティシパントの総数は学生の報告に大きく依存しており、年度によって数字に大きなばらつきが出ることが指摘されている。その理由の一端として、学生にとってはオーガナイザーやパーティシパントといった参加者の区分は難しく、そしてあまり気にされていないといった口頭での報告もあることから、厳密な把握が難しいという実態が挙げられる。したがって、パーティシパント総数の単純な大小で企画そのものの良し悪しや、T-ACT の実績判断の指標とするのは妥当ではないと指摘されている。2017年度のパーティシパント数の増加については、学園祭といった大きな発表・展示の機会を利用し、一般来場者の観覧参加を多く得た企画が例年以上に多かったことが主要因である。2017年度は自分たちの活動を広く一般に知ってもらいたいというモチベーションを持った企画が多かったとは言えるであろう。

T-ACT ボランティアへの登録団体や承認活動、ボランティア参加者は2016年度に比較して減少が見られた。2016年度までの増加をもって、筑波大学内にボランティア精神が根づきつつあることが示唆されていた。しかし、2016年度の全学的調査（図５）におけるボランティアへの約60％への関心に比較し、2017年度の学生実態調査（表２）における「参加したことはないが、在学中に参加したいと考えている」が学群生において24.5％、大学院生において18.3％と決して高くないことや、学群生、大学院生ともに半数ほどが「ボランティア活動に参加する予定はない」と答えていることなども踏まえると、年度によって大学生のボランティアへの意識にはばらつきがあることが示唆される。学生がボランティア活動を通じて社会での活動の経験値を得たり、人間力の育成を可能とするためにも、T-ACT には引き続き学生に対してボランティアの機会を提供するための支援や広報に力を入れる必要があると言えよう。

３．T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図13に示した。2017年度の延べ来室者数は2094名であり、実来室者数は1079名であった。2016年度と比較して、延べ来室者数は700名程度、実来室者数は300名程度増加した。また、学生の来室目的の割合の変遷を図14に示した。2017年度の T-ACT アクションの新規申請に関する相談（A 新規）が10.4％、T-ACT アクションの運営のための利用（A 運営）が58.3％、T-ACT アクションへの参加に関する相談（A 参加希望）が0.2％、T-ACT ボランティアへの参加に関する相談（V 新規）が1.6％、T-ACT ボランティア参加後の相談に関する利用（V 運営）が1.4％、T-ACT サポーターの来室（サポーター）が4.3％、総合科目に関する利用（授業）が11.7％、その他の利用（その他）が11.7％であった。2017年度の T-ACT ボランティアに関して来室した地域活動団体などの来室者数は69名であり、来室目的としては T-ACT ボランティアの団体登

録あるいは募集申請に関しての来室が最も多かった（募集関連）。また、ボランティアの内容に関する相談や学生との打ち合わせ（打合せ）も多く、さらに取材なども含む様々な訪問（その他）もあり、訪問理由は多岐に渡っている（図15）。

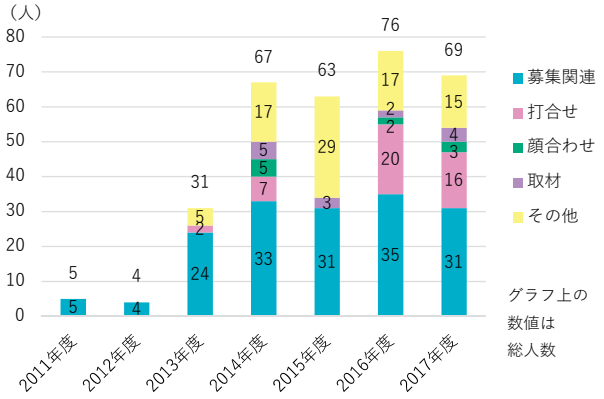


図15　地域団体等の T-ACT フォーラム来室者数の変遷

T-ACT フォーラムへの来室者数は 2 年続けて増加した。T-ACT アクションに関する利用割合は昨年度までとほぼ同様であり、T-ACT アクションの促進にとって T-ACT フォーラムが重要な役割を果たしていることは変わらない。ただ、T-ACT アクション参加のためだけにフォーラムに来室する学生が少ないことは今後の課題であろう。なお、新しく企画に参加する学生の多くは、直接各企画にアクセスし活動を始めることが大半である。授業に関係した来室者数が増加したのは、総合科目である「みんなで創ろう『つくばアクションプロジェクト』」において、T-ACT フォーラムを利用する課題が課せられたからであろう。また、「その他」の理由で来室する学生が割合では同程度おり、実数で言うと増加している。例年通り、「居場所」としてフォーラムを利用する学生も変わらずいるが、2017年度は T-ACT アクションや T-ACT ボランティアに限らない「やってみたい」の相談が増えていることは先述した通りである。とりあえず T-ACT に相談に来た後、より適切な支援制度につながることもある。これらのケースからは、学生の「やってみたい」を育てる筑波大学全体としての学生支援が T-ACT に限らずより充実してきていること、それらと学生を結びつける窓口としての役割を T-ACT が持ちつつあることが示唆されていると言えよう。

T-ACT ボランティアに関する来室者数の割合および実数は微減しており、よりいっそう学生が足を運びやすくなるための工夫を要することは先述した通りである。地域団体等の来室数も微減しているが、2015年までの傾向とは異なり、打ち合わせや顔合わせが増えている傾向があることは、学生へのアプローチを T-ACT と地域団体がより連携を深めながら考えていく関係が構築されつつあることを示唆している。こういった協働は、学生のボランティア活動への参加を促し、地域社会での活動に巻き込み、それを学生にとっての貴重な学びとするためにも必要な関係であると言え、より一層の強化が望まれる。

4．T-ACT 参加者とその役割の変化

2009年度から2013年度に実施された全学的アンケートから、学生の大学生活での様子をもとに学生を 4 つの群に分けた。具体的には、学群生・大学院生33519名を対象に、学生生活の評価得点（心理的不調、自己効力感、やりがいや目標、友人関係、対人的積極性の 5 つの指標）を用いてクラスター分析を行い、4 つのクラスターに分類した。学生生活が充実している充実群（5882名）、特筆した充実さはないが消極的でもない平均群（12728名）、学生生活に関して消極的な消極群（10837名）、苦労が多く心身の不調もありうる苦労群（4072名）の 4 つである。どの群からどの程度の学生が T-ACT に参加しているか分析した結果を図16に示す。

図16から、T-ACT へ参加する学生は必ずしも充実群といった元気の良い積極的な学生だけではないことがわかる。消極群や苦労群に属する学生も T-ACT に参加するだけでなく、プランナーとして自らの「やってみたい」を実現しようとしていると言え、T-ACT の支援体制の裾野の広さを示している。

2008年度から現在に至るまで、T-ACT 参加者を対象にした Web アンケート調査（以下、Web アンケート）が実施されている。調査協力者は1135名であった。その回答者の中から、2 回以上活動を行った学生176名について、活動に参加した際の役割の変遷を分析し、図16に示した。T-ACT パーティシパントのみを経験した学生が14名、T-ACT オーガナイザーのみを経験した学生が33名、T-ACT プランナーのみを経験した学生が34名、T-ACT パーティシパントと T-ACT オーガナイザーを経験した学生が35名、T-ACT パーティシパントと T-ACT プランナーを経験した学生が15名、T-ACT オーガナイザーと T-ACT プランナーを経験した学生が32名、全ての役割を経験した学生が13名であった。

図17からも、T-ACT に複数回参加することで、ひとりの参加者から企画の運営まで深く関わるリーダーや、後進の支援を行うサポート役といった、様々な役割を体験することができることがわかる。すなわち、企画の経験を通じて社会で必要とされる様々な役割について、体験的に学ぶことができていると言えるであろう。

	苦労群	消極群	平均群	充実群
参加者数	181（4.5%）	488（4.5%）	691（5.5%）	363（6.2%）
プランナー数	81（2.0%）	180（1.7%）	263（2.1%）	139（2.4%）

※　（　）の%は各群に属する学生の全数を分母とした数値

図16　学生の特徴と T-ACT への参加状況

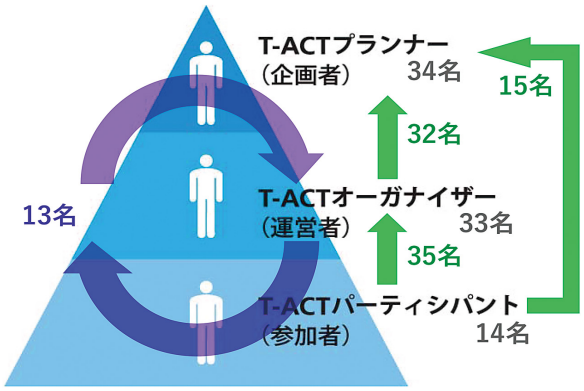


図17　T-ACT 参加者の役割の変遷

5．T-ACT による人間力の成長

Web アンケートにおいては、活動終了後の人間力の成長に関する調査項目がある。参加力、体験力、コミュニケート力、統率力、企画力の 5 つを人間力の指標として想定しており、それぞれを測定する項目は表 3 の通りである。

表 3　人間力を測定する項目

参加力：積極的に活動に取り組む力
活動の実現に向けて自分なりに努力できた
活動に積極的に関わることができた
活動の実行に貢献することができた
活動にできるだけ多く参加できた
互いに協力し合いながら、活動を進めることができた
体験力：活動の中で感じとり考える力
活動を通して，新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた
活動を通して，自分の改善すべき点を知ることができた
活動を通して，喜怒哀楽を感じることができた
活動を通して，なんらかの新しい発想を得ることができた
いろいろな出来事を見聞きできた
活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた
コミュニケート力：他者と関わる力
他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた
他のメンバーと積極的に関わることができた
自分の気持ちを伝えることができた
他のメンバーの意見に耳を傾けることができた
統率力：メンバーをまとめる力
他のメンバーに対して公平に接することができた
孤立したメンバーがいないかどうか注意を払うことができた
指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた
活動の目的、あるいは目標を達成させることができた
リーダーシップを発揮することができた
企画力：創造し計画し実現する力
活動に関して様々なアイデアを発想することができた
活動を実現するために適切な計画を立てられた
活動を実現する際に生じる問題点を予測しておくことができた
ある程度計画通りに活動を遂行できた
活動に関係する情報を多く集めることができた
自己理解：自分を振り返る機会を得られたかどうか
自分について考えさせられる体験ができた

5つの人間力についての回答結果は図18から図22までに示した。また、「自分について考えさせられる体験ができた」という、自己理解の深まりについての項目の結果についても図23に示した。

全体でみると、いずれの項目も「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合が60％を越えており、T-ACTへの参加によって人間力の成長や自己理解の深まりを得られる学生が多いことを示している。役割別でみると、パーティシパントとしての参加よりもオーガナイザーとしての参加の方が、オーガナイザーとしての参加の方がプランナーとしての参加の方が、人間力の成長や自己理解の深まりを得られていることがわかる。また、参加力、体験力、コミュニケート力に比較して、統率力、企画力の達成度が低い。後者2つの力は前者3つの力よりも達成が難しい、より高次の力であると考えられる。したがって、T-ACTに参加することによって、過半数の学生は人間力の成長や自己理解の深まりを得られ、より企画への関わりが強い役割で参加することによって、その学びは大きくなることが示された。

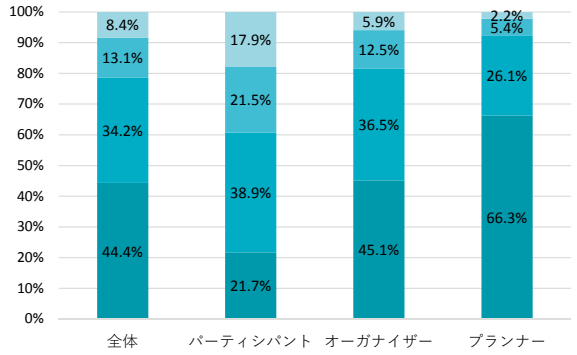


図18　T-ACT参加時の役割と参加力の成長

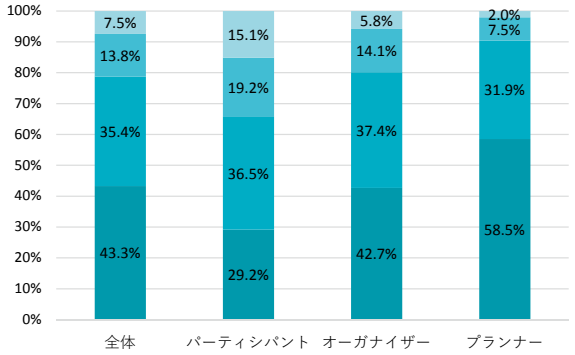


図19　T-ACT参加時の役割と体験力の成長

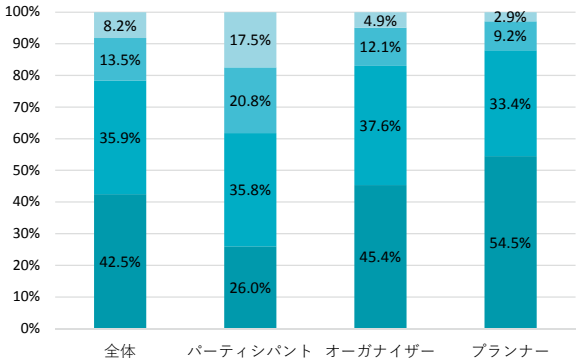


図20　T-ACT参加時の役割とコミュニケート力の成長

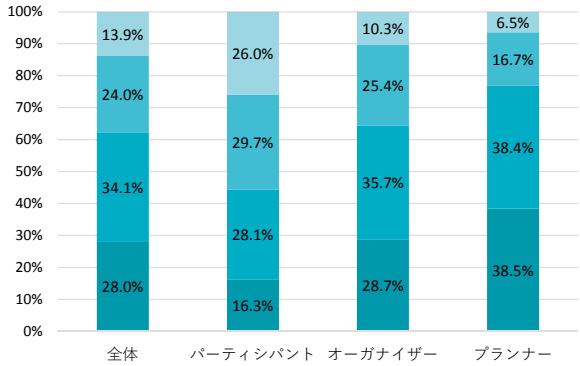


図21　T-ACT参加時の役割と統率力の成長

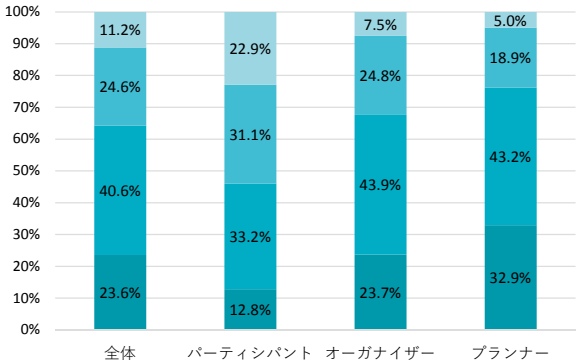


図22　T-ACT参加時の役割と企画力の成長

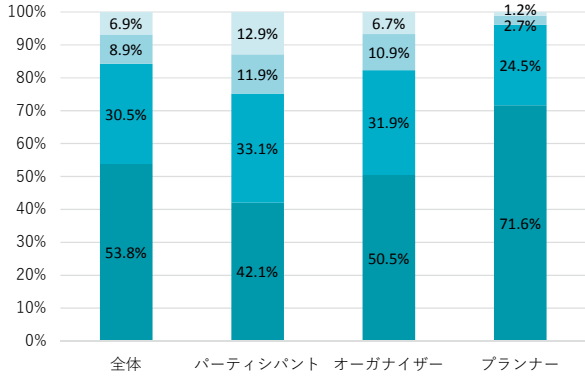


図23　T-ACT参加時の役割と自己理解の深まり

なお、2017年度のWebアンケートによる人間力の成長、および自己理解の深まりについての結果は、表4の通りである。なお、調査協力者は48名であった。2016年度より、アンケートの実施方法が変更されたため、パーティシパントに対する調査が難しくなり、結果的に2017年度のパーティシパントの協力者は得られなかった。全体的な傾向としては、パーティシパントのデータがないため、オーガナイザー、プランナーの高い達成報告がしめており、かえってオーガナイザーの方が「とても当てはまる」と答えている割合が高くなっている。

表４　2017年度における T-ACT 参加時の役割と人間力の成長および自己理解の深まり

		全く あてはまらない	あまり 当てはまらない	少し 当てはまる	とても 当てはまる
参加力	全体	0.4%	3.3%	38.8%	57.5%
	オーガナイザー	0.8%	0.0%	37.6%	61.6%
	プランナー	0.0%	7.0%	40.0%	53.0%
体験力	全体	1.0%	10.4%	36.8%	51.7%
	オーガナイザー	0.7%	13.3%	31.3%	54.7%
	プランナー	1.4%	7.2%	42.8%	48.6%
コミュニケート力	全体	0.5%	7.8%	41.1%	50.5%
	オーガナイザー	1.0%	6.0%	43.0%	50.0%
	プランナー	0.0%	11.6%	39.1%	49.3%
統率力	全体	3.3%	22.9%	45.8%	27.9%
	オーガナイザー	3.2%	20.8%	46.4%	29.6%
	プランナー	3.5%	25.2%	45.2%	26.1%
企画力	全体	2.1%	19.6%	53.8%	24.6%
	オーガナイザー	0.8%	20.8%	61.6%	16.8%
	プランナー	3.5%	18.3%	45.2%	33.0%
自己理解	全体	2.1%	2.1%	35.4%	60.4%
	オーガナイザー	0.0%	4.0%	28.0%	68.0%
	プランナー	4.3%	0.0%	43.5%	52.2%

６．T-ACT 参加による学生生活の充実感

全学的アンケートでは、T-ACT での活動による学生生活の充実感への効果に関する回答も得ている。「T-ACT での活動によって学生生活が充実した」に対して「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した、すなわち T-ACT 活動が充実感に寄与したと回答した学生は、T-ACT 活動への参加が 1 回ある場合32.5%、2 回ある場合66.2%、3 回以上ある場合85.4%であった（図24）。T-ACT 活動への参加がオーガナイザーとして 1 回ある場合35.5%、2 回ある場合85.1%、3 回以上ある場合87.5%であった（図25）。プランナーとして 1 回ある場合35.2%、2 回ある場合87.0%、3 回以上ある場合98.4%であった（図26）。T-ACT ボランティアへの参加が 1 回ある場合26.0%、2 回ある場合69.3%、3 回以上ある場合89.3%であった（図27）。

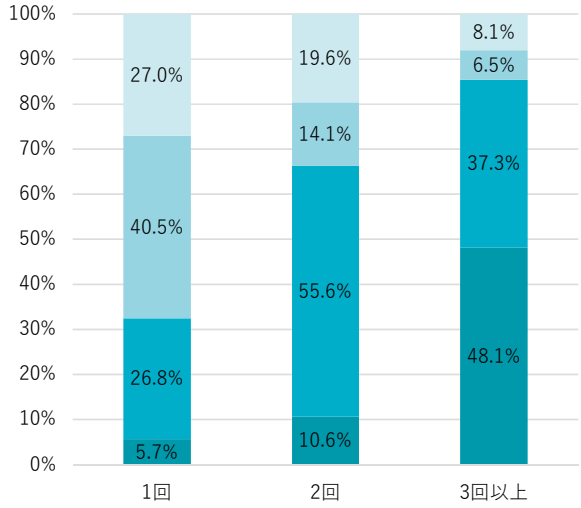


図24　T-ACT への参加回数と充実感

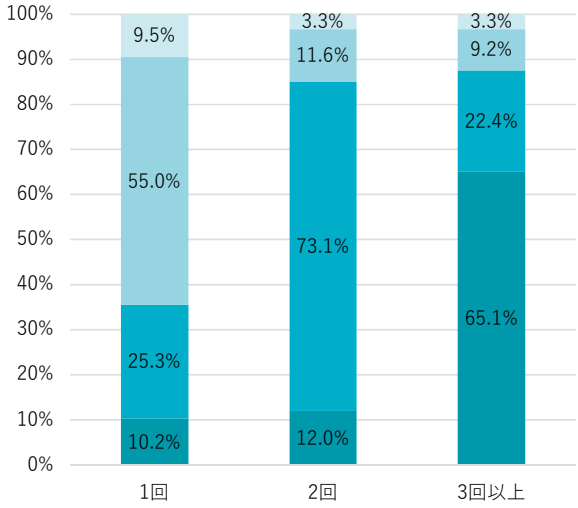


図25　オーガナイザー参加回数と充実感

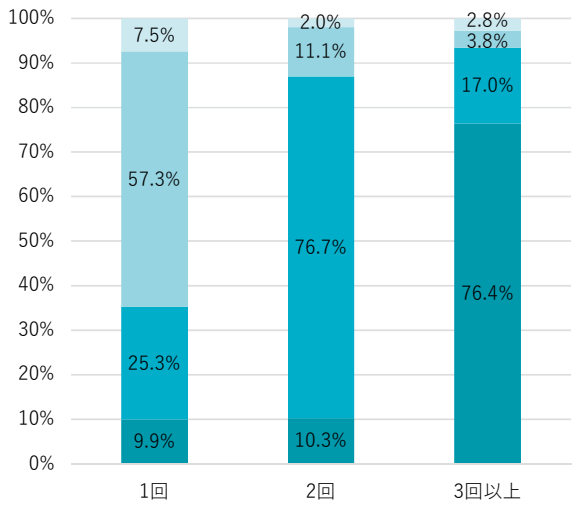


図26　プランナー参加回数と充実感

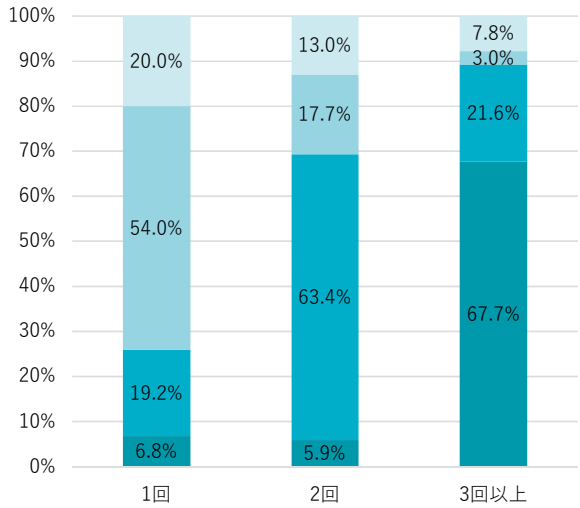


図27　ボランティアの参加回数と充実感

図24から図27をみてみると、T-ACT 活動への参加の仕方がパーティシパントよりはオーガナイザー、オーガナイザーよりはプランナーである方が、T-ACT での活動によって学生生活への充実感が高まりやすい傾向があると考えられる。また、いずれの参加の仕方であっても 1 回の T-ACT 活動では学生生活の充実感への効果は大きくなく、2 回以上の参加によって学生生活の充実感への効果が大きく高まることが示唆される。この傾向は、学生主導の T-ACT アクションだけでなく、T-ACT ボランティアに関しても同様の傾向があると言えよう。

以上、10年間のデータを振り返ってきた。T-ACT の周知率は現在ほぼ飽和状態にあると考えられ、学内周知は十分に行われていると考えられる。T-ACT アクションおよびプランにおける企画申請数や参加者数は、支援開始当初に比較して増加したが、2013年をピークに小康状態が続いている。T-ACT ボランティアについては、2016年がピークであったが、2017年度も引き続き2015年度の水準をキープしている。一方で、T-ACT フォーラムの来室者数は2015年度から増加傾向にあり、今まであまりなかった来室目的（T-ACT 参加にとどまらない課外活動的な相談など）も増えつつある。こういったことから、本学において「やってみたいことがあったら、とりあえず T-ACT に行く」という認識が着実に根づいているとも言えるが、一方では T-ACT を利用しなくとも自分の「やってみたい」を実現させる制度や気風が充実しつつあるとも言える。そういった中で T-ACT を利用する学生は、フォーラムの利用頻度も高く、受けられる支援を存分に活用している様子が見られることから、T-ACT には数多くの学生に浅い支援を提供する以上に、活用したい学生に深い支援を提供することが求められているのかもしれない。とはいえ、「来るものだけ活用すればよい」とするのではなく、より T-ACT の支援を全学的に活用してもらうためにも、一層の周知や積極的に巻き込みに行く活動も必要と考えられる。

T-ACT の支援効果については、様々な役割を行う中で人間力の成長や自己理解の深まりが促進されることが示された。また、回数を重ねることで充実感の向上にも寄与することが示されている。これを逆説的に解釈すると、T-ACT を十分に活用してもらうためにも、複数回の参加や次のステップへの挑戦を促進することが重要であると言える。基本的には短期的、単発的な活動を支援するのが T-ACT の理念であり、続きを強制しないことが T-ACT の大切な点であるが、「気軽に」「試しに」活動してもらう中で次のステップを意識してもらうことも支援効果を向上するためにも大切にする必要があると考えられる。そのためにも、安心して失敗できる環境を保障し、ポジティブな気持ちを感じながら活動してもらえるよう支援することも大切と言える。

７．公開シンポジウムの開催

T-ACT 推進室は、学生のさらなる活動の発展と地域参画を促進するため、筑波大学内外に向けて学生の活動と T-ACT の成果を発信し、意見交換や交流による関連組織との連携を図るイベントを開催している。それが公開シンポジウムと活動報告会である。特に公開シンポジウムにおいては、上記の目的の他にも T-ACT の支援体制を振り返り、今後の支援のあり方を考えるという目的も含まれる。以下に、2017年度の公開シンポジウムの報告を掲載する。

○　開催概要

シンポジウム本会

日時：2017年11月27日（月）15：15～18：00

場所：総合研究棟 A110公開講義室

10周年記念祝賀会

日時：2017年11月27日（月）18：10～20：00

場所：第二エリア 2B111 カフェ マルハバン

玉川副学長による開会挨拶

第２部より 高野氏の発表

○　本会の様子

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）の支援開始10周年を記念して、今年度の公開シンポジウムを開催した。「社会につながる T-ACT ――10年の歩みとこれから――」のテーマのもと、現役の筑波大生やスタッフにくわえ、在学時 T-ACT を活用して社会へと進出した卒業生や T-ACT の支援体制確立に尽力くださった方々をお招きして、T-ACT の10年間の支援が持つ意義を検証した。来場者は本会において、筑波大生30名、筑波大学教職員24名、学外からの参加者16名の計70名であり、祝賀会への参加者が筑波大生13名、筑波大学教職員22名、学外からの参加者15名の計50名であった。

開催に先立ち、本学の玉川信一副学長（学生担当）にご挨拶をいただき、学生の「やってみたい」を応援するという T-ACT の理念をお伝えいただいた。続く第 1 部では、黒田卓哉 T-ACT 推進室員より本会の趣旨説明、T-ACT の支援体制の紹介の後、データから見える支援効果についての報告があった。

第 2 部では、現役筑波大生に登壇いただき、自分たちの T-ACT での活動体験とそこから得られた気づきについて発表された。高野大氏（比較文化学類 4 年）からは、多くの T-ACT 企画に参加し、一連の活動の中で失敗を重ねながらもそれを楽しみ、自分の卒業後まで見据えた「やってみたい」ことを実現できたことが語られた。大草有里枝氏（国際総合学類 3 年）からは、はじめは参加者として、今は代表として活動を続けてきた Omochi Language Club の活動を通じて、代表としてひとりひとりに目を配り、他者をしっかり頼る大切さや、一連の活動と今後の展望が小さい頃から「やりたかったこと」と一つなぎであると気づいたことが語られた。

第 3 部では、卒業生の方々をお招きし、T-ACT での経験がその後の社会での活躍に与えた影響や、在校生に伝えたいメッセージをお伝えいただいた。田中宏明氏（株式会社 HITOTOWA / 一般社団法人まちにわ　ひばりが丘）からは、良いコミュニティとは「楽しい」といった感性的な「核」に集うものであり、感性を重視して企画を進めていくことの重要性をお伝えいただいた。及川直人氏（株式会社ジースタイラス）からは、T-ACT で身につく力のほとんど全てが社会で活躍するための力そのものであり、T-ACT は企業が求める人材を育てる次世代の大学と言えるとお話しいただいた。

第 4 部では、T-ACT 初代コンサルタントである樫村正美氏（日本医科大学）、T-ACT ボランティアにおいて学内他機関との連携強化に尽力された武田響氏（筑波技術大学）、第 3 部より引き続き及川直人氏、本学教育研究科教科教育専攻 2 年生の川邉貴英氏に登壇いただき、司会進行を黒田 T-ACT 推進室員による座談会を行った。他者とつながりを作りながら「やってみたい」ことを実現する T-ACT での体験は、その全てが社会とつながる経験であり、豊かな学びになることが共有された。T-ACT をより多くの学生に活用してもらうために、支援のすそ野を広げる試み（学生同士の巻き込み合い、教員による気軽な活動の創出、学生の動線により近い位置への拠点の移動、活動の必修化など）が提案された。

第３部より 及川氏の発表

第４部　座談会の登壇者

最後に、田中博 T-ACT 推進室長より、本会を通じて T-ACT の10年間の支援を振り返り、その支援の中で安心して失敗できる機会を提供することで学生の成長に寄与できており、今後は支援のすそ野を広げ、より多くの学生を巻き込むことが課題となると総括いただいた。

○　10周年記念祝賀会の様子

T-ACT に関わった方々や現役大学生、地域の方々にもご参加いただき、それぞれの交流を深め、あらたな活動の芽を育んだ。

記念祝賀会のあいさつコーナーの様子

8．活動報告会および企画表彰

2017年度の活動報告会は、T-ACT アクション表彰と合わせて上半期、下半期の 2 回実施した。また、活動報告会にあわせて、活動の奨励を目的に、上半期、下半期それぞれの期間で終了した企画のうち、参加者の人間力をより高めたと評価される企画の表彰も行った。表彰対象としてノミネートされ、活動報告会にてプレゼンテーションを行った企画は、T-ACT 推進室員による選考で選び出された。最終的な賞は、活動報告会でのプレゼンテーションに対する、活動報告会来場者の投票によって決定した（表 5 ）。また、下半期の活動方向会においては、T-ACT で活動する学生へのご支援をくださった教職員へのグッド・パートナー賞の贈呈、特に学生への教育的な配慮を行っていただいたボランティア登録団体への感謝状の贈呈も行った。

上半期の活動報告会は 9 月26日（木）（14：30～18：00）に行われ、下半期の活動報告会は 3 月22日（木）（14：30～18：00）に行われた。上半期と下半期ともに、学外参加者にも多く参加してもらえるよう、つくば駅

表 5　2017年度上半期・下半期に表彰された企画

	上半期		下半期	
賞	承認番号	企画名	承認番号	企画名
最優秀賞	16045A	つくばテーブルゲーム交流協会	17024A	T-1グランプリ2017 ～つくばでお笑いグランプリを～
	17025A	はじめてのにほんしゅ		
優秀賞	16051A	ミニオープンキャンパス	17003A	盆 LIVE2017
			17010A	学生プロジェクト Nature Human Linkage
特別賞	16052A	芸術専門学群のエリアに足湯を作ろう！	17004A	Teens Cafe Vol.2
	17008A	【芸専通信 '17】芸専 1 年の作品お見せします！	17007A	あなたの小説が読みたい！ ――第十回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集――
			17013A	手作りグッズを作る会
サポーター賞	17006A	おもしろ@研究会 ver.2	17002A	Omochi Language Club Spring 2017
ノミネート賞	16034A	Omochi Language Club 2016 Fall	16050A	学校に行けるのはあたりまえ？ ～世界の教育について知ろう～
	16049A	リアル謎解きゲーム	17018A	学校に行けるのはあたりまえ？ ～世界の教育について伝えよう～
	17020A	語り場プロジェクト ～分野 / 学類を越えた繋がりの場～	17021A	ピアサポートでつながろう！ ～みんなで助けあえるキャンパスを目指して～
			17031A	ゆめ花火プロジェクト2017
ノミネート数	9		11	

前の都市型商業施設 BiVi つくばにある筑波大学サテライトオフィス（つくば市つくば総合インフォメーションセンター含む）で開催した。学生、教職員、地域の方々などが、上半期には約57名、下半期には約59名が参加し、学生の活動を学内外に発信する良い機会となった。

９．地域連携への取り組み

○　つくば災害支援連絡会議への出席

つくば災害支援連絡会とは、2015年９月に起こったつくば市の隣接市である常総市での洪水災害を受け、つくば市及び近隣地域で災害が起きた際の災害支援のあり方について、市民活動レベルから考えて地域が協力する体制を整えるため、つくば市市民活動センターが発起団体として開催されるものである。本学からは T-ACT ボランティアアドバイザーの飯島由香氏が参加した。

各回で話し合われた議題は以下の通りである。各団体の連携を保つために定期的に会議を実施している。

【参加団体】

つくば市市民活動センター	つくば市危機管理課
つくば市社会福祉協議会	つくば市消防本部
つくば市国際交流協会	つくば青年会議所
筑波大学 T-ACT 推進室	Tsukuba for 3.11
筑波学院大学 OCP 推進室	つくば市民大学
ラヂオつくば	消防士（アドバイザーとして参加）

【開催内容】

※第１回～第５回は活動報告書2017.June 発行に掲載済み

第６回　2017年10月25日（月）19時から21時

１．各団体の近況報告

２．組織化について

第７回　2018年２月28日（水）19時から21時

１．各団体の近況報告

２．社会福祉協議会との情報共有

以上を通じて、『つくば市被災者支援ネットワーク』と暫定的に名称変更し、つくば市における災害時の際の連携について意識が共有されたと言える。

10．他大学の視察

2020年に行われる東京オリンピック、パラリンピックに向けて、各大学でもボランティアへの関心もさらに高まっている。そのため、今後の活動の充実やボランティアリーダーの育成、地域の連携に向けて、他大学の取り組みの視察を行った。

○　青山学院大学への視察

【日時】 2017年７月12日（水） 14：00～16：00

【訪問者】黒田卓哉、飯島由香

【訪問先】青山学院大学　ボランティアセンター

担当者：ボランティアコーディネーター　澤村隆太氏

①　ボランティアセンターの設立経緯

東日本大震災の被災地支援を目的に、学生が立ち上げたサークル「ボランティア・ステーション」が2011年から様々な活動を行ってきた。ボランティア・ステーションの活動を青山学院大学としても強くバックアップしていたが、大学としてボランティア支援の部署を設ける必要性が認められ、ボランティア・ステーションの運営をしていた学生の意見を取り入れ、大学の一部署としてボランティアセンターが2016年10月に開設された。その際、学生団体であったボランティア・ステーションは「Roote」（ルート）と名称を変更し、学生団体としての活動とボランティアセンターの学生スタッフとしての活動を行っている（Roote 所属学生は80名ほど）。ボランティアセンターは、課外活動のサポートがメインである学生生活部学生生活課に所属している。会議なども定期的に行っている。

開設されて約半年（2016年10月～2017年３月）で、問い合わせも含めた来場者は130団体、個人で131人と多くの問い合わせがある。利用者においても48団体、個人で96人（学外者６人を含む）が利用していることから、

ニーズがあることが分かる。

② 現状のボランティア

ボランティアセンターの通常業務では、ボランティア情報の提供やボランティア団体の活動全般のサポート、ボランティア活動を充実させる為の講座やセミナーの企画を行っている。

ボランティアセンターの募集情報は、学内掲示板の他にも学生用ポータルサイトに掲示しており、サイト掲示の情報は最大で1000件ほどのアクセスがある。ポータルサイトは各学生に ID が設けられ、学内掲示板の役割を担っており、学生が頻繁にアクセスする習慣が定着している。そのため、広報面で非常に効果が高い。

青山学院大学では、国際的なボランティア活動への問い合わせが多く、学生の関心の高さがうかがえる。しかし、海外渡航のリスクや安全性の確保が大変難しい課題である。T-ACT では、留学生などと関わる国際的な活動も活発であるが、海外へ行く活動はほとんどなく、地域における学習支援などの募集や問い合わせが主体である。利用者のボランティア活動への関心は地域性に左右されると考えられる。

また、2017年 4 月より『ボランティア・プロジェクト・サポート制度』という、学生および教職員のボランティア活動を応援するための、補助金（ 1 団体辺り最大10万円）を支給できる制度を設けた。前期 3 件、後期 3 件を予定しており、前期においては 8 件の応募があった。

ボランティアセンターには学生スタッフも設けられており、主に Roote の学生があたっている。学生スタッフとしての活動はセンター主催イベントの補助が主である。しかし、Roote 主体のボランティア活動において、現地のコーディネートにあたるなど、プロジェクトの中心となり、企画から活動まで行っている。

今後の課題としては、地域団体の理解を深める事である。地域団体は、学生の状況をあまり理解していない為、学業への理解、必ず希望の人数が確保できないことなどへの理解を深めることで、地域の土壌を整えて、安心して学生が活動できる環境づくりが必要といえる。

③ ボランティアリーダーの育成

ボランティアリーダーとして、学生にどのような人物となってほしいのか、その教育的な意義は、大学全体で考えるべき重要な事柄であり、現在検討中とのことであった。既存の取り組みとしては、知識の提供という点で、東京ボランティアセンターなどと共催し、危機管理セミナーなどを実施している。このようなセミナーの実施にあたっては、外部の専門機関のみならず、学内の専門知識を持った教員からの協力も重要となる。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けては、青山学院の担当部署としてスポーツ支援課が設立されている。スポーツ支援課が中心となった活動に対してボランティアセンターが協力をするという形で進めていく予定であるという。

④ 海外ボランティアの選定について

海外ボランティアにおいては、グローバル化が進んでいるため、本学でもニーズは多いと考えられる。しかし、T-ACT においては安全性の確保という点において、募集を行ってはいない。青山学院大学ボランティアセンターでは、定期的に行っている活動を中心に海外での活動を継続しているが、訪問国も限られており、新たに海外でのプロジェクトを立ち上げる予定もないとのことであった。これまでの活動を踏まえた範囲で活動を行うことで、安全性は確保されている。また、個人で行く海外でのボランティア活動は、旅行会社と合同説明会を行い、旅行会社からの情報から安全性は問題ないと考えられている。

○ 首都大学東京への視察

【日時】 2017年 8 月 8 日（火） 13：00～14：45
【訪問者】黒田卓哉、飯島由香
【訪問先】首都大学東京　ボランティアセンター
　　都市教養学部　人文・社会系　准教授　室田真一先生
　　ボランティアコーディネーター　足立陽子氏

① ボランティアセンターの設立経緯

ボランティアセンター設立前は、東日本大震災や災害支援などの活動は学内団体が自主的に活動を行っていた。オリンピック・パラリンピックに向けて、東京都からの働きかけがあったことがきっかけとなり、大学側としてもボランティア活動を支援できる機関を強化するためにボランティアセンターを2016年 1 月に設立した。現在、コーディネーター 1 名、事務スタッフ 2 名が在籍し、アドバイザー教員などのサポートを受けて運営されている。

大学内ではボランティアセンターは学生サポートセンター（学生部）の管轄である。会議なども定期的に行っている。

② 現状のボランティア支援体制

活動は3本柱でサポートを行っている。一つ目が、外からのニーズに応えることであり、登録を行った地域団体などから募集を募り学生に紹介を行っている。2016年度の学外団体の登録は94団体であった。二つ目が、内からの活動を支えることであり、学内団体（大学公認のサークル、非公認の団体など）も外部の地域団体と同様に登録を行い、ボランティアセンター管轄の掲示板などに募集情報を掲載し、学生へ紹介を行っている。三つ目が、新たに活動を創ることであり、独自のプログラム（首都大ボランティアプログラムなど）を立ち上げ、ボランティアリーダーの育成を行っている。

学生コーディネーターを採用し、活動の希望者へ学生の立場からアドバイスを行っている。学生の自主性を重視しており、ボランティアセンターへの常駐はしておらず、現在、7名が学生コーディネーターとして活躍中である。自主的に各学生が居場所としてボランティアセンターを使用しながら、来場した学生のサポートをしてくれている。また、毎週ミーティングを行っているので活動においての問題点など自分たちで話し合って改善している。

ボランティアセンター全体の2016年度の利用件数は600件を超え、そのうち、450件は学生による利用であった。

③ ボランティアリーダーの育成

ボランティアリーダーとは社会のボランティアリーダー、自ら動ける、アクションを起こせる人間であると首都大学東京は考えている。アドバイザーの立場として室田先生からは、東京で生きる中で自分の位置づけを感じてもらい、自身が動くことにより東京を少しでも変える感覚を持ってもらうこと、意味のある生き方をしてもらうことをボランティアリーダーには求めている。こういった考え方の中でボランティアリーダーの育成については、「首都大ボランティアプログラム」を立ち上げ、座学や実際の活動を通じて社会のボランティアリーダーになることを目標としている。プログラムは、1年を1ステップとして、3年間継続することで参加修了証、サポーター修了証、リーダー修了証が授与される。

※ 首都大ボランティアプログラム

1）スポーツボランティアプログラム（2016年度参加者：21人）

スポーツなどに関わっている財団などを通じ、スポーツイベントでのボランティア実践を行うことができる。また、対象活動が複数種類あるため、幅広い視点での活動が行える。

2）地域ボランティアプログラム（2016年度参加者：14人）

大学内にある緑地を地域団体の方と一緒に保全する活動を通じ、地域の方とコミュニティを形成していく。一つのことに集中して活動をすることで新たな問題点の提起、活動の展開などが可能になる。

各プログラムは、2段階の事前学習（ボランティアについての概論、プログラムごとの基礎知識や背景の学習）の後に、ボランティア活動を実践している。活動後の事後学習において、活動を通じて得られた学生自身の考えや思いをネガティブ面も含めて振り返り、活動の効果や意義を多面的、多角的に評価し、実感してもらうことで、学生の成長を図っている。また、活動中も密なフォローによって、事後学習に近い学習を行い続けることを重視している。

上記、2校の訪問を通じて、ボランティア活動において広報と学生によるサポートが重要であると考えられた。広報については、各大学の情報収集方法に偏りはあるものの、学生の目に多く触れる機会や媒体を逃さないことによって多くの反響や参加学生が見込まれることがわかる。また、学生によるサポートを得ることで、学生目線でのアドバイスにより参加しやすいと感じたり、学生ならではの視点からボランティア活動への関心も生まれると思われる。そういった点は、T-ACTボランティアも参考にしていくことで、より有効に支援を促進できるであろう。

編集後記

編集後記ということですが、言うべきことは「2017年度実施状況報告　～10年の歩みを振り返って」で言ってしまったので、真面目なことはあまり書くことがありません。なので、主観的で感性的なことを書き連ねたいと思います。

T-ACTの持つ可能性とパワー、それは常にT-ACTを活用してくれる学生たちに主に寄るものと考えておりますが、それがこの10年、様々に形を変えつつも、根っこのところは変わらない力を持っていることを強く感じます。「やってみたい」ただそれだけの単純な情熱の持つ、単純なパワーのいかに強いことか！（そして、その扱いのいかに難しいことか）

その情熱に形を与え、与えられた形から得られる体験はできれば楽しいものに、ついでにそれが学びにつながってくれたら御の字、というのがT-ACTの（むしろ、私の？）スタンスですが、それが学生生活の充実だけではなく、社会に出るうえでの実践的な学びとしても重要性を持っていると確認できたと思います。データの上だけでなく、社会に出て活躍されている卒業生より示されていることに、私自身うれしい気持ちとよりいっそう気の引き締まる思いを抱きました。だからこそ、この支援制度をより多くの学生に体験してもらいたい、という欲も出つつあるこの頃。必要なことは“巻き込む”ということかもしれません。地域を、教職員を、卒業生を、そしてなにより筑波大生を、より積極的に巻き込んでいけるような形を模索したいというのが次の目標です。

アカデミックも強い、プラクティカルも強い、そんな次世代の大学像の一端をT-ACTが示せたら、それは素敵なことですよね。

T-ACTコンサルタント

黒田卓哉

T-ACTボランティアを利用する学生は、T-ACTフォーラムに来室したときから目がキラキラ輝いています。そして、何よりも奥に持っている意志の強さをとても感じた一年でした。学生が地域に出るということは、自分のこれまでのコミュニティから出ていくという点で、不安が大きいと思います。しかし、それ以上に期待が勝っている学生が多くいたことにT-ACTボランティアによる人間力の成長を実感しました。地域団体の皆さんには、そんな学生の考えを深く理解いただき、想像以上に力を発揮できる場を設けていただけて、とても感謝しております。

筑波大学は、地域から“壁”のようなものを感じているという話を聞くこともありますが、T-ACTがその壁を無くせるような場所にしてもらい、学生と地域を繋ぐ場にしていきたいと思います。

T-ACTボランティアアドバイザー

飯島由香

2017 年度 T-ACT 推進室員一覧

		所　属	職　名
室　長	田中　　博	計算科学研究センター	教授　学生生活支援室長
副室長	加賀　信広	人文社会系	教授
室　員	朴　　宣美	人文社会系	准教授
	仲　　重人	人文社会系	教授
	杉江　　征	人間系	教授
	丹羽　隆介	生命環境系	准教授
	中内　　靖	システム情報系	教授
	後藤　嘉宏	図書館情報系	教授
	三輪　佳宏	医学医療系	講師
	李　　燦雨	体育系	助教
	齋藤　敏寿	芸術系	准教授
	田附あえか	人間系	助教
	青柳　悦子	人文社会系	教授
	唐木　清志	人間系	教授
	田中　崇恵	人間系	助教
	黒田　卓哉	学生生活支援室	助教　T-ACT 専任教員
	金井　浩紫	学生部学生生活課	課長

2018 年度 T-ACT 推進室員一覧

		所　属	職　名
室　長	加賀　信広	人文社会系	教授　学生生活支援室長
副室長	杉江　　征	人間系	教授
室　員	土井　裕人	人文社会系	助教
	大友　貴史	人文社会系	准教授
	松枝　未遠	計算科学研究センター	助教
	中内　　靖	システム情報系	教授
	後藤　嘉宏	図書館情報系	教授
	三輪　佳宏	医学医療系	講師
	李　　燦雨	体育系	助教
	原　　忠信	芸術系	准教授
	田附あえか	人間系	助教
	田中　　博	計算科学研究センター	教授
	青柳　悦子	人文社会系	教授
	唐木　清志	人間系	教授
	田中　崇恵	人間系	助教
	慶野　遥香	人間系	助教
	黒田　卓哉	学生生活支援室	助教　T-ACT 専任教員
	葛山　清光	学生部学生生活課	課長

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2018 年 6 月発行

筑波大学　T-ACT 推進室
〒 305-8577　つくば市天王台 1-1-1
TEL　029（853）2222

フォーラムにて打ち合わせる学生サポーター達

T-ACT
つくばアクションプロジェクト

筑波大学
University of Tsukuba